

もウオツカもないのには驚いた。仕方がないからまづい瓶詰の酒と酔曠とで我慢をしながら僕の番にあつた一番年長のおばさんを相手にして話した。

いきなり——あなた赤知つてる——などと云ふ質問に出逢つてメンクラつたが、こちらもさる者——知つてゐるつもりだが、おばさんは赤なのかね——ときくと白で赤だなどと異體のわからぬことを云ふから、僕もおばさんが白で赤ならコツチは黒で緑だと云ふと——ではそのつもりで握手をしようと思つた。忽ち日露交渉が出来あがつた。なんのことだかさつぱりわからない。僕のロシヤ語の智識ときたらせいふくダダとハラシヨ位な程度なのだから。

若い連中はみんな水色や桃色の鉢巻をして怪し氣な日本語で盛んに饒舌りたててゐた。やがて常連らしい兵隊さんの一團が這入つて來たが、シベリヤかサガレンにでもゐたことのある連中だと見えて、流暢なロシヤ語をペラペラやりながら若い女達を相手にし始めた。

ロシヤ美人と云ふと僕は震災前銀座のカフェ ロシヤにゐたりヨウリヤさんのことを思

ひ出す、彼女はさして美人と云ふわけではなかつたが、教養があり、愛嬌があつて、歌もよく唄つた。日本で聞いた中では「天然の美」のメロデーが一番好きだなどとセンチメンタルなことを云つてゐたのもよかつた。プウシユキンやレルモンツフなどをよく讀んでゐたツけ、米國の工業學校へ入る爲めに英語をしきりに勉強してゐた——英語は日本へ來てから始めてらしいが、チキにディケンスなどを讀むやうになつたらしい——しかも、自分ではエンヂニヤアになるのだと云つてゐたから感心だ。日本のウエイトレスにもリヨウリヤさんのやうな人が早くドシくと出て來ると面白いと思ふ。——變にすまして話もロクく出来ず歌もせいふく籠の鳥やストトン程度ではなさけなくなつて來る。もつとも偶には宇野千代子さんのやうな立派な藝術家も輩出するが……なにはともあれ、出かける御客様も好きな人がゐたら盛んにセンチメンタル エヂユケーションでもほどこしてやることさ。

なか屋以外に自分がよく出かけたところは馬道の大黒屋、電氣ブランで有名な例の吾妻橋ぎわの神谷バア——あそこには僕がその昔小學校で教へたY——と云ふバアテンダアがゐる、今では立派な一人前の男になつて切つて廻はしてゐる——僕が淺草漂泊時代には金



がなくなるよとよく最後にはアスコへでかけてY——からウイスキーやブランをロハで飲ませてもらつたものだ。ついこないだも久しぶりで這入つたら、種蒔きの連中が大勢きてる。てダダは早速思ひがけない歓迎に預かつた。

無想庵の「結婚禮讚」の中に彼と辻潤とが銀座をぶらつくところがある。

辻潤が無想庵に——俺は銀座へ來るといつでもエトランゼの氣持がする——と話すところがある。その銀座も今ではかなりフハミリヤアになつた。これも震災の影響の一つだ。

この間、築地劇場を見物に行つて偶々出遇つたI——と歸へりに又とうくアナザア軒をやつてしまひ、電車がなくなつたので、銀座裏のI君のところへ厄介になつた。

その翌朝、僕は始めて銀座の朝湯なるものに入つた。朝湯、朝湯——震災後大阪以來それが始めての朝湯なのだ。大阪にはたい何處でも朝湯が五時半か六時頃には沸いてるのに、東京では或る特殊の關係を持つ土地でないと朝湯は殆んどない。大阪に朝湯ありて江戸に朝湯なし——まったく驚き桃の木サンシヨの木だ。

朝湯からあがつてブラくと歩るき、日本橋の花村でこれも震災後始めて飯を食つた。

私は少々なさけなくも阿呆らしくなつた……世は末だと云ふ感じた。

まさか花村でトンカツやワンタンメンを食はせるやうにならうとはまったく御釋迦様でも御存知あるめい！

曰くトルコ飯、なんとかミラネーズはまだいいとして、蛤のココア煮ため抑もなんだ？

……まるでダダイストの爲めの特製品とでも云ふべき名稱ぢやないか。カフエライオンと云ふと僕はすぐ死んだ安成貞雄君のことを思ひ出す。晩年も彼はライオンの可愛いマドモアゼルなちやんが好きで鳥の啼かぬ日はあつても安成君がライオンに姿を見せぬ日はないと云はれた程、毎晩通つたと云ふ話だ。

そのライオンへ僕はまだ數へる程しか行つたことはないが——バンジヨを抱へたメリケンのボキサアが相手と一緒に踊つてゐる圖などはアスコなどでなければ滅多に見られない。それに貧弱ではあるがピアノとセロとヴァイオリンのエンターテイメントのあるものないよりは遙かにました、なほ更に美しい少女のバレでもあればライオンは一層繁盛するに相違ない。



その筋向かふにカフェタイガアとは皮肉にも傑作である。仄聞するところによると最近——と云つても噂される頃はもう既に一世紀位は経過してると云ふのが常例だが——芥川龍之助先生が屢々出現なし給ふとのことである。

震災前迄にはタイガアの裏あたりたしかドラゴンと云ふ家があつた筈だが、今でもあるかドラゴン？

あれば獅子と虎と龍とが揃つたわけで——コイツを各々嫉しかけて喧嘩をやらせたらさぞ銀座はいやが上にもウルサイことであらう。その他バアロット、ピイコツクなどとまるで銀座は動物園みたいだ。

昔金子洋文は銀座の札幌ビールで生を飲み、須田町のヤツチャ場の中のなんとか云ふ家で天婦羅を食ふのが人生無上の楽しみだと話したことがあつたが、今ではまさかそんなことばかりやつてもゐなさうだ。

震災前だつてさうだが銀座は如何にもメリケンの場末が連想されてならない——全體首府東京と云ふ奴が既に日本のダストビンみたいで近頃では銀座を歩けばへたな殖民地を歩

いてゐると思へばまちがひない。歩いてゐる人間だつて和服は少ない、殊に若い女の人達ばかりみんな断髪だとか耳かくしとかオールバックだとかなんと云つた方が多数を占め、その間にまた本物の異人が必ずどこかしら歩いてゐる。どこの店でも下駄で這入るには不適當に出来てゐる。楽器店だつて日本物を蓄音器でしかせてゐるやうな時代遅れの店は一軒もなく、ラヂオで變な樂隊をきかせてゐる家さへある。ライオンの前では時々ロシヤのおばさんが造花やハンケチを立て賣つてゐる。

どこを歩いてもしつとりとかいんみりとか云ふやうな味はまるでない——それにも拘らず、裏通りには相變らず新内の流しなどが歩いてゐるが……これが下駄の齒入とか猿廻はしとか云ふなら兎に角、少なくとも藝と云ふものなものであるかを解してゐる人間だとすると無神経にも程がある。

こないだも「加六」で飲んでゐたら——あすこの菊正はうめい——隣りから蓄音器がきこえて来る。それがなにかと申さうならばジャズバンドぢやないか、このわたやうに盃の縁を舐めまわしてゐると隣りからオリエンタルやキャラバンがきこえてくるなどは皮肉を



通り越して愉快になる。これでいいんだ。ズン／＼やつて行けばいいのだ。轉落するまで轉落してゆけばいいのだ。今となつては逆戻りは出来ない相談だ。おいてきほりを食はせられる人間は氣の毒だが、若い元氣のいい無茶な人間には到底かなふものではないから／＼／＼場席を侵略されてもいたしかたはあるまい。いつの時代でもみんなかうだが、今はそれが急激に目立つてゐるに過ぎないのだ。

牛込のプランタンと小石川白山の南天堂とは文士や藝術家のリゾオトとして有名だ。文士の消息や文壇のゴシップなどは大抵それ等のカフェの朦々たる煙草の煙りやビールの泡から生れてくるのだ。文學修業の人達は早稻田や本郷の學校へ行くよりそれ等のカフェへ日参した方が早手廻はししかも知れない。

さてこれから女給さんの評判記にでも移れば益々面白くなるかも知れないが、それは自分の柄でもないし、限りある紙數と限りなき帝都のカフェレストオランを如何んせんやだ。(一九二五、三月)

## 幻燈屋のふみちやん

—or Souvenir de Magic-Lantern

It is a sweet thing,

Friendship, a dear balm.

A happy and auspicious bird of calm,

Which rides o'er life's tempestuous ocean" — Shelley.

ひどい宿醉の後、ペンを持つ指先が少しくふるへてゐる。開城の菊慈童から贈つてきた人蔘を煎じて飲んだら、でもだいぶ快方に向ツちやつた。御蔭さまで……  
金剛山の紅葉をしきりに見に来いと、彼可愛ゆき菊慈童は幾度となくおれの顔を見たい



みたいと云ふのだから……

行つたら大洞に船を浮べ彼と一緒に筏を流し、安東縣につきかねてやつたり、駕一葦之輕舟、渺滄海之一粟、哀吾生也須臾、羨長江之無窮を唄つたり、シヤリヤピンになつたり、トレヤドールをマーチしたりしてやらうと計畫山の如きものがあつたがつい夢中に實行して了つたのでな……

“Moon, arto thou pale”と云ふシエレイの詩にほだされて、眞青なノクチユルネを一ぱい浴びて、昨日桃林から舞ひもどつた白蛇と夜びて散歩したら、すつかり幻燈屋のふみちやんのことを思ひ出しちやつたので、その話をすることにきめたのだ。

まだあまり女の話と云ふものはやつたことがないのだが、赤亭の御このみとあれば是非に及ばずだ。

昔フランクリンの自叙傳と云ふものを讀んで、アイツのツラが癩にさわつたので、とうとうその自叙傳がきらひになつて、自分はそんなものは生きてゐるからには絶對にやるめいと思ひ込んでゐたのだが、近頃はどうかやら小ダシに少しづつやつてゐるやうな不甲斐な

no.

どうせやつつけるなら、キヤサノヴの向ふを張つていものでありやす。

小生も文明開化の御蔭様でとうとうゲイコク語を饒舌らせられるやうになつたが、今晚はだいぶおふるいところを一席伺ふことにするのだから、どうしたつて、江戸ッコ訛りでやらなけりやあ納りがつかない。

古渡りの半纏に一本ドッコをきりつと前結びにして、「おいらあ今夜は異人の御馳走だ」とよく代地にあつた萬里軒に出かけた祖父インロオの顔が眼の前に浮んで來る、まつたくおいらあ昔のことを考へてみると先き立つものは癩の種、後から來るもな突き落せだ。癩にさわると僕はいつでも「江戸繁昌記」を引きづり出しては讀むのです。寺門靜軒で

えのは實はおいらのぢいさんで、友達で、先輩で、相棒で、へトセトラなんだ。今のワケイ者はこんな昔の爺さんの名前なんか知るまいから一寸教へて進ぜよう。

Please chisel your ears!

いいクサビだあなあ……



先ツきからオイラは「笥頭舗」を實はひろい讀みしてゐたのさ。つまり今で云やあなんと  
かアーチストと云ふ奴さ、やつぱり立派な藝術屋様のことなんさ。

それ靜軒とイツバだ……

江戸幕末の人なり。靜軒性俊邁落詩を善くし文に長じ名聲鬱然として都下に鳴る、自  
己も亦民間に書を講じて世を終らむ志なりしも其の自ら標すること甚だ高うして俗儒の利  
祿に齷齪たるに慊らず、天保中江戸繁昌記を著し俗話に託して大いに官儒を罵りたるため  
に聚訟一身に萃まり遂に官命をもつて江戸を逐はるるに至れり。逐はれて後は踰躑轉從し  
て八年の間ホヘエムとして風流自適し少しも悔ゆる色なく明治元年二月十四日享年七十三  
にて歿せり。碑は淺草橋場町惣泉寺に在り。

ザットまあこないな先生さんで、今のコイタゴ詩人や、ズイロク作者よりやあ少しは骨  
の堅いお兄いさんなのであります。

## 山 鯨

コイツを原文でコーテイションしていのだがさぞかし印刷屋さん泣かせだと思つたので  
元祖一流の陀々羅翻譯でヤツツケることといたしやせう。

凡そ肉は葱によろし、一客に一鍋、火盆を連ねて供具す。大戸は酒をもつてし、小戸は  
飯を以てす。火がカンカン起つて肉が湧き、漸やく佳境に入る。正にこれ樊噲肉を食ふて  
死も亦辭せず、花和尚醉へり。爭論大いに起る。鍋の價約三等あり。小なる者は五十錢(五  
錢のことですよ)、中にして百錢、大は則ち二百、近歳肉の價やうやく高く、略々鰻と鰯  
す。然もその味はウメイ、且ツ功験の速やかなる人、誰か値を論ぜん。其獸は即ち猪、鹿、  
狐、兎、カワウソ、オホカミ、クマ、鴨鹿等の物がゴダゴダぶらさがつてゐます。ビロク  
の縛せられるところビロク踏々たり、狩らず獵せずして懸れるナマなるを見る。オホカミ  
の如きは刺すに庖刀をもつてせり、蓋し猛獸たる所以なり。一人刀を叩きて之を屠る。手



の觸るる所、足の履む所、カッ然、コロツケ然、シチウ然、ビフテキ然としてゐる。行人止つて觀る。

聞く天武帝の四年に令して始めて肉食を禁ぜらる。病に餌するに非るよりは、容易に食べることも出来なかつた。だから世間様ぢや、薬喰とよく云つてたものさ。ツイこねいだも江都中に薬喰舗と稱する者タツタ一軒、麴町にあつたツけ。レットアスシイ……二十年來此の薬の行はるるや、此店今復ジヨウカンが出来ねえてやうなわけでね……なんとトンカツ屋のグルツペがふえたもぢやあな御座いませんか？カンバンのレットテルには落楓紅葉を畫き、題するに山鯨の二字をもつてせり。薬食にかかると雖も、猶ほ國禁を裂く、作意の爲すところ、蓋しメタホルなり。都人字してチミモンスタアと稱す。亦化の皮をかぶつてゐるのみさ。妖怪と謂ふに非ず、愉快と云ふにあらず、只だ厄介なものたるのみ。先だつて麴町で賣つて居りました肉は苞苴するに必ず販傘紙をもつてせり、みんな竹の皮にしちやうんだよ。則ち都下一歳に幾萬の破れ傘、復お役に立たざればなり。へエン！

Heotoku proverb says — Yoder the Hakone Beacoup de'Obake' と換言すれば箱根からコツ

チにオバケなんかゐるてオタマリコブシがあるものケイ」と。蓋し江都の繁榮の光景を云へる也。タレカ思はん。數百年繁華を極むるの今にして都人此をもつてクイモノとせむと汽車に積み、自働車に積み、一歳は一歳より多く、一年は一年よりおたかくなつてまひります。亦太平の世の御代はメデタキ繁華かな。豈奇ならずや。或者曰く、我よりして之を云へばこれのみ、願ふに其獲らるる彼よりして之を云はば、何をもつてか太平の物とせん。御戲談でゲセウ。曰く、然らず、身を致して仁をなすといふ語あり。苟くも死して益あらば何ぞ遺憾を着けむ。一樹に十の疾を醫し、十の蹄に百の病を救はば功德無量ならむ。思ふに彼れ三たび生れかへりて今の太平中の貴人と爲り、國には梁肉に飽き身には羅紗をかさね、今日は帝劇、明日は三越と、獨り遊宴の樂みあるを知りて、螢雪の苦しめあるを知らず、女色を唯好みて子孫繁昌せん。決しておいらのやうな貧儒の身を飢えしめて書を読み、生死並びに世に用無きが如くならじ、僕等が死んだ時、之を豺虎に投ぜんに彼必ず云はん。一生菜根のみを喫着せる者の、之を食はむにも味なしと、必ず三たび嗅ぎて起たん。予嘗て發願して曰く、尙はくは來世には獸の肉となりて、偏く功德を天下に施



さん。若し人たるを得ば、必ず醫者となりて斯民を命永からしめんと。復又謂ふ。如かず獸の肉のみと。當世の醫風頽靡して、衣の美潔と門の高大と唯だこれをもつて第一義となし、自動車に著乗して病門を巡候するを是れ務となし、意を承けて色を察し、瘁を舐り、湯を嘗め、百も詔ひ、千も佞り、マダムと耳かくしとの心を失はんことのみ恐れて、陰陽五行の何事なるやをも省みず、金櫃傷寒論の何物たるかを知らず、水藥はただ甘からん事を欲し、注射は痛からざらんことを欲せり。吁、この輩の屁の如き百貼の藥を飲まんよりは一鍋の鹿の肉を食はんに如かず、然らば則ち如かず獸の肉のみ、必ずダニモオの肉のみこれ山鯨の人氣ある所以なり。

世人或は曰く、獸の肉は不潔なり。之を食へば穢る。病めりと雖も食はずして曰く、身を汚し、神を瀆かすと、然も安んぞ知らん、自己平生の爲す所も亦身を汚がし、祖先を辱むるの行を爲さざるをや。人にして言を食むは不祥これより大なるは莫し。汚るるも亦甚し。ブルジョアの進取の間には、或は啗はするに貨を以てせり。若し誤つて之を食はば、身を瀆し、君を汚し、不祥これより大なるは莫からん。河豚を食ひて毒に死してすら、名

亦從つて汚る。聞く、近日千人會の錢を食むもの殊に多しと。これ等の汚れは世界に固より多からずとせず、何ぞ獨り獸の肉のみならんや。呵々。

— おい一體君はなんの話をしてゐるのだい。

— 知れたことさ、幻燈屋のおふみちやんの話をしてゐるのさ。

— 幻燈屋のおふみちやんは山鯨が好きだつて話か。

— さうかも知れねえ

— おいらは又なにか艶ボー話かなにくだらうと首を延して刮目期待……。

— しようが、しまひが大きに御世話だ。無理にも聽いて戴かうと云ふ次第でもなかりけりさ。

— では折角だから辛抱することにいたすで御座らう。

私はその頃、日暮りに住んでゐました。それは茅葺屋根の家で、驚くなかれ家賃がタツタ三圓さ。



日暮里などと願くば云つてもれえたくないものだ。ニッポリたあヤキ場のことだとばかり早呑込みをする野郎はまだしも、てんでそんな處が何處にあるのだから知つてゐる奴は恐らくあるまい。勿論、そんなことは知つてゐるやうと知らなからうと自慢にも恥にもなんにもなるわけのものぢやないが……少なくともこのやうな美しい田園が無智蒙昧なワンダルによつて蹂躪されたなあ嘆かほしい至りだ。

花見寺にはおれの小さい時分から大好きだつたお婆さんが埋つてゐる——十錢婆あと云ふ婆さんでおいらが藏前にゐた時四谷から、よくテク〜やつてきては御小遣ひを來るたんに十錢くれたものさ、先づ現今の一圓かな！

大岡雲法て畫描きの姪さ。おいらのおふくろのオヤヂの兄キ位にあたるその畫描きは四ツ谷の天王様の合天井へ六歌仙をベタ〜と描いたことによつて有名だが、アルスブレビスの法則によつて、そんなことを一々覚えてゐる奴は今時あらう譯もあるまい。

日暮里はひぐらしの里と僕等の方では云つてゐるのです。

一體あの邊の界限は僕等とは子供時代からイヤに縁が深い……大方彰義隊の亡靈が己れ

を呼びよせたのであらう。天王寺の五重の塔は露伴道人によつて極めて名高く、高橋おでんがるたり、ムツシユオツベケのあまりゾツトしない銅像が突ツ立つてゐたり、その他枚舉に暇非ず。

俺は少年の頃、總領の潤六で胎毒をウント背負ひ込み、頭に一杯カビを生やかし、専らバイキンの食客を無數に頭に頂いて歩いてゐた。かるが故に笠森大明神の御厄介にととうなつたやうな次第で、おふくろに手をひかれて、御参りに出かけ、歸りには團子坂の菊を見物して、まさか當時ソバは相憎となかつたから——己はおふくろにせがんで、己の大好きな鰻を和泉橋向ふにあつた川升で認めることを習慣にしてゐた。

笠森稻荷大明神 鍵屋阿仙稱美人

土器碎爲土團子 只今唯有煮花新

又 面揖似足

笠守神祠日暮邊 醉中相伴例諸賢



ざつとおがんで御仙の茶屋へ

腰をかけたら澁茶を出した

澁茶ヨコヨコ横目で見たらば

土のダンゴか米のダンゴか

オダンゴ ダーアダンゴ……

先づ一カン貸したり、かされたりして僕は屢々幻燈屋のふみちやんと遊んでゐたものであります。

日ぐらしの里にいれば七面の社あり、衆僧讀經の聲高し。養福寺と云ふ寺には自墮落先生の墓あり。

その先生がおれのおぢさんときてるるからやりきれない。實はそのおぢさん、昔ひそかに島原を抜け出して、ダダイズム宣傳の爲めに江戸へ上京したのだが、名詮自稱の結果つ

いにその志を果さず、今頃になつてヤツト僕の方へ御鉢がまわつて来たやうな次第なのである。しかし一説にはかうでもある。ああでもある。いづれ眺める御月様に變りはないことは昔からきまりきつた話だ。

先生は江戸の人なり。五君に鞍がへして志を得ず。髪をからわに結び、齒をかねに染め、佯狂してハイケイ師となる。庵を無思庵といひ、軒を不量軒と名づけ、齋を捨樂齋と號し、坊は確連坊と稱す。昔の反古二巻をあらはす。その中に歸去來の辭を評して、淵明元レイ金持なるべし。僅かのあれ地をもちて、口をきくこそツラにくけれど、一口にはり込みしいれものなり。

一寸伺ひますが、ふみちやんとやら云ふ別嬪さんはいつ登場なさるんですね。

ウルサイね、なに分素人娘でオボコのボコときてるるから、きまりがミットも恥かしく、チヨツクラチヨイとは出られませんよ、太夫身仕度整ひますればさ——

——氣のなけいへドツコだなあ……

その頃、私は神田の佐久間町の狭い横町のとある家の二階を借りてゐた、そして淺草橋



の傍にその頃あつた日本橋のT小學校に務めて、金拾五圓也を頂戴して暮らしてゐた……  
廢殘のオヤヂは失業して氣が變になり、おふくろは死ぬばかりの大病にかかり、小さい妹  
は年頃をイチケカへツて青いッラばかりして火鉢の傍に嚙ぢりついてゐた。だから自分は  
夜學と家庭教師の内職をやつて黙りくさつて奴隷のやうな生活をしてゐたのだ。  
炎えるが如き二十歳の美青年はあつたら生活の車輪に打ちひしがれて青白くみじめに自  
慰的生活の混濁したモノトオンを泌々と味めてゐた。

神様と、幻燈屋のふみちやんと、藝術がなかつたら僕は勿論自殺してゐたに相異なるい。

そのこの塵だらけな、うすぎたないケチな部屋で、私は生れて始めて始めて物を書いた。

「いぬかば」と云ふのが處女作なのだが、それは「浮浪漫語」の中に收めて置いた。

霜月……日。

これより先き自分は日暮里の花見寺の傍にやつと家らしいものを發見してそこに久しぶ  
りで靜かな生活をする喜びを或る先輩の友達に宛てて報告した。

霜月……日

此處にまへり候てより、早くも二週を閲みし候。又例の道樂よと御笑ひ被遊候はん、小  
生元より覺悟の前、これも孤り身の一徳よと自らほほえみ居り候。破行李一個(兼本箱)、  
机一脚、夜の物、これにて財産は盡き申し候。さて早速新宅の御吹聴申上ぐべく候。  
都の端れとは申しながら、これは又神田の四疊半とはいたく事はかり居り候、夕ざれば  
御長屋のどよみを拜聴し、鱒、秋刀魚の香に噎せ、窓側近き物干の襦袢に照りはゆる夕  
日影を望み、秋の夜徒らに長くして、壁一重なる妙法蓮華經の太鼓に膽玉を消し時にサ  
サ法界の音樂に酔ふ、これにては如何な小生も命、旦夕に逼るが如く感ぜられ候。方々  
勇を鼓し、心を決して、住みなれし四疊半に別離の涙濺ぎたる次第に候。名にしをふ、  
日暮の里と申し候は、少しく風流を解し候輩の杖をも足をも曳くところにて候。小生の  
新宅は千駄木の林と諏訪の森との中間によこたはる谷にこれあり、花見寺へは僅かに數  
町田圃傳ひに螢澤に出で候へば、一條の野川靜かに流れ居り、そちこちに茅屋の隠見  
たし居るさまえも云はれず、今は刈入もすみ、田の面は寂しく候へども、趣はかへりて  
深く、朝未きに、逍遙いたし候はば、千駄木の林に百舌の聲きかるべく、折ふし鳴き渡



る一列の雁など、さすが都の真中には思も懸けず候。わきて小弟の胸躍らせ候は、程遠からぬ岡に昇りて、富士の彼方に落つる夕日打眺むる刹那にて候。秋の氣は澄みにすみ、遠山の姿紺青に際立てるは更にも言はず、薔薇色に匂へる富士の背後に紅の日落ちて、暮色蒼然たる迄の光景。たとふるにももなく、只だ心より心にと申さばたりぬべくや、さるにてもわが心の眼いと鈍く、直ちに深奥なる自然の懐に飛び入りて神祕の一片をも携へかへるすべ知らざるは、至らざる際とはいへさすがに心やすからず候。ああ只だかくの如く申し候のみ、これにて聊さか心慰さめ得られんには、自ら幸多き様に思ひなされ候も、さて、現實は容赦なく何處までも絆纏ふものにて候。花見寺と御尋ね被下候はば、小生の新宅直に相解かり申すべく、才貴にて、名のみ廻り椽垣越に打見られ候。ここしばらく、風來の姿に候故、氣の向き次第御たよりいたしたく候。ここまで、描いた時、まこと君が相變らず目を丸くしながら、「おとうさん、ハガキ」と云つて一枚のハガキを渡した。見ると美少年エイスケ ヨシユキからなのだ。一青年の告白」ありがたうございます。僕の若さにとつてムウアはスチルネル。キエルケ

ゴオ以上に能動をともなふ唯一書です、感謝します。  
一ぶくやりながら傍にある新刊の自著をとりあけて見る——こないだ讀んだバビニの興奮が二重になつておれの頭腦の中を旋轉するのだ、……私は少々バビニやムウアに改めて憑かれてゐるらしいぞ——  
體面！ 郊外の別荘、客間のピアノ、晚餐に家庭に行くこと。かくの如きことは勿論、極めて上等なことではある。けれどそれ等は感情の緊張をも、精神の情熱をも促進しない。そして藝術はそれ自身に於て人間存在の獸性に反抗する絶叫であるから、藝術家の生活はよろしく所謂生活の合宜に對する實際的プロテストであつて然るべきである。過去に於て藝術家は常に被追放者であつた。彼が家庭臭くなつたのは近頃である。その結果によつて判するに、たとへ放浪主義が必然でないとしても、それは少なくとも補助者である。若し長い毛髪や放縦が純粹な思想に對する補助者でないなら、何故、それ等は永く藝術家の特性となつてゐたのか……  
體面が人生から繪畫美を掃蕩しつつある。國民的風俗が消え失せつつある。……そして



日本人さへ基督教徒になり、レスベクタブルになりつつある。三十世紀の半ばに達しないうちにシルクハットやピアノが江戸のどの家にも見出されるであらう。風俗の世界的均一があまりにもほんとうに世界の將來である。そしてモリス等が世界が社會主義的になつた時の民衆藝術に就て話す時、不運な連中は全體何處から彼等のインスピレーションをひき出すことが出来るだらうと訊ねた。われわれの位置は今日ではまことに哀れむに耐えたりだ！ 侯爵でも、競馬師でも、藝術家でも、まるで同じことである。かれ等は同じ仕立屋の衣物を着、同じ俱樂部で飯を食ひ、同じ誓言をし、一樣にヒドイ英語を話し、同じ女を愛してゐる。かくの如き状態はまことに恐ろしい。……普通教育は十九世紀の過去二十五年の天才を既に虚勢した。そして將來の爲めに無限の畸形兒を産出した。教育、僕は君の恐ろしい名稱の前に戦慄する。ネロやカリグラの慘酷がなにか？……それは半球上に於ける僅かの四肢が粉碎されたのみである。しかるに、おお教育よ、汝は生に惱む靈魂の氣狂ひじみた不備の心の悉くの底知れぬ苦悶の絶叫である。ゲエテが「もつと光明を」と云つた時、彼は人間の唇が嘗て發した最も猛惡な破廉恥な言葉を口にしたのである。……

かくの如きものが體面の終りであらう。しかし、その終局は未だ遠遠である。かれ等は今次第に痛切になりゆく頽廢の時代に生活してゐる。舊き神々がわれ等の周圍に倒れつつある。われわれの精神を向上させるに足る何物も残されてはゐない。そして、雑多の壞滅と廢墟との間に残つてゐるのは唯だ Snobbery のみである。感謝す。それが深く英人の心に彫りつけてある。スノブが今、民衆的波浪の上に凱歌を奏して漂ふ箱船である。舊世界の信仰が彼の胸中に休息してゐる。そして彼は洪水が鎮靜に歸する時それを宣言するであらう。

さうかうしてゐる間に、體面は酒場を破壊して、俱樂部を創造した。そして、文學上に媚惑的な虚勢力をふるひ續けてゐる。思想と發想の凡ゆる放膽が蹂躪された。そして凡ゆる習俗性が嚴格に尊敬されてゐる。藝術は單にその時代の一反映であるといふ言葉は千度も繰り返された。まツたくさうだ、唯だある時代が他の時代より面白いのである。だから、よりよき藝術を生むのである。恰かもある季節がよりよき收穫を生ずるやうに、僕等はヌウエルアテネで如何に民衆藝術が即ち體面が、又教育が手工を絶滅したかを聞いた。そし



て更に個人的な藝術——即ち繪畫や詩に於て——人々は常に一つの繪又は一つの詩の爲めに生命を犠牲とすべく見出されるだらうと云ふことが承認された。しかし人間は結局、彼が生存する時代に卓越することが出来ないと同様、全然それに反抗することも出来ない。彼はどの方面からか生活費を得なければならぬ。過去の黙想に耽つてばかりはゐられない。その時外部からの壓迫は潜水者の上を壓する水の如きものである。やがて彼は疲れて呼吸するために水面に浮びあがる。彼は恰かも水中では鱧の爲めに追はれ、水面では猛獸に追はれる飛魚の如きものである。彼は深く沈潜することも出来ず、また彼の自由なつき祖先の如く高く飛ぶことも出来ない。十九世紀に於ける勇敢なる精神は十六世紀に於ける臆病な乳母の靈魂の如きものに過ぎないであらう……體面は社會に巻きついてゐる恰かも一種の蜻蛉である。諸君は何處にゐても、その恐るべき吸盤から逃れることは不可能である。ブルジョアが至上の權力をふるつてゐる。藝術も、科學も、政治も、宗教も悉くその要求に應ずるべく變更せしめられた。ブルジョアがアカデミーに行く、ブルが芝居へ行く。だから今日の藝術は微温な寫實的である。偉大なる寫實の理想は現はれてゐるな

い。單に物質主義なケチ臭い寫實主義、低劣極まる通俗小説の跋扈である。……バルザックの高翔する寫實主義ではなく色付寫眞の墮落せる自然主義である。

なんと思ひあたるのが澤山ござえやせう。時に思ひ出したのは、ある時、本郷の菊富士ホテルに青年を尋ねた際、久方ぶりでモミあけ浩二に出遇つた……モミアゲ浩二でたつて無茶小路君の従兄弟だなどと早呑み込みしてもらつては困りますよ。

——實は昨日あなたの「浮浪漫語」を買つて讀んでゐるところなんです——と、そんなことを彼は云つた。

彼も昔はバルナシアン、増田篤夫等と一緒に、「シレエネ」と云ふ、萩原君なら「月に吠える」と云ふ雜誌までも出した兎に角かなり心懸けはいい方なのだが、マラルメなどを云々するのは少々潜越至極だと僕はその時も一寸感じたことだつた。談、偶々ムウアに及ぶや、浩二先生、あの本は讀んだがあまり感心しませんでした。——と、浩二君などに感心された日にや、ムウア先生もさぞなさげなことになることだらう。すぐれた靈魂は唯だすぐれた靈魂が発見するばかりだと云ふことは昔からの通り相場さ。それだけならいいが、その



後、青年Yに「辻潤は頭がわるく下品で卑屈だ」などと浩二の野郎、飛んでもねえ大風呂敷をひろげやがつた。

全體、おいらは昔から別段君達に對して何ん等の恩怨もない間だ……僕等の入種は由來わかりはいい方で、大抵の場合、三分もいいところがありや相應に買つてやつてゐるつもりなんだ。

頭がわるいと云ふことは錢をとることがへタ糞だと云ふ意味なら、文句なしに頂戴しよう、……まつたく一言もなくあやまるよ。だが、下品で卑屈の方はそのまま君へのしをつけて返上しよう。

今夜は少々おいらの蟲のどころがわるいからもう少々序ながらやつつけよう。

菊地寛や久米正雄などに對してだつて僕は別段なんと思つてゐるわけでもないし、てんで諸君のものは殆んどなにも讀んでゐないといつてもいい位に無知なのだから、どうと云ふことはないが、……しかし、まさか君達が日本の最高藝術家などとは夢にも考へてはるないからこの點は安心してくれ給へ。

しかし、仄聞するところによれば君達はなにかメリケンの下等な商人の眞似をしてトラストを組織し、文壇？とやらを獨占しようといふ計劃ださうだが、萬一それがほんとうの了簡ならコツチにも相當の覺悟位は持ち合してゐないわけぢやない。

と云つて別段、諸君はこわがることはありません、始終云つてゐる通り、僕はイクサ人でも、おまわりさんでもないのだから、人殺しの武器は一切携帯してゐる筈はない、それにおいらは徒黨を組む事がデエきらいだから、ダダ一流の軍法を用ひ、疲勞しきつた頭と一本のペンを持つて孤身敢然と挑戦するつもりでゐたのだ。挑戦と云つたつて、誰かのやうに君達のアラ探しをしたり、揚げ足をとつたり、下品なプロレのやうにサワアグレーブやうなミットも恥かしい眞似をしたら、お江戸の兄いさんのコイツア面よごしだからそんなことは毛頭やりはしないよ。

己れの戦略はこれ以上更に君達を無視して僕独自の道に精進することあるのみさ、ザツツオールだ。

幻燈屋のおふみちちゃん僕は僕のモノログがあんまりながいので、出端を失つて舞臺裏でま



ご／＼してゐる。

芝居があんまり面白くないので見物はみんなたいていなくなつてしまつた。大方今頃は活動寫真か、文藝春秋か、講談俱樂部かなにかを讀んでゐることだらう。それでいいのさ——豚は豚づれ、狐は狐づれ……みんな身分相應にやるがいい。おいらの知つたこつちやねい。

まつたく今の民衆野郎の低脳無智下劣淺薄無作法なのは呆れケヘルが何匹跳ねかへつてもたらない位さ。なんとかは人の和にしかずか、綠雨も筆は一本、御箸は二本、衆寡敵せずと知るべしとは蓋し至言なるかな。

ふみちちゃんは藏前の幻燈屋の娘さんで、僕とおない年だ、つまり幼な馴染で四五歳の時から毎日／＼雨が降つても、風が吹いても中よく遊んだものだ。二人が裸になつてキヤツキヤツ騒いだなどと、よく思ひだしてはおふくろが話す。今でも時々おふくろはどうしたかと云つて心配してゐることもある。

僕は八歳で東京を離れて伊勢の津で暮らし、十一歳の時また東京へ歸へつて來た。その時、僕の家は神田の佐久間町にゐたのだが、やはり元の學校に執着があつたから、そこから淺草の猿屋町にある育英小學校に通つてゐた。そこで再びふみちちゃんと再會し、舊交を温めた次第である。

私は今自分のギタ・セキジュアリスを書かうとしてゐるのではない、若しそれを書くとしたらふみちちゃんは除外されるかも知れないのだ。彼女とはまつたく終りまで友達として交はり、と云ふよりは寧ろ兄妹の如く愛し合つた。後年、彼女に愛人の出來た時、彼女は僕の家で屢々購曳をしたことがある位だ。

一千九百〇三年、一月十日、日暮しの里、思ひがけざりしはふみちちゃんの訪問なり。例の如く家へは無斷で來たのであらう。來たのは九時半頃であつた。すぐ歸へると云つたけれど、とう／＼十一時頃までひきとめて、かへる時は〇君のところへ行く筈なので團子坂のとこまで一緒に行つた。……又十六日に來るとのことである。ふみちちゃんが信者にならうとするのを聞いてA(妹)ちゃんは非常に立腹したと云ふことだ。中々姉さん思ひの人だ



と僕は思つた。

今日は午後四時頃からH君のところに出かける筈であつたのだけれどH君が初週連合祈禱會に出席するので今夜は都合がわるいとのハガキをよこしたのでやめにした。

午後はO君から借りて来たフランスの小説家モオバツサンの短篇(英譯)を読んだ。大方戀愛に關してゐるもののみである。随分しつこい書き方だ、だがよく寫實してあるとでも云ふのであらう。一體、僕などはなにもわからぬ人間だけれど、骨のない主義のない、只世間の人情とかを寫した小説にはあまりインテレストを持つては居らぬ。畢竟寫實一邊を目的としたのは面白くない。

四時半頃、ウォルズオスを手にして散歩に出かけた。太陽はもう殆んど沈まうとして、木々の間から赤い顔を出してゐる。空は中々よく晴れてゐる。風もない穏やかな夕暮れなのだ。僕は例の田端の見はらしに行くともなく行つた。筑波はまだハツキリ見える。少しく赤黒い道の上に紫がかつた色をしてゐた。見渡す限りは平原で、その突き當りは筑波の山々で、眼にさへぎるものと云つては左の方にあたつて黒烟を吐いてゐる王子の製紙會社

のチムニー許りだ。最も前には田端のステーションがあつて二六時中物質的な銅羅盤をあけてゐるが、別に景色を賦するといふ程でもない。此處にしばらく見とれて、ああ詩人など云ふ方々ならばなどと、追つかぬ不平をこぼした。それから家へ戻る前に、いつもの阪の上で富士を見はらす。もう日はまつたく沈んで残映が富士を中心し四方に放たれてゐる。右の方の秩父の山々は今日は雲に被はれてよく見えぬが、富士は手にとるやうにハツキリと頑張つてゐる。ああ、山の中程に白い靄のやうなものが起つて來たと思つてゐるうちにそれが段々這ひあがつて、中途から左の方へ離れてふわり、と飛び出した。雲になつたのだ。實にえも云はれない、富士の景色などは最早、幾度となく見た、しかし見る度毎に新しい感じにうたれる。

廿六日……終日雨降る何處にも行かず透谷全集を読みくらす。文に熱あり必ずしも美なりと云はず必ずしも壯なりと云はず文は生命なるのみ。徒らに文辭を飾りて凡眼を悔ますのは文士の能に非ず直に人心の琴線に觸るるものこれ最も重んぶべし。即ち Heart to heart とも云ふべきなり……



27th:—It rains all the day, and very cool. I was obliged to go to the Buddhist Temple, being the funeral of our neighbour, a farmer of 70 years old; spent in reading this afternoon, neglected my daily lessons. Pleasure have I not, but sorrow. Idleness is the good opportunity in which Temptation comes; I know, but still I am spending all the day idly. There must be some reason why I am such a fool in these days.—and I can not dare say the reason, though I know it well enough. Ah! Weak is the mind of human. Weo to those who have cool head, and heart! Blessed be those who have human passion, love & sympathy!

(218)

その時分ふみちやんは家で幻燈の畫を描く手傳をして、一日と十五日の休みを樂しみに  
淺草からわざ／＼日暮の里まで尋ねて來たのであつた。勿論、電車も自動車もあらばこ  
そ。

二月三日

朝來飛雪霏々たり粉々たり坂の上まで雪見んものと立ち出で下駄を切りして洗足と

なりてかへる馬鹿者は予なり雪見には至極景色よき所なり一昨日叔母のところへよこし  
たる書面によればふみちやんは今日來ることなりしがこの雪故到抵來たる勇氣ある  
まじ否、家を出すまじ又來たりとて別にこれぞと云ふ用もなければ(隣りの桶屋の妻君  
「よつほど用でもなければねえ——」)と。

炬火にあたり雜書くりつつ胸の中にてやたらに批評を逞しくしてゐると門口に雪をは  
たく音してやがて傘をふるふ音もしけり、母は立ち出でて思はず「あらふみちやん」と  
叫ぶ多分意外なるに驚きしなるべし予も君が約束をなみするが如き人にては非ざるを知  
れり然れども今日はまさか來たるべしとは思はざりき余は君の親切決して忘れまじと心  
に誓へり君寫眞を余の爲めに持ち來たれり「奇々妙々」どころにてはなく中々よくとれた  
り話としては別になけれど時の過ぎ行くを知らざりき四時頃共に家を出ず雪は猶やます  
益々激しく降りつつあり

予は叔母(本郷)のところに行くなり無縁坂にて別かる。

今夜叔母のところへとまる叔父に大磯の話しを色々ときかせらる。

(219)



ふみちやんスふらぐめんたる・れとる……

文ふみして申上まをしあけさふらふたさいま候きんじやうつかまつ 只今は參上まをしあけさふらふたさいま仕しり厚あつき御待遇おもてなしに預あづかり誠まことに喜よろこばしく存ぞんじ候きん其節まそのせつ私わたくし事こと突然とつぜん御暇おひとまを申まをしさぞかし失禮しつれいの者ものと御立腹ごりつぷくの事ことと存ぞんじ居きり候きん實じつは俄にはかに持病ぢびやうの胸痛じゆいたを覺おぼえ堪たえがたく失禮しつれいをもちかへり見みず御暇おひとまを乞こひ仕しり知邊しるべへ立たち寄より服藥ふくやくいたし候きんと少すこしく心地こころよろしく相成あひなり無事ぶじに歸宅きたくいたし候きんまま憚はざかりながら御安心ごあんしん下くだされ度右たくみぎの次第しだい御叔母おいおんおは様始はじめめ皆々みなくさま様へろくく御禮おれいも申まをさず御前おんまへ様より宜よろしく仰おほせ聞きけられ下くだされ度御願たくおねがひ申上まをしあけさふらふたさいま候きん私わたくしも御前おんまへ様にはいろく御話おはなしを承うけたまはりたく存ぞんじ候きんへども只今ただいまも申上まをしあけし通とほりに御座候ござさふらふまま悪あしからず思おぼし召めし下くだされ度候たくさふらふ。あなかしく

潤 様 へ

美 より

わざくこのやうなことを申しあけるのでは御座ございませんが御立腹ごりつぷくもやと一寸申上ちよつとまをしあけさふらふ候きん

私わたくしも度々たびく御尋おたずね致いたしたいのですけれど御親戚ごしんせきへまで御伺おつかまひ申まをしてはあまり厚あつかましく自分じぶんながら氣きがとがめていけませんですから余あまり伺うかひませんから悪あしく思おもはないで下くださいその變かはり御宅おたくへは相變あひかはらず度々たびく伺うかひますよ私わたくしは御存おんぞんじの通とほり禮儀れいぎ作法さほうなど少すこしも存ぞんぜず失禮しつれいの振舞ふるまひも度々たびく御座ございますやうから御馴染おなじみがひに許ゆるして下ください

じゆんちやん貴方あなたが度々たびくおつしやる通とほり私わたくしとは親友しんゆうと思おもひ召めし下くださいますか私わたくしはあなたを厚あつく信用しんよう致いたしてゐるのですからあなたも私わたくしと永久えいきうに交まじはつて下くださいこの事ことは是非ぜひ御聞おきき濟ずみを願ねがひたいのです

胸痛むないたはもはや快よくなりましたから御手紙おてがみは下くださらなくつてもよろしう御座ございますよ

ふみちやんは生うまると間まもなく生うみの母親は、おやにわかれ、その人ひとの、つまり叔母おはさんに育そだてられて來きたのであつた。



文して申上候御前様には時候のおさわりも無之御出遊ばす由誠に喜ばしく存じ候

本郷なる御叔母様にも御變りなく暮らし居られ候や一寸御尋ね申上候

文に書きては思ふ如く書けませんから御話のやうに書きます仰の如く一昨日の雨には驚きました丁度あなたが學校へ御出かけになる頃でしたねさぞかし御困りでしたらうと思ふて心配いたして居りました

昨日御前様の許より御手紙下されし由妾相憎不在にて今迄に番頭より私に渡して來たのですが少し事情があつて昨日から居らないのです其れですから折悪しく父の手へ這入つたのです父が讀んださうです今迄御前様と往來してゐた事は父には話さなかつたんです母は知つて居るんですが打明ければよかつたんですが父の心中も如何と思ふて其れに父は御手紙の來た事をかくして私に渡して下さらなかつたものですから私は知らなかつたんです今日忙がしくもなきに(註これはふみちやんが家で手傳ふ幻燈の畫の彩色をする仕事)仕事(ふみちやんが外へ習ひにゆく裁縫のこと)は休むやうにと云ふのです私も不思議に思つてゐたんです先日から今日は御出になるか明日かと日々心待ちに思ふ

てゐたんですそれから若しやと思ふて父の不在を幸ひ方々さがしたんですすると机のいきだしに貴方からの書面がありました是れはとんだ事が出來たと思つてやがて讀み始めました相變らず潔らかなる文章にて少しも汚れたる思想はなく先づよかりしと父も文章にて貴方の人となりをきつと覺つたでせうと私は却つて嬉しく思ひましたですが親は先きから先きを心配到すものですから今日も私には行かぬやうと母を姉の家へ使にやつたさうです母の云ふには潤ちやんの氣質はよく知つてゐるけれど其處は親故心配してゐるなれば以後はあまりゆかぬやうにと母の心も察し是れから二度ゆくところは一度とします私の不行届からこのやうな勝手なことを申しあけては誠に相すまぬ譯ながら書面はこれからは是非父の手に這入りますからよしませう貴方に對して申譯なく何卒妾の罪御許し下されんことを切望いたして居ります貴方と私との交りは互の心に疚しいところは無いのですが他の者はみなさうは思ひません青年の男女が同席してゐても直ぐ疑ぐります其れ故貴方は相方の爲め絶交すると仰せにでもなるだらうと思ふて私は非常に恐れて居ります私は只だなにとはなしに御懐しく思ふ者ですから御迷惑をば願ひみす度々伺ふので



す其れで御話しもなく只々貴方の家にて終日暮らして歸へるのが何より樂しみなのです  
其れより樂しみはないのですから私の心を憐れと思し召していつまでも今迄のやう  
に交はつて下さい私は心中を打ち明けて慰さめてもらふ方は貴方より他にないので今  
日手紙が父の所より出た時は非常に狼狽しました幾分か顔の色も變つたでしょう實に心  
配しました其れはわづかのまでしたよくよく考へれば別に恐れる事はないと思ふて父が  
尋ねたればかくさずに打ちあけやうと思つて心の中で準備してゐたのです父の前へ出て  
少しでもまちがつた言葉がよどんでは後ち／＼迄相方の爲め悪からんと淀みなく云へる  
やうにと神に祈りました(笑つてはいやですよ)……………貴方の御手紙まだよく拜見  
たしませんが一青年が華嚴の瀧へ投身せしことが書いてありましたね私も一昨日でした  
か讀みました實に暗涙に咽びました前途有望の青年は「不可解」の結果實に悲惨なる最後  
を遂げたと……其時私は實に残念に思ひました若しあなたのやうな信仰をもつてゐる方  
が御友達でもあつたら或は無事だつたのかも知れないと思ひます母御弟妹のなげき叔  
父様の御落膽は如何ばかりぞ心中御察し申して氣の毒なり

まだ申し上げたきこと澤山ありますが思ふ半分も書けませんから今度御面會の節御心に  
掛けずにて下さい只々知らぬ者ですから御返事も差上げないでさぞ貴方が變に思し召  
して御出でしょうと思ふて遅くなりし原因を一寸申上げたのですなにもかもあなたに隠  
しませんからその積りでゐて下さい

御宅へ(私はその頃本郷の叔母のところへ厄介になつてゐた)御出の節は御兩親始め御  
祖母様(十錢婆さん)へ宜しく本郷の叔母様へも御同然に願上候

愚妹より

私の敬愛する

兄上様へ

心の中がゴチャ／＼してゐるのですから切れ／＼になつたり前後してゐるところは豫  
め御推察願ひます貴方の御腹立なきやう御壯健に御務めに従事せられんことを御祈り申  
上候。



私はその頃日暮の里から日本橋の呉服町にある會文學校といふ私塾に雇はれて往復歩いて通つてゐたが、あまり遠いので閉口して本郷の叔母のところへ寄寓することになつたのだ。午後二時頃から夜の九時半頃まで働らいて月給がたつた九圓とは嘘のやうな話だが、なんと素晴らしい月給ではあるまいか……

私のその頃の日記からの断片。

池田君(ふみちやんこと)に書面認め申し候。三時頃漸く學校に行くべく出かけ候。夜は圖書館(上野)(註、私は始め二時頃から五時頃まで三圓の月給で働いてゐたのだが夜學を引受けるやうになつてから九圓もらふやうになつたのだ)にてシヨウペンハウエルを讀み申し候。苦痛は人生の第一義なりとは氏の意見にて候。眞の幸福とは唯だ苦痛を脱却するにあり。それ以上に幸福と快樂とを求めて世の多くの人々は不幸と困難を醸し居るにて徒らに空想にさまよひ、醒めて後初めて苦がき益を味ふものなりとの事にて候。報知新聞に藤村君の記事掲載しあり、君が正兄に宛てたる書面の最後に「人生これ悉く涙」

の文字これありしとの事にて候。(二十七日)

又ある心の友に宛てたる尺牘。

十一月三十日

今日は幸ひ一日の休暇を得候ものから、南樓の日當りよき處に座を占めボウを繙きて切りに幻想の後を追従致し候。薄倖彼が如きはけに少ななるべく序に醫師モランが彼の最後録せるもの讀み候時は覺えず戰慄いたし候。わが抱一庵、綠雨の徒が最後の如き到底比すべくも候はず、孰れ詳しき事は折にふれ申し上べく、尙彼に對する兄が御意見の程も伺ひたく存じ居り候近頃ボウに心酔いたし居る故にや、昨夜も快からぬ惡夢に襲はれ候、シーンは夢中の事とて何處とも定めがたく候へど、とある陋屋の一室と存じ候。うるはしき天長節の朝にて、そことしもなく兒等がうたふ唱歌の如きものきこえ、心の長閑なるさまは春の朝かと疑はれ、かかる平和のまたとあるまじ、など獨りいひ知らぬ想に耽けり……暫時は時の過ぎゆくをも知らず。不圖耳元に何物かの呬やく聲きこえ我



にかへり候時は、自から黒き装ひせる一冊の書を手にいたし居るに氣付き候。書ば申す迄もなくボウのそれにて、開くともなく我は「魔の島」なる一篇に注がれ候。麗らかなる小春の日影とみに曇りそめ、空は鈍色に黄ばみ四顧の氣重々しく濕り、頭と云はず、顔といはず、怪しく熱り來り候。と見れば前栽の菊の鉢いつしか悉く顛覆され土に塗れたる花の姿哀れに痛ましく、これ又如何なる事にやと打ち惑ひつつも眼は書を放れず。

『この島の東の端れば、永劫に眞暗の蔭に包まる。陰鬱あたりを領すれど、萬象の美は靜かなる彩を帯べり。樹木は枝葉悉く地に首垂れ、その態愁ふるが如きは、無限の悲痛に悶ふるにも似たるかな。茫々たる千草の色は沈める松柏のその如く、墳墓の如き岡遠近にほの見ゆ……』

讀みゆくともなく、我は暗黒なる夜の翼に蔽はれ地を放れて何處ともなく、翔けりゆくが如し、今し『時』の白壁に『運命』の二字生々しき血汐をもつて書かれしよと見るまに、天使が旗紅に炎え、果は寸断くんに破られて、そこひなき深淵に葬らる。かくの如き

無數の幻にせめられ、身も魂も綿の如く倦み疲れ、終に力盡き、眼眩めきて何處の涯とも知らず、轉々落下しゆくよと惟ひて眼醒め候。醒めての後も身内慄のき、額に玉の如き汗したたり居り候。嗚呼、信なき者の心は實にかくの如くに候哉。されど我が心詐らんに由もなく、このまま他界に移りゆかんと計られず候。幸ひ兄の如き友のありて、かよはき我を慰さめ勵まし給へばこそ、微かなる理想の光りを認めて、相應に努力精進及ばずながらいたし居るにて候。

色々申し上げたきこと有之候へども、夜もいたく更け候へば、これにて御免下され度候。明日より愈々忙がはしく相成り候故、當分は御無沙汰に打ち過ぐるやも知れず、御含み置被下度候。妹よりもよろしく申し居り候。なほ折々の御消息切に待上候。

ふみちやんは家庭の事情からと、自分の兼ねての意志から、經濟的獨立を得ようとしてやがて神田の簿記學校に通つてゐたが、間もなく貯金管理局の試験に及第して、其處へ通ふことになつた。彼女にはその頃から一人の愛人が出來た、それはもとふみちやんのとこ



ろにゐる人だが、その頃、近衛聯隊づきの兵隊になつてゐた。日曜日にふみちやんは、よく一人で、若しくは、愛人と二人で、私の借りてゐた佐久間町の二階を訪れて来た。

愛人は兵役をすますと、間もなくふみちやんと同棲して、同じ役所に通ふことになつたらしいのだが、その時、自分もかの女達と同様、現實の桎梏にいたく責め苛いなまれてゐたので自然往復が少なくなつた。

間もなくかれ等は朝鮮に渡り、京城の役所に務めることになつて音信はしばらく断絶した。私は重荷を背負ひながら都會をアチコチと轉々し始めた。

この間六七年の歲月経過。

自分は失職して染井の小やかな家で野枝さんと同棲してゐた。

ふみちやんは久しぶりで朝鮮から東京へしばらくの休暇を得て歸へつて来た。愛人は病ひを得て別府の温泉に静養を試みてゐた。二人の間に子供のないことをふみちやんは寂し

がつてゐた。彼女はどこできいたのか私の住んでゐるところを探して訪ねてくれたのであつた。その時野枝さんは留守であつた。

私は久しぶりで染井の墓地の方から王子の方へぬける静かな谷をふみちやんと二人で色々な追憶に耽りながら歩いた。ふみちやんは京城で一生懸命働いたと見えて、身なりもかなり立派でなんとなく落ち付きが出来てゐたやうだつた。私は無収入で恐ろしく落魄し、慘憺たる様子をしてゐた。その時、ふみちやんはかなりの金を僕の母に置いて行つた様子である。

なんにも知らない野枝さんは突然異性の訪問客に接して、遽かにヒステリーを起して泣くやらわめくやら、僕は手が付けられず、折角訪ねて来てくれたふみちやんに對してなんと申しわけをしてよいやら途方にくれた。

ふみちやんは氣の毒がつて、早々歸宅した。私は名残りが惜しまれたので駒込からせめて上野まで見送らうと云つたので、野枝さんはどうしても僕一人では不安だと思つたものか一緒にゆくと駄々をこねたので仕方なしに野枝さんと二人でふみちやんを見送つた。電



車の中でも僕等は變にしらけきつて御相互に無言の業を續けるより仕方がなかつた。野枝さんは膨れた顔に涙をためてぶりくしてゐた。自分は恐ろしいデスイリュウジョンに襲はれて別のことを考へてゐた。

それから二三日して、私は朝鮮へかへるふみちやんをやはり野枝さんと二人で新橋驛まで見送りに行つた。その時、久しぶりでふみちやんの姉さんや妹にも遇つた。性來内氣なふみちやんは野枝さんが一緒なので遠慮したのか思ふやうに口をきくことも出来なかつたと見えて黙つて悲しげな顔をしてゐた。

ふみちやんの姉妹達は僕等のみすほらしい姿を憐れむが如く、蔑すむが如く見やつてゐた。

これが昔、自分達が借家をしてゐた大屋さんの坊ちやんのなれの果てかと……

柳の街路樹に燕が飛びかひ、夕暮におほわたと蝙蝠が飛ぶ。……大晦日の晩には松が一本くばられ、月夜には影やトウロクジン、牡丹餅は錠齋屋にある。若し今日が二十八日ならば明日は必ずおかめの團子の日なのだ。犬が歩けば棒にあたり、虎をふまへてゐるのは

即ち彼國戰爺和唐内、チンワン猫ニヤンチュウ、金魚に放し龜、牛モウく、高麗狗に鈴ガラリン、鳥居におかめに般若にヒユウドンチャン、大寒小寒山から小僧が飛んで来る。ツイツイツコロバシゴマミソズイ、俵の鼠が米食つてチュウ、鳩ボツボに立石イシ燈籠テテシヤレテテシヤレ山王様の御猿さんは赤いオベベが大好好き先づく一貫貸したりかされたり……

さて、坊チャンは自由の權利でヤツツケロ……!



## 陀々羅行脚

——恥を知らないのが彼の天分——

1

一九二三年の春のこと。

元來この旅行記は去年の夏殆んど半分以上書いたもののだが、震災で失はれ折角の感興がどこへか消し飛んで二度と再び書く氣はしないだらうと考へてゐたものだ。

なにしろ紀行文などと云ふものを書いたことはこれまでに一度もなかつたのだ——文學に首を突つ込んでから約三十年——紀行文はおろか小説だつて詩だつて脚本だつてなに一つ満足に自分はまだ書いたことがないのだ——近頃の若い連中のやうに二三年小説や詩集を讀むと——すぐと詩を作つたり、創作をやつたりする人達を見ると自分は唯だ驚嘆するばかりだ。

——時代の差と云ふものはかうも恐ろしいものなのだらうか——まるで自分などは態度がちがふ——その潑刺として如何にも無雜作に猪突的な勇氣には感服の他はない——自分はだからと云つて決して自分に失望してゐるわけでもなんでもない。たとへ如何にリデイキユラスに見えやうとも自分は一介の文學老書生として自分だけの世界を開拓して行く他には道がない——永遠の文學青年で結構である。なにしろ物知り顔や、他人に教へるやうな態度は一生とりたくないものだと思へてゐる。

昔讀んだ紀行文で、露伴の『枕頭山水』や、花袋の『南船北馬』や、眉山の『ふところ硯』などが臚ろ氣に記憶に残つてゐる。なかでも『枕頭山水』などはかなり愛讀したものだ。しかし自分は小學校の作文でおきまりの燈下のもとにてこれを記すと云つたやうなもの以外に紀行文らしいものを一度だつて書いたことはなかつたのだ。恐らくそんな風なものを書く柄に出來あがつてゐないのだらう——ところがどうしたハヅミか去年の夏旅から歸ると早々その柄にもない文章を書いて見ようと云ふ氣持が珍らしくも起つたのだ。旅先で寝つかれない晩には度々歸つてから紀行文を書く空想をあれこれと考へては樂



しみにした位に去年の旅は面白かつた——途方もなく愉快だつた——旅愁なんかなくてもを殆んど一度だつて沁々と味ふ暇のない位に眼先きが猫のそのやうに轉回したものだ。

元來が豫定や、計畫や、目的を定めて旅などをしたことのない人間なのだが——去年の旅は多少それに類似したものがあると云へば云へる。

第一は四年前、比叡山で僕が命懸けで——これは文字通りだと思つてもらつて差支ひなからう——惚れた僕の『永遠の女性』——一名ランテンライン又の名を白蛇姫と申し奉る——のおつかさんに遇ひたかつたこと。

第二は、一昨年の夏から僕と同棲してゐるK女の里親に初対面をすると同時に僕に、免じて勘當されてゐたK女の歸參を懇願に及ぶこと。

第三は精神と肉體とを消耗し盡して故郷に病臥してゐる高橋新吉を見舞つてやりたいこと。

先づこの三つが目的であつたと云へば云へるのだがセチ辛い今の世の中にこんなことを目的にして旅行するウツケた人間は恐らく自分位なものかも知れないと思つた。

第二と第三とは多少目的らしく受け取られないこともないが第一に至つては自分でもサツバリわけがわからないのだ。

失戀した女のおつかさんに遇つて全體どうしようかと云ふのだね？まさか三年も経つてから今更馬を射たところで始まるまい。

實際、馬や鹿を射たところで始まるわけのものでもない、よし又始まつたところで『永遠の女性』ときたらなんと手の出しようがない。

第二の『僕に免じて』と云ふのも随分と可笑しな話だね、凡そ世の中が如何に珍變奇異な現象を呈して來たとは云へ、ダダイストに惚れた功德によつて勘當を許される娘などは前代未聞だね——

どうもさう眞正面から突つ込んで來られては困る——言葉には色々ニューアンスと云ふ奴があるよ——君のやうに言葉を機械扱ひにされてはやりきれない——法律のバケ物ぢやあるまいし——誰れがダダイストに免じて娘の勘當を許すやうな親馬鹿チャンリンが今の世の中に存在してゐるものか——



わかつたよー同時に娘を可愛がらない親がこの世の中に存在してゐるだらうかと云ふロ  
ジツクだねー  
うるさいなあー

第三だけがどうやら世間並の目的として及第點にありつけさうである。

2

一九二三年、十一月の末頃のこと。

福岡の古間と云ふ青年が手紙をよこした。―僕のところになつて偶には『先生のお書きになつた』奴に感服した位なことを云つて来る青年はある、だが未だ嘗て女性からそんな風な手紙をもらつたことのないのはどうも變だ、と別段變でもなんでもないことを考へてみる當人の方が餘程變だと云はれても即妙の返答は出來かねるが、そんな手紙をもらふ度に自分はいつでもそんなことを思ひ出すのである。

やつぱり女から手紙をもらひたいのかねーとひやかされても、僕はムキになつてそれに

答辯するだけの勇氣も自信もありはしない―そりやあ野郎からもらふよりは女からもらつた方が嬉しいにきまつてゐるからだ。

古間と云ふ男の手紙はだがり方サツバリと投げやりのところが僕の御氣に召したとみて。三度に一度位は返事を出した、ところが仲々の暇人と見えて、それからと云ふものは度々長々と色々なことを書いて來た。―要するに同人雜誌でも出して、粟よくばそれを賣つて生活が出來れば結構だ位な夢想家なのだ―自分だけはすつかりダダになりすまして本家の僕や高橋を同人にして大にダダを蔓延させやうと云ふ計畫なのだ。

彼の自己紹介によれば

『―故郷を出て八年、流れくつて落ち行く先は…十月の初め私は又も僅か百日たらず東京生活にアバヨをきめ込んで福岡へ漂流して來た。東京にゐたつてしようがない人間だ、田舎に來れば猶更仕末におへないやくざなこの體一つを持ってあまして安下宿の二階に三年越し拾一枚で寒さにふるえた。』

『私はかうして殆んど何一つする事もなしに八年越しの浮浪生活を持ち續けて來たが…』



さうして私のかうした生活がとりもなほさず私の周囲の人々に迷惑をかける事になつたものだが、私は表面……徹底的に一切を斥けてきた。

『それはわがままな無能と、この弱い肉體で背景に規則だつた學歴なしではどう仕様もなかつたけれど、猶私には特權者や、資本家の道具になりたくないと言ふ三ツ子の駄々氣分から離れ切れなかつたからでもある。

『私が東下りをしてから間もなく私の父は福岡の大學病院に擔ぎ込まれた。私の父は小さな時から水飲み百姓に育つて一生を文字通りに血と汗で働きた……物質文明がドエライ貯蓄の方法を教へてくれた爲め、父は食ふ物も食はず、着る物も着ずに食ひ餘し、着残しの財産を溜め込んで来た、それは僕にとつては一つの道樂に過ぎなかつたけれど、それだけ親子でありながら、私などとは随分かけ離れた世界に住んでゐたものだ。同じ一つ家に住みながら、絶望的に親子としての情愛も家庭的團圓も微塵も味はれず、始終墓場のやうな陰慘な匂ひが漂ふて暗闘の稻妻は呪のやうに閃めいてゐた。

『だからと云ふ譯でもなからうが、私は始終戀愛の對象を異性の間に求めあこがれてきた。さうして少しでも異性の對象が見つかるとすぐにその女に戀心を炎え上らしたものだ。一度だつて私の戀が満足に育くまれた試しはない。それは私がたいい自分勝手なイリユウジョンを當の女に投げかけてその女の中に自像を發見し得られなかつたからでもある。

『私は自から求めた手傷に怒り狂ふて次第に女を輕蔑し出した。それは結局、私を自己否定に迄逆かのほらせた。さうして私のニヒリズムが社會を〇〇し、女を〇〇〇〇凡ゆる既成の觀念を追ひ散らす中にその反動として私は淫賣婦を謳歌した。』

先づ大體、かう云つたやうな調子の男だが彼のデスベラ（これはプロレタリアをプロレと云ふやうに、英語の絶望と云ふ言葉を略したもので僕等の間で近頃使つてゐる合言葉だ）は彼の痼疾と境遇からきてゐるのだ。

二十歳前後に四五度咯血して、病院へ三年あまり入院し、それでも生命だけはやうやくとり止めて生きてゐる人間なのだ。それにもう一つ厄介なことは、この男のオヤヂが死んでから弟思ひの善良な兄貴は彼の生活だけは保證してくれてゐると云ふことだ。だから、



従つて生活の上の餘裕が出来、職業の上のヨリゴノミを云つてゐられる贅澤氣分が何時でもこびり付いてゐる。尤もこんな病氣を持つた男は社會的生活などはやらす、どこかの保養院かなにかに引つ込んでゐる方が相當なのだ―おまけに自分は何時死ぬかわからないと云ふ不安が絶えずあるから、人生に光明を發見しようがない、更に病氣特有の性欲の強烈な刺戟に悩まされてゐるから耐つたものではない。

こんな連中がニヒリズムやダダに共鳴するのはあまりに當然で不思議でもないかはり、一向面白くもない―

『勿論、私の詩なんてほんの氣まぐれ者のデタラメに文字を並べ立てたものに過ぎない、詩ばかりではない。私の本然が氣まぐれ者でダダと銘打つて出る程の人間だ。』

『私は自から詩人だとも、藝術家だとも思つてはゐない。まして行く先々を文士として乗り出さうなんてそんな大それた謀反氣は夢更々にない。』

『それはそれとして私にはどうだつてよい事だ―が、よくないのは私が今無聊に苦しんでゐる人間だと云ふことだ、戀もしきれず、仕事（食ふ爲めの）も出来ないで、生きる事に

倦んでゐるヤクザ者だ。なにか今日一日のわすれな草でもつまぐつて行かなければ性慾にだけでも堪へられない。それには同人雜誌の編輯位が一番適當だとズツ以前から考へないこともなかつた。―』

正月から、雑誌『駄々』を出すから、原稿をなんでもいいから送れと云ふのだ、―僕はかりでなく、新吉のも、それから出来るなら手近いところで無法庵にも頼むと云ふのだ。

僕はそれに對して、いくら無聊に苦しんで雑誌を出す金が少しばかりあるとは云へ、どうせ長續きはしまいし、僕だつて毎號必ず書いてあけると云ふ約束は出来ず、その他の連中だつて勿論的にはならず、貧弱な雑誌など出すより、その金を君一人で浪費した方が氣が利いてゐるぢやないかと云ふ返事を出したが、先生はどうしても雑誌を出して見たくつて耐らぬと見えて、とう／＼一九二三年の、つまり去年の正月に『駄々』と云ふ雑誌を出し、僕のところへ三百ほど送つてきて、東京で賣つてくれと云つて來た。

『ところで、高踏的だと自稱さつしやる方々とは到底間が合はないし、でなくつてさへも人並に足並を揃へて歩く事すら困難らしいダダであつて見れば、どうしよう―エ―ままよ



「辻潤でも擔き出して一人でやるさーやれなきや止めたらいいんだ。己が勝手に始めて勝手に止めるのを誰れがなんと云はうーと小さな度胸を大きく据ゑて遙々東京の辻潤先生を引つ張り出したやうな譯だが：」

僕はこんな調子で引つ張り出されたやうなわけだつたが、約束の原稿を一枚も書いておくれなかつたので、初號には僕の一昨年出した雑文集『浮浪漫語』から古間が勝手に自分の好きな奴を引き抜いて轉載したやうなわけであつた。

雑誌を受け取つた時に僕は――

『ダダ落手。テイサイその他僕は一切干渉しないから、君の好きなやうにやつたがよからう。新吉の原稿送る。彼ダイブよくなつたやうだ。Kと云ふ人のとOと云ふ人の詩面白かつた君のはイカンながら感服出来ぬ。無法庵にもキカイがあつたら云つて置かう。雑誌送るのはよいが賣れるかどうかわからないよーアテにしないでくれ。金がいくらあるのか知れないが、あんまり損をしないやうにやり給へ。』

『君の病氣はどうなのか僕は今迄あんまりゴエンがありすぎるので、少しも氣にはしない

が、君の元氣なら大丈夫だらう。だがあんまりムチャをしない方がいい。ムチャなことをするばかりがダダの能ぢやないよ。君にはマザアはないのか？――もう少し詳しく境遇を知らせ給へ。――と云ふやうな返事を出した。

それから又度々手紙をよこした――九州の方にもかなりダダの共鳴者がゐるから、一度遊びながら福岡へ来ないかと云ふのだ――それに對して機會があつたら行きたいと曖昧な返事を出して置いた――それより先き國へ歸つた新吉の様子を見ながら一度伊豫と云ふところを見物して見たいと云ふ氣持も漠然として起つてゐたのだ。

ところが、古間は『駄々』の二月號の裏面に麗々と『ダダ講演會』の豫告を出してゐるのだ。會場、福岡市於第一公會堂、期日、來ル二月中旬頃、辯士、辻潤、高橋新吉、大山白石、主催、福岡駄々社――と云つた風に。實際、彼はなんとかして自分の存在理由を明らかにしたいのらしい心持は充分に僕にも見當はついてゐるのだ。――それにこの豫告は雑誌の廣告術としても確かに無意味なことでもない僕に獨りで微笑してみた。しかし、新吉のアテにならないことは勿論、大山白石に至つては更に論外である。結局、僕一人と云ふ



ことになるが、一人ぢや講演會もむづかしい、始めから損得の勘定を無視してやるなら別のこと、—なにもわざ／＼九州くんだりまで損をさせに出かけることもあるまいと獨りで腹をきめてゐた。

兎角、時間に対する觀念が薄いので、従つて月日に對する記憶が甚だうとく、過去はなるべく忘却することにきめてゐるから、この調子でゆけば、一生自敘傳などは書かないでも濟みさうだと思つてゐるが—たぶん一月の末だつたか二月の始めだつたか、二三日東京へとまつて遅く歸ると見なれぬ頭髪のモヂヤ／＼した男がねてゐる—聽けば昨日だか一昨日だか九州から出て來た男だと云つて僕の留守宅にとまり込んでゐるので、それが古間だと云ふことは云はずと知れたのである。その晩はよく寢てゐるやうなので顔も見ずに僕もそのまま二階へあがつてしまつた。

年は二十七だか八なのだが、年よりは若く見える。なる程如何にも瘦せて顔色が黄色く煤けてゐる、顔だけはさして見にくいと云ふ程ではないが—イヤ、さうまで云つては少し酷かも知れない、先づ色でも白く肉付でもよかつたら色男の資格はあるのだらうが—なん

にしても貧相で不景氣だ—それに時々咳をして聲がシヤガレてゐるので誰れが見ても肺病患者には見える—しかし表情には案外どことなく呑氣さうなところも見えてあまり自分の病氣を氣にかけてはゐないらしい—そこいらが彼の身上で又これまで生きて來た強い力なのでもあらう。

一度はモルヒネを飲んだが、分量が多かつたので死にきれず、一度は酔つたまぎれにどこかの棧橋の上から海へ飛び込んだが、あいにく干潮で丈が立つた爲めに溺れもせず—先づは生きてゐると云ふ自白を聽いた時は、悲惨だと云ふよりは寧ろ可笑しさが先へこみあけて來た。

—二度も三度も死にそくなつてゐるのでいつなん時、死んでも諦められますよ—と平氣な顔をして話すのだ。最も母親はあつても繼母で、あとは兄キだけなので、この世に肉親の執着はないのだが—、別段、世間的な野心がない限り思ひ切りはいい筈だと、その話を聽いた時、僕もなる程と思はせられた。その點、彼は僕などより遙かに幸せな境遇にゐるのだ。が、しかし結局不幸な一人であることは争はれない。やはり愛に飢ゑてゐる—



一人でデット下宿の二階で考へ込んだら、とても耐らない氣持になるのはよくわかる——彼は恐ろしく淋しがり屋なのである。ひと思ひに死なない限り、生きてゐる以上はとても惨めな人間であることだけは確かだ。彼がブラ／＼と氣なりにしてゐられる身分でなかつたら、自殺をしないまでも、とうにこの世の人間ではなくなつてゐるに相異なる。が、凡そない物と思つて貯金が（僕のやうな人間には）出来ないと同様、生身を携さへながら、いくら諦めがよいと云つても、死んだつもりで生きてゐられると云ふやうな人間は一人もあるまい。

彼はよく『どうだつていいやあ』と如何にも絶望的な、投げやりの調子で云ふのだがそれを聴くと、彼が所謂ダダの信者になつた心理をそのままむき出しにして見せつけられたやうな氣持がしてあまりいい心持はしないのだ。僕はそれを聴くと、『どうだつてよくはないのだ』と、すぐと云つてやりたくなるのだ。自分は少なくとも、『どうだつてよくない』からダダになつた人間なのだ。かう云ふと、それは言葉の上の相異で結局、同じ事ぢやないかと理窟好きな人間は云ふかも知れない——よく大なる否定は大なる肯定と同じこと

だなどと云ふ同じ論法で——

彼はこんな調子で、一ヶ月餘り、僕のところになすこともなく金が入ると、酒を呑んで女を買ひに行つた。——しかし、金と云つてもホンの宛がい扶持なのだから、セイ

ゼイ僕の住んでゐたK町の宿場女郎を買ふ位なものに過ぎなかつた。

氣持に落ち付きのない彼はデキにこんな風な生活にも倦きて、一先づ又福岡へ歸らうと云ひ出した——僕は雑誌の方は出したければ簡單なりイフレットのやうな形にでもして氣の向いた時にでも出すことにして——若しまとまつた金が少しでも兄キからもらへるなら、なにかそれを資本にしてやつて見たらどうか——たとへば古本屋とか——これはなにかの話の序に彼も出版は経験もなく、金もかなり入るから、さし向き簡單に出来る古本屋でも始めやうと思ふなどと、僕に相談をしかけたことがあつた——でなければ香氣に福岡の郊外かどこかで鶏を飼ふとか草花を栽培するとか——先づ僕が君の境遇だつたら、ピアノでも一臺買つて、好きな本でも讀んで悠々と暮らすねえ——と、云つたが、それではまたあまりに淋しすぎると云ふのだ——やはり都會にゐて、キネマを見たり、カフェーにでも時々出か



けられなければ、——と云ふのだ。——『あなたのやうにもう年をとれば』と、僕はもうかなりな老人扱ひにされてしまふのだ。——結局、彼のそんな太平樂をきいてゐると、やつぱり『どうだつていいやあ——』ではすまないのだ。その上、氣に入つた女とでも一緒に生活でもするならば、とおいでになる——ところで、彼は自分が好きだと思ふ女からはいつても臆鐵を食つて、失戀の亡者よろしくと云ふ顔をして生きてゐるのだ——黄色く煤けたカマキリのやうな貧相な男に——だが、彼の心理と、境遇とをよく呑み込んで、理解して、惚れて、一生連れ添ひませうと云ひ出して來るやうな美人がその邊にゴロン／＼轉がつてでもゐるのなら——社會問題もヘチマもとうになくなつて、早速、この世は極樂淨土、プロレがどうの、階級意識が亡つたの、勞働問題がコヂレたの——などと云ふ面倒な現象は樂にしたくたつて見當るまい——だから、彼もダダになつたのぢやあるまいか？

古間君、だからまあシャガレ聲で『どうだつていいやあ——』などとあんまり氣前のいいやうなことは云はない方がいい——と云つてやりたくもなつてくるのだ。

この間に岡山の不良美少年エイスケ・ヨシユキなる變態性慾の問屋で、オスカア・ワイルドのお稚子さんよろしくと云つた男がオリイヅ色の鉢巻をして『ダダイズム』をふりまわして僕のところへ乗り込んで來た話や、新吉がまたぞろ上京して大に東海道線をおばれまわり、狂亂の體で無法庵のところの女中を追ひかけまわして僕までが富美子夫人から嫌厭され、それが原因でもあるまいが無法庵の神經衰弱が一時に頂點に達して精神に異状を呈したとかで温泉へ出かけたり、ヨツフエが熱海に滞在することになつたり、世の中は恐ろしく多事多端で、そんな話を一々細々と枝葉に互つてやつてゐたら僕の肝心な紀行文はいつ始まるかわかつたものではないからその一部は無法庵が書いた『文化病患者』の方に譲つて僕自身の話をすることにしよう。——

古間が三月の始めに歸つてから、凡そ二十日程後に僕は久しぶりの旅行に出かけることになつた。



前々から新吉がしきりに彼の故郷を僕に見せたがつてゐた。そればかりでなく、彼の故郷には僕の舊友の性學者小倉清三郎を通じて以前から名前だけは聴いてゐたS氏と云ふ人がゐる—この人の家は八幡濱の舊家で土地でも相應なブルジョイで、同郷の新吉のクラスメートだつたS氏と云ふ青年作家のバトロンであり、其人自身が又文藝や社會問題等にかなり趣味を持つてゐて、自分でも道樂に地方新聞に匿名で時々執筆する程のヂレッタントだが—新吉やなにかから、僕のことを聴いてゐるので、しきりに僕に興味をもつて、是非一度やつて來ないかと云ふやうな手紙を度々よこしたことがあるので、僕もひそかに心を動かされてゐた矢先きに古間が又飛び出して來て、僕を一度博多へ連れて行つて講演をさせようとしきりに勧誘する—旁々僕も性來きらひではない旅行熱が次第に嵩じて來たのである—ところへ更に油を濺いだのが大山白石の話なのだ。

白石と云へば、讀者諸君も先刻よく御存知な「ラオチユウ」と云ふ支那の酒の名によく似た御伽噺を書いて一躍文名を天下に轟かして成金になつた男だが—僕はこの男とはなんの因果だか（と白石も同感だらう）昔からの相棒で—彼がまだ淺草の山平社時代に、公園

でバットの屑を拾ひ歩いたり、草摺ぎをやつたり、一山百文のドラマを書いて五九郎に賣りつけたりしてゐた時代からの知己で—その邊のことは彼自身が別に詳細に報じてゐるから、僕がこんなところで改めてそれを繰り返へす義務も責任もないが—二人が會へばいつでも相互に悪口や毒口の云ひ合をして酒を飲むより他に藝がない程に親交淺からぬ仲なのである。

偶々白石を訪づれて話の序に九州旅行のことを云ひ出すと—僕も近いうち一度家族をつれて國へ歸へらうと思つてゐるのだが—ところで、その國と云ふのが肥前の長崎なのだ。—行くとすればいつ頃かね？

—とうに出かけなければならぬのだが仕事やなにかの都合で延びてゐるので—先づ遅くも今月の二十四五日あたりには是非とも出發したいと思つてゐる。

—しばらく滞在の豫定かね？

—なに、法事をすませばスグ歸へるのだが一週間位は滞在の豫定だ—

長崎はかねてから僕の好奇の的になつてゐるところでこの前九州に行つた時に見物出來



なかつたことを今でも終生の恨事の如く心得てゐる程に牽引的にその舊い港の名前がナガサキと響くのだ。

—是非行き給へ、僕もこんだの機会に君も歸省するとすれば恰度好都合だから行く、是非とも見物することにきめた—と、その時、僕は始めて固い決心が浮んだのだ。

—それで、僕は大阪と廣島へ一寸立ち寄るから、二十日頃に出かけるが博多で落ち合ふことにしやうではないか—

—さうかね、ではさうしてもいい

—君が往きに博多へよるなら、古間もしきりにやりたがつてゐるから講演會をやらうぢやないか—

古間はこれより先き、僕の紹介によつてチャンと白石を訪問してゐるのである。

—うむ、やつてもいいねえ—だが、僕等二人位で人が集まるかね

—その邊はなんともわからないがな—

出かけると云つたつて仕度は極めて簡單なものだ—以前よく放浪をやつた時分には風呂敷包み一つときまつてゐた。これまでの経験から旅へ書物を携へて出て讀んだ試しは恐らくなかつた—だが、こんどは少し何處かで長く尻を落ちつけまいものでもないと云ふ豫想があつたので、書物の爲めにバスケットを一ツよけいに持つて行くことにした。あとは殆んど着のみきのままで—しかし、K女の方はそれでもさすがに女だから僕のやうには簡單にすまされない—でも大小二個のバスケットに雜囊位でことはすむのだ。

—新婚旅行兼お里がへりといふ格だね

—勘當娘の御里がへりと云ふのも變だわね

—どうせ變なのは始めからきまつてゐる

横濱から乗るのが順なのだが、ゆつくり乗りたい爲めに東京驛からにする。



K町から始終省線で往復してゐるのだが、改めて汽車で出かけると自づから同じ沿道でも趣きが異なるやうな気がする。

僕は少年の時分から汽車が好きだった。汽車の窓から外界の景色を見てゐれば一日や二日位はたいして倦きが来ないが、さすがに何遍も乗つた東海道線は今の自分にとつては別段、新しい好奇心を湧かす程にはならないのである。

横濱までも行かないうちに、僕等の反対の窓側に座つてゐた十二三の女の子が蒼い顔をして僕のすぐ前の空席へ突伏した。氣持でもわるいのかときくと黙つて頭をふつた—しかし二三分経たない中にその女の子はスグと嘔き始めた—すると女の子の母親でもあるか肥つた三十五六の女が—膝の上に子供を抱いて乳を吞ませてゐるが—別段驚いた容子もせずふところから紙を二三枚出してしきりに女の子を呼んでゐるが、女の子の方は下を向きながら苦しがつてゐる、—僕は見かねて背中をさすつてやつたが、おふくろは立つて来ずいつまでも紙をふり廻してゐる—僕は立ちあがつてその紙を受けとり女の子の口のまわりをふいてやつた。女の子は間もなく嘔き終つたが、きまりがわるいのか、僕に好感を持つた。

てゐないのか—黙つてそのままケロリとしてゐる。おふくろはその時始めて簡單な禮を述べた—それからバスケットの中から紙を改めて幾枚か取り出して又女の子を呼んだが、女の子は返辭をしない、おかみさんは稍や立腹の體で、聲の調子を變へたので女の子はやつと紙を受けとつたが、それをへドの上へかける智慧は自分はないのかボンヤリ立つてゐる—僕はそれ以上よけいなオセツカイをする氣持が起つて來なかつたので傍觀することにした。

おかみさんはなにかぶつ／＼云ひながら、やうやく腰かけから立ちあがつて子供を抱いたブザマな容子で幾枚かの紙をへドの上に並べた。

すると、それから十分も経たないうちに近所にある四十二三の丸鬚に結つたこれも田舎風のおかみさんが慌てて席を離れたと思つたがスグと又ゲロ／＼とやらかした。彼女はそれでも二三歩進んだが、どう云ふものか洗面所の前に屈んで悠々と嘔き始めた。

横濱迄行かないうちに僕等は二度までへドの御馳走にありついたわけである。横濱から一人四十恰好の商人風の男が僕の隣りへ腰を掛けた。少しく酒氣を帯びてゐた



せいか、始めのうちは誰れに話しかけるともなく何か饒舌つてゐたが、餘程話し相手が欲しかつたものと見えて、先づ一番近い隣りの僕に話しかけた。

その男は九州のM市の者で、月に二度ばかり東京と横濱へ豚を賣りに来る豚屋の番頭だと云ふことがわかつた。軍隊生活をしたことがあるとみえて、御定まりの軍隊内の話を得意になつて饒舌つてきかされたが、そんな話が僕に興味を起させる筈がない。僕は唯だ「ウーンフォン」と云ふやうな受け答へをして聽いてゐた。それから養豚が向ふでは盛んなこと。—なんでも縣で獎勵してゐるのだとか。—簡單で比較的容易に利益があがること。—商賣の序にアチコチ見物が出来てありがたいことなどを自慢らしく話してゐた。軍人たるの義務を盡して來たことを誇るのはいいとして、話が次第に碎けて來ると横濱の遊廓にとうとう一晩もとまらなかつたことを残念がつたりするのは如何にも豚屋の番頭さんらしく愛嬌があると思つた。—なにしろ僕は一通り話を拜聽させられる役廻りに當つたことは助からなかつた。

静岡から僕の前の空席へ一人の男が乗つた。一見悍猛な、しかしどこかに誠實味のある

表情をした眼のグリ／＼した職工體の男である。シャツの上に汚れた黒の背廣を着て、素足にペシャンコの駒下駄を穿いてゐる。やがてポケットからバットを取り出して吸はうとしたが燐寸がない。—僕がそれを借してやる、これをキツカケに彼との會話が始まる。

恰度奈良で山平社の騒動のあつた頃である。彼はその運動の話をして、しきりに山平社の爲めに辯じてゐた。豚屋がそれを不思議さうな顔をしてきいてゐる。

彼には仲間がゐないらしい様子であつた。横濱で沖仲仕の生活をしてゐたのだが、都合で知人を静岡に訊ねたところ折悪しくその人がゐず、これから大阪まで行くのだと話した。彼は東京生れで多少の教養はあるらしかつた。—その道の智識は主としてS先生——と彼はS氏を先生と呼んでゐた。—の書物によつて得てゐたらしかつた。しかし、横濱ではOの派に屬する連中と交際してゐたことのあるらしい口吻を洩してゐた。—が少くともその運動に理解もあり、同情もあると信じたらしき、いい話相手が出來たと思つたものか、色々自分の身の上話などをきかせてくれた。豚屋は相手にされないもので、いつの間にか眠てしまつた。



明け方久しぶりでモント・エネリクスと無法庵は屢々叡山のことを呼んでゐた—の姿を  
瞥見した時にはさすがに懐かしい氣持を覺えた。

大阪で豚屋にK女を託して—も凄まじいが—M—と假りに沖仲仕を呼ぶ—と二人で梅田  
驛に下車した。

時間が早い爲めか、停車場前の飲食店はまだ大抵戸が締つてゐた—疲れてもゐるし、す  
ぐ友達を尋ねるにしても早過ぎるし、Mとそのまま別れるのも呆氣ないと考へて、起きて  
るさうな家を物色して歩いた—そのうちやうやく一軒の繩暖簾らしいめし屋が戸を開けて  
ゐたので、早速その家へ飛び込んでやつと落ちついた。

二三杯飲むと睡眠不足な朦朧としてゐる頭がハッキリして、やうやく人心地がつき始め  
た久しぶりで酒が馬鹿にうまい—さすがはやはり大阪だ—こんな家でも酒だけは飲める  
—沖仲仕は初め柄にない遠慮をしてゐたが、一二本調子を空にしたなら、もうあとはいい氣  
持になつて今迄の訥辯に似すべしと饒舌り始めた。

お相互にどこの馬の骨だかわけもわからない人間が單に偶然汽車の中で顔を突き合せた

と云ふだけで—それだけでもう腹の底をさらけ出して饒舌つてゐる—これはたしかに酒の  
功德だ—それから、サアそれからもう一つは僕等が二人ともプロレタリアと云つては語弊  
があるなら—素寒貧だからだ。

一三日滞在するつもりだから、縁があつたら又會はうとMに別れて僕は難波行の電車に  
乗る。

千日前で降りて一寸鐵面堂の顔を見て行かうと思つたが—彼はまだ時間が早いので店を  
出してゐない。鐵面堂を一寸簡単に紹介しようか—と云つたつて僕は彼が何處の生れで、  
年がいくつで、何處に住んでゐるか—と云ふやうなことは一切知らないのだ—ただ千日前の  
通りに床店を出してゐる彼は獨身者? の古本屋の主人なのだ—自分では日本皮肉労働者  
世界紙本家總代、無官平民泣盛ブラジル大學カフエ—文學士古本大學狂授バチエラア・オ  
オ・アツウ・ココアなどとひとりで色々な肩書をつけて喜んでゐる—彫刻が名人で、畫も  
描く、文章も書く、自費出版の小冊子もいくつかある—「釋感法」だとか、「首」だとか云  
ふ變な本だ—帽子や衣物まで一流のものを拵へて得意然としてすましてゐる—僕の行く少



し前にダダの個人展覽會を店頭でやつたと云つて得意になつて話してゐた。

難波から南海に乗つて粉濱で下車し、井崎（宮島資夫作『假想者の戀』参照）のところを尋ねる―風呂に行つたと云ふので早速僕も荷物を立關に置いたままスグと出かける。

井崎が恰度あがり湯の前で一息懸命に頭を洗つてゐるので僕は湯槽の中に浸かつてすましてゐる。

おい井崎！―と風呂の中から呼びかけると、彼は持前の眼を一層丸くして

―やあ、君か ―いつやつて來たのだ  
―今やつて來たばかりだ

そりやわかつてゐるが、時にどの位滞在が出来るかね、君に遇いたいと云ふ人間も二三人位はゐるから、出来るならゆつくりしていかないか

僕は簡單にこんだの旅行の豫定を話して歸へりにゆつくりするから、あまり引き留めないでもらひたい旨を述べた。

これから久しぶりで井崎の素教臭い話を聴くことや、酒を飲み歩るく話や、井崎の編輯

してゐる醫者の雑誌をやつてゐるドクトルの全快祝に引つ張り出されて、××俱樂部で尺八を吹かせられる話や、色々とあるが先を急ぐから略すことにする。大阪を立つ日の午前井崎と二人で恵比壽橋を渡らうとすると、向ふからなんだか見たことのある女が後から女中に子供をおぶはせてやつて來る、すると向ふでも氣がついたらしい。

―アラ御珍らしい、随分しばらくでしたわね―

―やあ、なんだ木村君か！

見たことがあるどころではない、僕の淺草生活以來御馴染の木村時子君なのだ。よかつたら樂屋の方へ遊びに來てくれと云ふ。僕も久しぶりで淺草の連中の顔を見たくもあり、話したくもあつたが、時間の都合があるので残念ながら割愛することにした。時子君のプライベト・ライフに就ては度々色々な非難を聴かせられるが、その方面に關して全然無智な僕のやうな男は彼女の聰明な愛嬌たつぷりな表情に接すると、イツでも可愛い人だと考へるほかに考へやうがない。兎角、人間は離れて見てゐる方が無事だ―殊に女性は―  
廣島で下車する。



K女が迎ひに来てゐる。歩いて三十分ばかりだと云ふから町を見物旁々歩くことにする。賑やかさうな町をよつて案内してくれるのだが、夕方なのでハッキリわからない。K女の家は町の南端にある。出雲街道の石標が立つてゐるのが眼につく。角店の洋服店で番頭、職人、小僧、女中諸君を合すと約二十餘名で店から奥の方まで立錐の餘地がない。

東京から變な御聲さんが來たと云ふので、みんな好奇の眼を覗いて僕を見物してゐる。

「ヤア、諸君失敬！—よろしく頼むよ」と云ふ調子であがりこむ。K女のおふくろやおやぢとも極めて簡単な初対面の挨拶をすませます。K女の紹介や僕の書いた物によつて凡そ僕と云ふ人間に見當をつけてゐたらしく、至極呑み込んでゐる様子が見えたので僕も助かつたやうな氣持がする。

「うちの御嬢さんも變チキチンやが、あなたも随分變チキチンの方や—とおふくろはスツカリ僕を頭から變チキチンに極めて取り扱つてゐる。おやぢやおふくろも一杯やる方なので、早速酒が始まる。疲れてゐるので二三本飲んだら素的に氣持がよくなつたので、職人や、小僧諸君を仲間に入れて大に珍らしい歌を唱つてきかせてやる、みんなも一緒にな

つて歌ふ。これだけで一々人間のサイコロジイを解剖しなければ天下はまことに泰平なものである。

廣島と云ふ町に對して僕は前からなんの期待もせず、甚だザツパクな、イヤな町だらうと考へてゐたところが、想像とはまるで反對だつた。恐らく僕は吳を廣島と一緒にして考へて見る癖がついてゐたかも知れない。

公園にはまだ梅が咲いてゐた。町の中を流れてゐる幾筋かの河の水はみんな綺麗だ。堤の柳が恰かも新芽を吹き出してゐた頃なので、それが僕には如何にも珍らしく眺められた。夜、名物の蠣船へ飯を食ひにゆく。蠣船と云へば、僕がこの蠣の味を始めて知つたのは大阪で、先刻一寸引き合に出した井崎が一番始めに僕を連れて行つてくれたのだつた。

それから僕は病みつきになつて、少し金があると蠣船へ出かけたものだ。僕は蠣と酒とを除いて大阪を考へることは出来ない。それにつけても僕は巴里で死んだ才人住田や、佐々木左郎や、井崎など云ふ連中と一緒に燈がつきさへするとカバレエ・ド・パノンに集つて道頓堀や千日前を練り歩いた光景が浮んでくる。ついこないだのやうだが、五六年は経過



してしまつてゐるのだ。

滞在二日にしてK女と袂を分ち、己斐驛から乗車する。普通列車なので、かなりすいてゐる。

一側向ふに異人が乗つてゐる。ルバシカを着てゐるので一見露西亞人だと云ふことがわかる。一年の頃は三十四五らしく見かけられた。棚の上にラシヤ地を積んでゐたので例の行商をやつて歩く人間だと云ふこともスグとわかつた。窓からしきりに景色を眺めてゐるらしかつたが、時々なにか小唄を口吟んでゐるやうだつた。そのうち棚からマンドリンを卸して弾き始めた。即興的に俗謡かなにかのメロデーでも弾いてゐるらしかつたが、僕にはよくわからなかつた。しかしマンドリンを弾きながら、瀬戸内海の風光を享樂して行くのは勿論わるい氣持ではなかつた。僕はその男がマンドリンを弾き出してから一層親しみを覺えさせられた。話したくもあつたが日本語が通じるかどうかわからず、勿論、英語では埒が明きさうにもないので黙つてゐた。すると柳井津あたりだつたか、彼のとなりには若い二十三四歳の商人體の男が乗つた。その男がなにか英語で話しかけたのだらう。彼は

「私エイゴわからない」と日本語で答へた。それから、若い男はしきりに興味を持つて彼に色々なことを訊ね始めた。「御國革命で大變ですな」とか、今どんな風になつてゐるのかと頻りに尋ねる。しかし彼は「私なんにもわからない。少しもわからない」と云つて相手にしない。しかし、彼がハルピンまで行くこと、そしてハルピンに彼の家族がゐるのだと云ふやうなことだけはどうやら話の様子でわかつた。

若い男はやがて下車した。

すると、しばらくして彼はズツクの大きなバスケットのやうなものから、茶道具を取り出して紅茶を入れて呑み始めた。なんと思つたか僕の方に注意を促がして「あなた飲みませんか」と云ふのだ。僕はとりあへず「ありがたう」と云ふと大きなコップに一杯ついでくれた。それからパンを二片ばかりそれに添へて「おあがりなさい」と云ふのだ。僕は遠慮なしにそれを御馳走になつて一側先きに進んで話し始めた。しかし、僕はロシヤの話はなんにもしなかつた。その代り音楽の話を作り始めた。序に昔、日本にエロシエンコと云ふ盲目のロシヤ詩人がゐたがと、その詩人がギターを弾いた話などをしてやつた。



長府の近所の驛のあたりだつたか、丈の高い色の黒い一見獐猛な人相の男が乗つて来た。すると、その男は間もなく露西亞人の隣りへ座はつてなにかシヤベリ始めた。勿論それはロシヤ語でだ。ロシヤ人は始め非常に不機嫌にツン／＼した態度で答へてゐるらしくつたが話してゐる間にその男の云ふことを了解したらしく普通の態度にかへつたが、なんとなくシリヤスな表情をたへず面に表はしてゐた。僕は自分の席へ歸へつて又窓から景色を眺め出した。色の黒い男はロシヤ人の持つてゐたロシヤ語の雑誌を手にとつて頁をはぐつてゐた。僕はチラリとその表紙を見た。

僕にはロシヤ語は讀めないがなんとかエコノミストと書いてあるやうだつた。

色の黒い男は下關から三つ位手前の驛で下車した。下車する時、なにか二言三言彼に注意を與へてゐるやな様子が見えた。

下關でロシヤ人に別れを告げて聯絡船へ乗る。

### 博多から長崎まで

6

箱崎で下車した方が近いと云ふことを聞いてゐたので、箱崎で降りることにした。馬出松原添と云ふところに古間の下宿があるのだ、停車場の待合室に腰かけてゐる男に早速聞いてみる。「ウマデ松原添と云ふはこの近所ですか」——男は「ウマデー」と僕の言葉を繰り返へしながら一寸首をかしげ「それはマイゲンのことでせう、わしもこの邊の者ではありませんが、松原添と云ふ海岸に近い方ですから——」と凡その見當を教へてくれた。

それから二三ヶ所で聞いてやツとわかつた。電報でも打つて下されば出迎ひに行つたのに——と古間はそれでも遙々僕がやつて來たので非常に嬉しさうな顔をしてゐた。

恰度試験休みなので、その素人下宿は至極閑靜だし、前が箱崎の松原で海岸へは一町半程



しかない、空気もよく病人などのゐるにはお誂らへ向きなところだ。

下宿には醫科大學に通つてゐる支那の留學生、工科大學の助手をしてゐるS君、農科へ通つてゐるN君——こんな連中がゐるのだ。

S君やN君とは一週間ばかりゐる間に古間を通してデキに懇意になつた。

留學生はしきりにヴァイオリンの稽古に熱心で毎日僕の前の部屋でホームマンかなにかを練習してゐた。僕も別段改まつて仕事をしてゐないので、學生諸君と無駄話をして遊ぶあひ間に尺八を吹いて久しぶりの下宿屋生活を復活させてゐた。

ありがたいことには朝湯のあることだ。箱崎神社の傍で、僕はたいてい毎日のやうに出かけ、歸りには手拭を頭へつけて、露店の椎の實を一袋買って、そイツをボリ／＼噛みながら波打ちぎわまで歩るき、松原の中をノソ／＼歩きながら歸つて十一時頃に朝飯を食ふことをこよなき喜びとしてゐた。

二十七八日頃に博多で大山白石と落ち合ふ手筈になつてゐるのだが、白石からはまだウソともスンとも云つて來ない。

——大山さんはもう來さうなものです。來ないなら來ないで、なんとか云つて來さうなものです。——と古間が度々話の序に心配さうにきくのだ。

——君、白石はアテにはならないよ、まあ來ないと思つてゐればまちがいはないさ——  
——でも、それでは講演會が出來ないぢやありませんか——そんなに講演會がやりたいのか困つた男だな、俺は全體シヤベルことがきらひなのだ——酒でも呑みながら、愚にもつかない駄洒落でも連發することなら、人並外れて好きな方だけれど、改まつて筋道の立つやうなことをシヤベルのはあまり感心しないよ。

——でも度々おやりになつたじやありませんか——

——頼まれると、たいていイヤだと云へない性分だね、越後から米搗きの方さ——  
古間にはこんなシヤレはわからないのだ。

偶に旅に出たのだから——近頃では家にゐることの方が珍らしいが、その時はまつたく久しぶりだつたのだ——まづ出來るだけ悠々とした氣持になつてやれと、原稿などは一枚も書かず、本も讀まず、怠窟になると古間や工科のS君や農科のN君などと一緒にカフェー



まわりの御供をする。

古間はパウリスタアが好きで、大抵日に一度はコーヒー一度でも飲みに出かけないと気がすまないのだ。

パウリスタアには勿論ウエイトレスが澤山ゐるのだ。どこでも同じやうに若い女のゐるところへは男が集まつてくる。

僕は東京にゐる時でも、もたらあまりカフェーと云ふところには出かけなかつた——第一コーヒーと云ふ飲み物をあまり好かない——と云ふと、未だほんとうにうまい奴を飲んだことがないからだらうと云はれば、さうかも知れないが——實際、うまいコーヒーには滅多にブツつかつたことがない——からでもあるが、その上洋食もあまり好きな方ぢやあない。僕だつて、コーヒーや洋食が好きでカフェー通ひをやつてゐたら、今迄に少なくとも一度や二度位、女給さんと所謂ロマンスとかなんと云ふ奴をやつて見たに相違ないが、幸か不幸か一向女給さんに御縁のないのはあながち僕が巴里に生れなかつたせいばかりでもない。

時に博多のウエイトレス諸君はみんなおとなしなかつた——少なくともパウリスタアの諸君はみんなおとなしなかつた。御話もあり上手ではない。従つて御客様の方もみんな上品で、なんとなく家庭食堂と云つたやうな感じがある。夜になつても同じことだ。

古間はただ、その中でなにちやんとか云ふ人が好きだとか、感じがどうだとか云ひながら、しきりた通ふのだが、どの女がほんとうに好きなのか、サツパリわからない、日によつて時々相手が變るらしい。

——ねいちちゃんよ、もつと傍へより給へ——コイツは一寸アクセントと音色とをきかせないと古間の感じが出ないのだが、そイツはむづかしいからやめる——などとテレ臭さうに云ふのだが、女給諸君もチップを少々ヨケイもらつた時だけはお義理におアイソを云ふが如何にもわざとらしく聽いてゐても徒らに馬鹿々々しくなるばかりだ。

パウリスタアでは一度も酔ッ拂ふことが出来なかつた。まったく安全食堂だつた。

この前、博多へ来た時は、ほんの素通りをしただけなので、こんどはユツクリと色々なところを歩るさまはつた。



箱崎の海岸にある水族館へは二度ばかり行つた。水族館と云ふが、兼動物園でもあるのだ。

烏賊の泳ぐのを非常な興味を持つて眺めた。實際、生れて始めて見たからだ。静止してゐる形をうしろから見るとまるで薄桃色の曇が水の中に浮いてゐるやうだ。烏賊は蛸魚の親類ではなく、蛙の兄弟分だと僕はそんなことを考へながら、ツクム感心して見物した。

月が代つて西公園の花が綻び始めた。月がかわつても白石からはなんとも便りがなく、古間も少々諦らめ始めた。すると、四日だか五日だかに九日に東京を立つと云ふ電報が来た。古間は鬼の首でも取つたやうにそれをふりまはして喜んだ。

一寸云ふのを忘れたが、僕が博多へ来て二三日してから、古間が僕の歓迎會をやること云ふので、「九日」と「福日」に僕を引ッ張ッて行つた。きゆうにちのK氏には僕も一寸會つて見たかつたのだ——と云ふのは安成貞雄の消息が聴きたかつたからである。これより先き三月の半ば頃、久しく會はなかつた安成貞雄が長府にゐるのを知つて、月末には九州へ

出かけるから、久しぶりで向ふで會ひたいとハガキを出したら、——その返事に博多あたりで落ち遇はふ、唐津に行くかも知れないからと云ふので、唐津の郵便局トメ置きでハガキをくれと書いて来た。下關の河豚がウマイと盛んに自分ばかりがブゲを食つてゐるぞと云はんばかりの態度を示して来た。

残念ながら僕は時節外れで、とうとう河豚も蠣のうまいのも食べられなかつたことは旅行中に於ける最大の恨事であつた。

「九日」のK氏に會つて聴くとツイ四五日前會つてもう一度會ふことになつてゐるところ僕の留守に置き手紙をして行つた様子では唐津行きはやめて歸つたらしいとのこと、僅か四五日の相異で貞雄に會ふことが出来なかつた。

この好漢貞雄も今は故人でどこかの星で時々フグチリやカフェライオンなどを思ひ出してゐることであらう。

歓迎會の消息を新聞に出してもらふことを古間が頼んで歸つた。パウリスタアの別館で僕の歓迎會なるものが開かれた、集まる者無慮數百人——と書い



てみたいが、無慮七八人では一向お話しにならない。招待した新聞社の人達も忙しいと見え、来ず、来たのは特志の青年四五人であつた、辻潤先生も博多では一向人氣がないと見える。

しかし、結局しんみりとして御相互に卓を圍んで氣樂に話しが出来た。

その中でUと云ふ日向の青年とNと云ふ廣島の青年とがあくる日から下宿へ遊びに来るやうになつた。二人はその時福岡の大學病院に入院してゐたので、友達になつたのだ。僕の方は病院前の日の出館と云ふ旅館にとまつて通つてゐた。

僕等もこつちから又その旅館に遊びに出かけるやうになつた。

西公園の花が盛りになつて来た。大山白石が愈々來ると云ふので古間を始めその他の青年達も「ラオチユウ」の作家——しかも眼色毛色の變はりやした文豪の醫咳に接する日の一日も早からんことを翹望し始めたのである。

遅くも十一日にはやつて來るだらうと云ふので、講演會の準備にとりかかつた。會場は第一公會堂だが、花時ではあるし、それでなくとも前から申しこんで置かなければその日

と云つても間に會はないので、聞き合はせると十三日がアイてゐると云ふのでその日にきめる。

古間が先き立ちになつて、その二人の青年が助手で、都合僕とも四人で文藝講演會のビラを書く。發頭人だけあつて古間が一番熱心で始めて自分の仕事にありついたらと云つたやうな顔をしながら一文にもならない仕事に精を出す。

いい加減出來あがつたので、それを要所へ貼りに出かける。

ところがやる前になつて、公會堂では金をとつてはならないと云ふことがわかつたので古間がシヨゲル——なげなしの小遣から會堂費は既に拂つて、その他ビラだとか、前景氣だとか云つて、盛んにカフェーまはりをしたので講演會に金がとれないとあつては實際一大事なのだ。いくらダイズムだらうがなんだらうがサツパリ役には立たない、——で、その結果、やうやく交渉して會堂から少し離れたところなら切符を賣ることを默許して、もいと云ふ御許しを受けて、やつとそれで息を吐いたが、さて切符の用意がしてないので、明日の切符をその前の晩印刷屋へ頼みこんで、十三日の午前までに間に合してもらふ



ことにする。

正午時分やツと出来あがつた切符をそれぐ、又手わけをして賣りに歩くと云ふ始末なのだ。ところで更に愉快なことには、その前日の十二日の午前、白石が門司から電報でながくと断はつてよこしたことだ。

それを手にして古間は重ねぐのグレハマに顔を蒼くして、すツかり意氣沮喪の體で

——エえ、どうだツていいやあ——  
と云つたものだ。

それ見給へ、白石をアテにする方がまちがつてゐるのだ——が、それにしても九日に發つなどと云ふ電報を打たなければ、こんなカラ騒ぎをせずすんだものを、今更ことわることはいくらダイズムでも承知が出来ない。若し電報を發車の時に打つたとすると博多へ三時頃つくから多分停車場でつかまへることが出来るだらう、兎に角行つて見ようと停車場へ出かける。

入場券を買つてブラットホームで汽車を待つ。やがて汽車が来る。

ところが、待伏してゐるとは夢にも思つてゐないらしい白石が、汽車が止まると慌てて辨當を買ひに降りて來たものだ。

「太！——と僕はいきなり白石に劍つくを食はせた。

——オイ、駄目だよ。運の盡きだと思つて覺悟して下車し給へ。——と簡單に事情を話す。古間はもう大丈夫と蘇生したやうな表情で、白石にしきりに懇願に及ぶ。

——ヤア、失敬ぐ、なにしろ豫定より一日遅れたので、それに明日の午前に長崎で法事をやることになつてゐるので、どうしても僕は顔を出さなければならぬのだ、——と辨當を買ひそくなつては大變だと云ふやうな顔をしながら、ヘドモドと辯解をする。

——それに家族連れだから、疲れてゐるし、——  
と、結局、明日の晩までに間に合ふやうにするからと一寸逃れをしようとする。

そのうち、汽車が出さうになる、——白石はあはてて「ベントウベントウ！」と呼ぶ、

僕は、——

——仕方がない、乗り給へ、買つてやるから——と、僕は白石の爲めにベントウを五つ



ばかり買つてやる。

列車の中には妻君やら、女中やら、子供やらがある。——なる程、この家族連れでの長道中ぢや無理もないと思ふ。

古間は又掌中の雀に逃げられたと云つた風にブツ／＼こぼす。如何にも古間の心中は御察し申すよりほかはない。

話が前後したが、當日の午後の切符賣りはまるで泥棒を見てから繩をなふやうなものでしかし、こつなつたら先づ面白半分にするより方法もないので、僕も一緒になつて賣つて歩く。

大學や高等學校の生徒をつかまへては押し賣りをするのだ。——それでも、僕は拾枚を僅か二三時間程の間に賣つた。

君、失敬ですが、切符を買つてくれませんか、文藝講演會のと——云ふ調子で。ある本屋の店頭で、四五人かたまつてゐた高等學校の諸君に、

僕は辻潤ですがねえ、今夜僕の話をお聞きにきてくれませんか——とやつた。

辻潤の藥がきいたのか、その生徒諸君は眼を丸くして、ジロ／＼と僕の顔を見ながら、一も二もなく買つてくれたのは、非常に可笑しくもあり、ありがたくもあつた。

下宿に遊びに来る看護婦さんが、受付をやつてくれる、工科のS君、農科のN君その他例の二青年などが、門の少し離れたところで切符を賣つてくれた。

花時にはよくあるが、その晩は恐ろしく寒く、小使に火鉢の用意をさせた位に氣候が激變した。

しかし、定刻までには百人以上集まつて来た、恐らく大山白石を見物に来た連中が多かつたのかも知れない。

度胸をきめて、僕一人で、中休みを十分程して、それでも二時間半程一人で饒舌り續けた。幸ひ不平もなく、終りまでみんなおとなしく聞いてくれたのでホット安心した。

すんでから、僕に握手を求めた人が二人あつた。——それは二人とも按摩さんで一人はエスペランチストであつた。

思つたよりは成功の方だつた。



古間も一仕事終つたと云ふやうな顔をしてがっかりして嬉しがつてゐた。

博多を去る時が来た。白石の御蔭でとうとう二十日近くも博多でブラ／＼とくらした。尤も豫定もなにもないのだから、十日や二十日どうなつたつて別に一向僕自身にとつては差支へはないのだ。

旅程が長びく程、唯だ廣島にオイテキボリを食つてゐるK女が短い首を長くするだけの話だ。

長崎からの歸途、また二日程、博多で暮らす話はいづれ後からするが、此處で簡単に博多のスウヅニールを書きつけて置く。

大阪が牡蠣船によつて僕の頭に刻みつけられたやうに博多は西公園にアサヒビヤホールとお雪さんによつて永久に僕に記憶されるであらう。

その年はするぶんゆつくりした氣持で花を見た。西公園はいいところだ。僕は恐らく花が咲いてゐるとるらないとに拘らず、度々散歩に出かけたであらう。裏はスグに博多灣で千代

の松原とか、西戸崎とか云ふところが見晴らせる。別段奇でも珍でもないが日本の景色としてはまづ無難だ。東京の近傍にはいくら探してもない。東京では花が咲いても、この七八年と云ふもの特別に花見などと云え氣持で出かけたことはなかつた。東京の花見はホコリが厄介だ。西公園はホコリがたたない。人間の數が少ない。丘があり、松林があり、梅があり、芝生があり、至極變化に富んでゐる。

千代の松原を眺めると、今宿の海岸で半年近く暮らしたことを思ひ出さないわけにはいかない。

アサヒビヤホール——瓶詰のアサヒビールに閉口してゐた僕はそこで始めて生ビールを飲んで、如何にアサヒビールのうまいかがわかつた。その時の感じも手傳つてゐるのかも知れないが、兎に角あんなにうまいと思つてビールを飲んだことを僕は今迄に知らない。ホールは實に瀟洒だ。地下室だから難を云へば天井が少し低い、その他は申し分がない。ウエイトレス諸君はみんな黒のユニホームで品がいい。リファインされてゐる。勿論趣味から云へばプチブルジョアと云ふところかも知れない。



青年N君のとまつてゐた日の出館にお雪さんと云ふ女中さんがゐた。僕は度々遊びに行つてゐるうちに御友達になつた。名の如く色が白く、女相撲のやうに巨きな人だ、坐つてゐても兩膝が丘陵の如くもりあがつてゐる。口許と眼が小さく、眼瞼の邊が僕の夢寐にも忘れることの出来ない彼女に似てゐる。彼女とは僕の「永遠の女性」、和製ラウテンデライン、又の名を白蛇姫となん申し奉るかの姫君のことである。

お雪さんはまだ若いのだがエロテイクでないせいか、なんとなく「おばさん」のやうな感じがする。僕の爲めに綻びを縫つてくれたり、洗濯をしてくれたりする。一人旅をしてゐる時、女に親切にされるくらゐ嬉しいものはない——たとひそれが通り一べんの御世辭にしろ、實に身に沁みて感じられるものだ。身分も素性もわからない薄汚ない浮浪人に對して、かりにも親切を盡くしてくれるのはやはりその人の徳と云はなければならぬ。

さて愈々長崎だ。

佐賀あたりから、長崎文明堂のカステラと云ふ廣告がやたらに眼につく。カステラに對して一向興味のない僕だがあまり度々お眼にかかるので多少の壓迫をさへ感じさせられた。

汽車の窓から始めて躑躅だか霧島だかが咲いてゐるのを見る。博多では比較的寒い日が多かつたが、長崎へ發つた日はたしかに初夏の感じだつた。何處を見ても新緑の澄刺たる色彩が如何にも南国らしい強い刺戟でせまつてきた。

豫め白石の電報によつて彼の居所はわかつてゐる。停車場から早速車へ乗つて本博多町の坂本旅館へ押しかける。

僕は昔、始めて京都の七條驛へ下りた時、——これが京都かなあ！——と甚だ自分の空想を裏切られたやうな気がしたことを覚えてゐる。それ以來、あまり停車場へ下りた時の感じで全體を推すことはおろかだと悟つたが、未知の場所に對する、それが第一印象なのだから如何にも強く應へるのは無理もない。そして凡そいつ降りても不愉快なのは大阪の梅



田驛だ。廣島は上等の方だ。

長崎の停車場に降りた時にはサツパリ見當がつかない。別段特殊の感じは與へられなかつた。車夫に訊ねると、電車に乗つて行くところではないのださうで、探すのも面倒だと思つたので、その車に乗つたわけだ。

坂本旅館に着いたが、みなさんおでかけとのこと、仕方がないからあがつて待つことにした。なんでも午後の三時頃だつたと思ふ。一時間程してから、白石が歸へつて來た。

マダムオーヤマは水色の洋装かなにかで頗るふるつてゐた。全體、素的にエロテイクな人なのだが、長崎などをその姿で歩いて居たら、たしかに香港、シンガポールの情調だ。相手が白石ときてゐる。

「ヤア、ツジが來てゐらあ——と、次男の茶目小僧ケン坊がアイサツする。

「オイ——と——やつて來たよ——と白石は洋装の細君に注意をうながす。

「あら、とう——やつて來たのねえ、しようがない人だわねえ——と細君は飛んでもない野郎が來たと、それでもさすがに膽力が据はつてゐる彼女は、

「あなた、覺悟なさいよ、仕方がないわと、云ふ御挨拶で部屋へ通される——と云ふよりは勝手にツカ——と這入りこむ。

「ヤア失敬々々。すっかり疲れてしまつたものだから、實は歸りによらうと思つてゐるのだ。此處にもまアながくて一週間位の豫定なのだからね、時に、今日は晩餐の招待をされてゐるのだから、一緒に行かないか。

「それは結構だ、なにしろ文豪白石の御供は光榮だが、僕は遠慮した方がよからう。

「なにかまはないさ、一緒に來給へ

「全體、行く先はどこなのかね

「鎮西學院の先生達なのだがね、田上と云ふところで會をやつて序に僕を招待してくれたわけなのだ。

「鎮西學院は白石のアルマ・メエタアなのだ。故郷に錦を着て歸つた白石を母校の先生達が招待するのは至極道理である。

「だが、君酒は飲めないよ、クリスチアンだからねえ



——まあ御馳走は兎に角、町を見物旁々一緒に出かけることとしよう。時に丸山はどつちの方角かね

——来る早々丸山を見物するのか

——見物と云ふわけでもないが、その小六亭とか云ふ料理屋の息子をたづねたいのだ。なんでも「草土」と云ふ詩の同人雑誌をやつてゐるのださうだ。

——ああ、さうか「草土」の連中なら僕も一寸尋ねなければならぬのだが、恰度行く道だから寄つて見てもいい。

——K町の詩人Sの紹介さ、長崎へ行つたら寄つて見ろと云ふことなのでね、君でも来なかつたら、僕はさしづめ第一にそこを尋ねて見るつもりでゐるのだ、まだ他にも尋ねるところがあるのだが——

——聞いてはるだが、成程坂の多い町だ、どこへ行くにも大抵上つたり下つたりしなければ行かない。西小島の「草土社」をだが尋ねるには随分と骨が折れた。ところがヤット探した甲斐もなく「草土」の編輯者Kは留守なのだ——そこにゐた若い連中の一人が——で

は小六亭のT氏のとこまで案内しませうと丸山の避廓で第一流の旗亭小六へ僕等を引ッ張つて行つてくれた。

這入つて案内を乞ふと、丸鬚姿のスッキリした仲居が出て来て、挨拶する、女關には大きな衝立が置いてあつたりして如何にも古風な堂々たる家だ。

——オイ大山君、僕は此處とあがりこむ方がよささうだ、君は一人で行つて來給へ

——僕は田上行はやめてもいいよ

——ところがなんのこつた——只今お出かけになつて御留守なのださうだ。お名前を伺はれたので、東京から來た大山と辻だと云ひ置いて些さかの外的形でそこを出る。

——まだ、だいぶ田上と云ふのは遠いのかね

——さうさ、半道位はあるだらう、乗合自動車で行けばわけはない。

——なんだそんなに遠いところか

八坂町の停留場に來たが、乗合は時間が遅いので、もう出ないと云ふ、白石はだいぶ躊躇してゐるが、結局奮發して歩かうと云ふことになつた。



それから登りばかり半道どころではなく、いつまでも歩くせられるやうな気がした。しかし、歩くことの至つて好きな僕は黄昏の見知らぬ郊外を物珍らし気に歩いてゐた。やがて日はすっかり没して、長崎の町の燈火が一樣に脚下に見下される場所に來た。港も手にとるが如く、船舶の灯が海上に不知火のやうに輝やくのが見えた。

——コリヤあ素的だ——と僕は思はず憧憬れの長崎に始めて接した喜びを覺えた。

——この邊は秋がいいのだよ、學校にゐる時はよく遠足に引つ張られて來たものだよ——と白石もさすがに追憶に耐えないかの如く感慨無量の思ひであつた。

田上の茶屋——案内記によれば、市外南へ一里、茂木縣道の中間に在り、蕎麥、筍の名所なり、春秋杖を曳く者多く云々とある。なる程あまり近くはない筈だ。

時間が遅かつたので、先生達はたいい晚餐をすませてゐた。

僕は自己紹介をやつて席につくと、やがて鳥と五もく飯が搬ばれて、場違ひの御馳走に與かる。白石の學校時代の話が出たりして約一時間あまりおとなしく先生達の御話を拜聴して失敬した。

歸りに四海樓と云ふ家で名物の「シツボク」を食ふ——と云つても、本式の七人一卓の食糞料理のことではない。普通の先づプロレタ・シボックとも云はるべきものだ。しかしそれでも一杯食べただけで腹が一杯になる。支那料理の五もく蕎麥とヤキ飯を一緒にしたやうなものだ。肉の代りに魚が使つてあるのが特色だ。

田上の御馳走が腹にたまつてゐたせいから、シツボクはあまりうまくなかつた。

翌日は銅座のN氏のところへ引ツ張られて行く、N氏は多方面のデレツタントだ。自分で油畫も描けば、ドラマも書く、小説も書く、公人としては政治にも關係してゐる。

N氏と白石と三人で商品陳列場から圖書館を見物にゆく。

陳列場で白石が古賀人形を買つたので、僕も猿と猫とを買ふ。非常に素朴なもので、オランダの兵隊や、狐馬などと云ふものが代表的なものらしい。昔からの形をそのまま踏襲して、型は在來のまま、博多人形のやうに時代と共に技巧を凝らさない點がかへつて面白い味を備へてゐる。つまり粗末なドロ人形なのだから、價格も従つて廉い。

圖書館のM氏が色々親切に案内してくれる。圖書館には長崎港の所謂歴史的文献と云ふ



やうなものが一通り蒐集されて、好事家の垂涎置く能はざるものが澤山ある。芥川氏なら

長崎土産のバレン小説がたちどころに五ツや六ツ出来あがるところである。

有名なジャガタラ文、聖フランシス・ザビエの傳、古いカトリックの祈禱文、シイボルトの驚くべき日本博物誌、長崎最古の航海圖、キリシタン迫害の歴史的記録——その他無数の長崎レヂエンドが圖書館の藏の中で不思議なエキゾチック、シンホニヤを奏でてゐるのだ。

江戸文化の爛熟期に生れた一代の才人わが敬愛置くことを知らざる偉大なるゲダイスト四方の赤良、蜀山太田南畝の、

よつの海みなはらからのまじはりも

深ほの浦の名残りつきせじ——杏花園

の軸は彼の當年長崎に於けるコスモポリタンスピリットをそぞろに忍ばしめるのである。

舊い航海圖を見ると名答閣、地木、玳瑁洲、食力百私、渤泥國——などと云ふ珍妙な漢字がさすがにシンポリツクなヴィジョンを浮ばせる。

M氏の案内で、その夜港の甲斐田ホテルに晚餐を食べに行く、燈臺下くらしN氏も始めてなのだと云ふ。

その晩、僕は白石の舊洋服を借り着に及び、マダムの紅いしごきをボヘミアンネクタイに結び、茶目小僧の黒い毛糸の帽子をかぶり、靴がないので下駄穿きと云ふ至極ゲダイスチツクな服装で出かけた。

築地を連想させる河岸の兩側にいくつかのホテルがあるのだ。港のさびれて行くに従つてそれ等のホテルも次第にさびれてゆくのである。

這入ると、蓄音機の舞踏曲につれて幾組かのマドロスが踊つてゐる。そして、それを眺めながら一方の食卓には澤山の異人の男女が相對して盛んに酒盃を擧げてゐる。なにをしやべつてゐるのだから、サツバリわからない。

やがて定食が搬ばれる。僕等もまけずにウイスキーやビールの酒盃を傾ける。東京では滅多に食べだことのないやうにうまい洋食だ、別段ハイカラなボーイもゐらず、至極古風な銀杏返しに結つた平凡の女中があるきりだ。



きけばその幾たりかの男女の異人は此處にもう一ヶ月あまりも逗留してゐるサアカスの一團なのださうだ。なんでもマネエジアが金を持つたままドロンをきめたので、あとの連中は途方に暮れ、商賣の熊だの馬だのを賣り物に出してズル／＼ベツタリにそのホテルにゐるのださうである。そしてその女連は、其處へ来る金のありさうなマドロスの酒席に侍して稼いでゐるのださうだ。さう聽けば成る程差し詰めボーイもウエイトレスも入らないわけだ。

放浪旅藝人ときいたので僕はスツカリ嬉しくなつてしまつた。さうして更に彼等はロシヤとポーリツシユなのだ。中に際立つて美しい二人の娘が眼についた。一人は十四五になるかならない位な品のいい子で、それを傍へ引きつけて切りにデレ／＼してゐるマドロスは佛蘭西の士官なのだ。もう一人は十七八のこれも丈のスラリとした愛嬌のある娘で立派なブロンドなのである。

酔のまはるにつれて僕も黙つてゐられなくなつて一番手近にゐる少年に話しかけた。しかし、少年はポーランドで英語がわからないのだ。——すると、士官の背後に立つて

ゐる男が僕の云つたことをその少年に通譯してくれた。彼は一行中の語學者らしく、和蘭人だと云ふことはスグと彼の自己紹介でわかつた。

少年はダツチにこの人はなんだらうと云ふやうなことをきいたらしい。するとダツチは二言三言なにか云つてゐるが、その中にデイヒタアと云ふ言葉がきこえた。そこで、僕は早速、

—— Yes I am a Dichter —— とやつたものだ。すると、士官や女達もみんな視線を僕に集めて、「デイヒタア、モンシエール」とかなんとか酔つてゐるので盛んにわけのわからないジャアゴンを連發する。コツチもいい氣になつて出鱈目なダダライングリツシユで應對する、少年は自分もデイヒタアだ、「君もデイヒタアあなた、あたし兄弟あります」とこんどは怪し氣な日本語を使ひ始めた。一緒に踊らうといふので、たうとう僕はその少年と一緒に踊つてしまふ。踊り終ると彼は僕を抱きかかへて、しきりに、「ブラボー、」を叫ぶ。佛蘭西の士官は「ポートル、サンテ」と云つて僕に盃をさしてくる。即席の日本詩人は得意になつて盃をうける。それから、かれ等の爲めに日本の民謡をきかせてやる。とさす



が藝人だけあつて、その少年のおやぢと稱する無髯の男がマンドリンを弾く、ダッチがギ  
タラをどこからか擔ぎ出してくる。美人がうたふ。士官が有頂點になつて嬉しがる。こん  
な風で僕等は思ひがけない愉快な長崎の港の一夜にふさはしいコスモポリタニックパンク  
エツトを享樂することが出來たのである。かうなると蜀山の「よつ海みなはらからのま  
じわりも深はの浦の名残つきせじ」の歌が泌々と新しい情趣を誘つて改めて僕の頭に浮ん  
でくるのである。そして僕は又更に「屋上庭園」當時の木下空太郎氏が、

何は兎もあれ、今日は彌生のどんたくの  
花の盛りの入日時

港も遠く緑金の光りに濁り

波止場なる酒場の窓にまどろすは

眼を細め空の櫓うち眺め

悲しみ或は肉、ホークとり

酔ひつ、歌ひつ、口説つ

女を挑み争へり。

の歌を思ひ出さずにはゐられないのである。そして、ポーランド美人のオーリアとか、ナ  
ターシャとか云ふツルゲネフの小説に出て來さうな名前をきいて、かの女等と握手して別  
れた時は僕もなんとなく異國の港にゐるやうな氣がしたのであつた。

その翌日、長崎第一の支那料理東亞館で白石の歡迎會が開かれた。僕も陪食仰せ付けら  
れるの光榮に浴することになつた。白石萬歳！である。

集まる者數十人、長崎の長老格K氏、高等商業のプロフェツサア連を始めとして長崎文  
藝愛好家の人々、並に白石の長崎時代に於ける舊友と云つた顔振れであつた。K氏は長崎  
のもつて誇りとするにたる篤學者で、隠れたる考古學者である。特に長崎の故實に就ては  
恐らく日本一だと云ふ定評があるのださうだ。如何にも謙讓な福々しい好好爺である。僕  
は氏と親しく話して色々な好奇心を満足させることの機會がなかつたことを残念に思つ  
た。



歓迎會の席上に斡旋の勞をとつた妓に僕は長崎の代表的な歌を註文した。妓は早速三絃をとりあけて唄つてくれた。その文句に曰く――

遊びに行くなら花月か仲の茶屋

梅園裏門叩いて丸山ブウラ〜

と、蓋し江戸時代からこの土地で唄はれてゐるものとみえて節はまつたく江戸のメロデーなのである。

K氏は特に僕の爲めに代表的な二ツの歌詞を教へてくれた。

稻荷嶽から館内見れば

阿茶と賣妓が枕引き

長崎では支那人のことを一般に「阿茶さん」と云つてゐる。

嘉永かのえの寅の年四郎ヶ島

見物がてらにオロシヤブウラ〜

K氏はこの唄に註を加へて、それは露國海軍中將ブウチャチンが鍋島砲臺を見物に來た

時に出來た唄だと説明してくれた。ブウチャチンと云へば例の「オプロモフ」の作者ゴンチャロフがその時たしか一緒にその船に乗り込んで日本見物に來た筈だと云ふことを僕はなにかの序に讀んだが、聞いたかしたことを思ひ出した。

長崎は成程たしかにエキゾチスムの香ひが濃厚だ。そして、更に嬉しいことには僕の少年時代の夢を再び喚び醒してくれるやうな江戸文化の名残りが何處ともなく町全體に瀰蔓してゐることだ。僕は長崎へ來て計らず僕の忘れてゐた江戸のレミニツセンスにめぐり會つたのである。

僕が長崎に着いた翌日は「旗日」であつた。僕はその言葉をきいた時に、祭日だと思つたのだが、すぐ全然異つた意味であることを知ることが出來た。

ハタとは凧のことなのだ。しかもそれは嘗てナシヨナルリイダア以來見覚えのある菱形の凧なのである。みんな自分達が好きく、な色彩をそれにほどこして、凧の競技を大仕掛に丘の上でやるのである。その日は恰度ピクニックのやうに辨當や酒を携へて春の一日を凧の競技に市民達が有頂點になるのである。そして敗北して糸を切られた凧が市内に飛ん



で来る、それを亦長い竹棹で子供と云はず大人と云はず争つて奪ひ取るのである。

風の競技の爲め夢中になつて身上を潰す人間は決して、珍らしくないのださうである。

白石の一行が愈々出發することになつた。

僕は始めてなのだからまだ見たいところもあるし、それにどうせ島原天草へまわる豫定なのだから僕だけ後へ残ることにして彼と別れる。

白石の發つた翌日、僕は歓迎會の晩から僕と肝膽相照らした「草土」のKと一緒に浦上の天主堂を見物に出かけた。

白石が發つ時、停車場で「ヤット君から解放されるねえ」と云つたが、僕もやつと白石のアトモスフィアから脱却して、自由に單獨の呼吸をすることが出来るやうになつた。

浦上は市外だがそこまで電車がかかつてゐる。下りてから會堂まで僅かに五六丁しかない田圃傳ひに行くと南の方に小高い丘が見えて、大きな會堂の屋根が、その上に聳えてゐる。

僕等が石段をあがつて會堂の前にたつと恰度、そこにゐた番人らしい爺さんが鐘を鳴ら

し始めた。まさか僕等が行つたので鐘を鳴らしたわけでもあるまい、と思ひながら

——會堂を拜見にあがつたのですが——

と爺さんにきくと

——唯今、御葬式が御座いますから、それがすんでからになすつて下さい——と云ふのだ。その言葉の終るか終らないうちに、丘の下の方から靜かなハアモニツクな複音がきこえて來た。葬列が如何にも靜かに會堂を眼差してやつて來るのである。

司祭が先きに立ち、棺のすぐ前に施主らしい十四五の黒木綿の紋付をきた男の子が大きな十字架を握りながら行く。後から二列になつて白衣の尼達と、その他村の女達がみんな頭に白い衣を載せ、腕に十字架のついた珠數を爪繰りながら、挽歌を低音に唱へてゆく。春の光りが温かにふり濺いでゐる浦上の里に昔ながらの素朴な美しい信仰の抒情が靜かに呼吸づいてゐるのである。

僕等も一番後から會堂に這入つて見知らぬ人の葬式に列した。

正面の祭壇の背後には十字架につけられてゐる裸形の基督の像が安置されてゐる。その



上の高い窓は色硝子、そこには美しい五彩の聖母に使徒の像が描かれてゐる。

司祭が香爐をふりながら彌撒を唱へると、それに合せて右側の合唱隊がうつくしい讚美歌を實に素晴らしい聲で唱ひ始めたのである。長年の訓練は恐ろしいものだ、これが農家の人達の聲かと思ふと、餘りに日本離れがしすぎてゐるので僕はボンヤリとその聲に聴きほれてゐた。

式は、だが、きわめて簡單で、すこしもよどみなくズンズン搬ばれた。

僕等はみんなが出て行つからも後に残つて周囲の壁にかけられてゐるキリスト受難御一代記とも云ふべき油畫などを見物して、六千人を悠に入れると云はれるその大きな會堂の中があまりに氣持がいいので、出るのが嫌になつた位であつた。

長崎はまだ書きたりない——春雨に降られながら東明山南京寺に詣づる話や、僕のおふくろの舊友「東洋日の出」の主筆S氏に會見のことや、長崎第一流の鼈甲屋江崎へ押しかけて怪しげな悪筆をふるつて書きなぐつた短冊を鼈甲細工と交換してもらふ話や、その他色々あるがこの邊で一先づ擱筆する

### 島原と天草のグリンプス

長崎の停車場前の蕎麥屋の二階でKと最後の別盃を酌んで午後八時何分かの汽車へ乗つた。

Kは長崎の三菱船渠へ務めてゐる機械工だが素晴らしい詩人的素質を持つた男で、小説を書かしても立派に一人前だ、——初対面からスツカリ肝膽相照らして、大方はこの男と二人で長崎の町をアチコチと彷徨して歩いたものだ、——長崎では色々有名な學者や先生達にも會つたが、——結局先き様でも御迷惑の事だらうし、コチラも肩の凝るやうな御つき合は一切御免蒙りたい方なので、大山白石の一行と別れてからはKと二人で至極氣樂に遊び歩いたわけだ。

諫早で乗りかへて島原へ着いたのがなんでも十二時近かつたことだと思ふ。初めてのことではあるし、闇の晩なのでまるで見當もなにもつかない、——唯だ詩人のS



が先年琉球へ出かけた途上一寸島原へ寄つたことがあるので、その時泊まつた港前の筑後屋と云ふ宿屋には操さんと云ふシンデリラのやうな娘があるから、島原へ行つたら其處へとまり給へ——と云はれたのを憶ひ出して、時間は遅くはあるし、着いたら早速其處へも行つてとまるより仕方はあるまいと考へてゐたのだ。

諫早から島原へ行く鐵道の沿線は一寸風變りな眺望をほしいままにすることが出来るのだ、——なにしろ有明灣に沿ふて汽車が走るのだから——それも支線の小さな箱汽車で速力も早くはないから悠々と風光を味ふことが出来るのだ——恐ろしく勾配の美しい山や、銀泥の干潟の多い海邊を見ながら迂廻して走るのだ、——これは二回目に僕が出かけた時に始めて知つたのだが、——見物をするなら闇の晩の夜汽車はやめた方がいい。

終列車の爲めか下車する人も極めて少なく、宿屋の客引らしいのが二三人提灯を持つて、停車場に立つてゐた、——その中に僕は筑後屋と云ふ屋號を發見したので、近づいて見ると三十一三の短袖をきたおかみさん風の女だつた。

——君のところにお操さんと云ふ娘さんがゐる筑後屋さんかねといきなりきいたのでかみ

さんは吃驚して僕の容子を見てゐたが。

——ハイ、よう御存知で——と、この邊にはあまり見かけたこともあるまい僕の異様な風體をジロ／＼と眺めてゐた。

——兎に角、君のところ tonight は厄介になるつもりだから案内してくれ給へ——と、かみさんを促して、一向わけのわからない暗い寂しい港町をそれから五六丁歩いた。

宿は商人宿らしく至極安直らしいので、囊中極めて貧弱な僕は先づ一安心したのであつた。その晩は遅くもあるし、疲れてもゐたので、早速ねてしまつた。

全體が行きあたりバツタリな旅行なので、長崎まで来たのだからまたいつこんなところまでやつて來られるかわけがわからないから、島原と天草を來た序にグリンプスでもいから見て行かうと考へたまでの話なのだ。

島原と天草と云ふ昔からなんとはなしに傳説的な地名が僕を其處に引つぱつて行つたと云ふまでなのだ。——その辭、僕は今迄人の書いた島原、天草の紀行などをしみる／＼注意



して讀んだこともなければ、地理や歴史に對して深い研究的な興味などを別段、持ち合せ  
てゐるわけでもなんでもないのだ。氣紛れと云へば随分氣まぐれな話だ。

多少の好氣心を唆つた詩人の所謂シンデリラのやうな操さんはしかしあいにく四五日前  
から田舎の親戚へ行つたとかで留守だつた、——その代り手傳旁々來てゐる十七八の従妹  
とか稱するこんな宿屋の女中にしては少々上等な娘さんが、御給仕をしてくれたので、そ  
の人を相手にしてどこか特別に見物するところでもあるかときいたが一向要領を得なかつ  
た。

三角行の船が午前十一時頃出るので、それまでに僕は町を一通り歩いてみようと思つて  
朝飯をすましてすぐと出かけた——別段きいても見ず當スツほうにグルリと一廻りしてみ  
たが、さびれた靜かな港町と云ふ感じがしただけの話で、町の中を流れてゐるドブ水がま  
るで水晶のやうに透きとほつてゐることに驚いた位なものだ。

港の傍には白山山と云ふ小高い丘がある。其處へ登ればその邊一帶の風光を眺めること  
が出来ると考へたので、最後にそこへ登つて見ることにした。

晩春の少し曇つた如何にもおだやかな日和だつた。島原灣内の波は靜かで、背後に聳え  
てゐる眉山の姿もうすく霞み、ところどころに炎えるやうに躑躅の紅が眼に這入つた。用も  
ないのに朝早くこんなところをブラついてゐる人間は自分位なものなのだ。町の人達はも  
うそれ／＼その日のなりわいに忙がし氣であつた。人氣のない丘の上では微かな松籟がき  
こえてゐるばかり——

かれこれ小半時も丘の上で茫然として思ふさま風光を鑑賞し、さてやがて、登つた時と  
は反對な方面へ下つて見ようとブラ／＼と降りて來た。すると半腹に僕は一軒朽ちかかつ  
た藁家根の家を發見したのであつた。

家の中はヒツソリとして人のゐる氣ハイもない。フト僕の眼に這入つたのは入口に貼り  
付けられた紙切れなのだ、——その紙切れにはなにか歌のやうな文句が記されてゐるのだ  
近よつて見たが昔風の如何にも御家流と云つたやうな筆つきの文字で、紙の地もよごれて  
ゐるのでなんと書いてあるのだからよくわからない——しかし、それが三十一文字の歌であ  
ることだけはわかつた、「けふも降るまい、あすも降るまい」と云ふ下の句だけが辛



うじて讀めたが上の句はなんととしても判断は出来なかつた。

全體なんの爲めにこんな紙切れにこんな歌を書いて貼り付けて置くのか、この家に住んでゐる人間は全體何者なのか？——と、僕の好奇心は早速頭を擡げ始めた。

僕はしばらく立つて家の中の様子を覗つてみたが、どうも誰れもゐるやうな様子がないのだ、——變だと思ひながら僕は思ひ切つて、

——御免なさい——と云ひながらソツと門口の障子を開けてみた。

一間四方位な其處は土間で、家の中は甚だ薄ぐらく、上り框のすぐ傍に爐がきられてあつて、その向ふに一人の老婆がむさくるしいフトンにくるまつて寢てゐるのだ。

彼女は頭をあけてこちらを向いたが、見慣れぬ様子の人間に別段驚いた風もなくヂツとしばらく僕の方を見てゐるが、やがて耳元へ指をやつて二三度注意を促した。

——お婆さん一人ですかね——と少しく聲の調子を高くしてきくと、彼女はうなづきながらフトンから身體を起して、——どちらのお方様ですか——と覺束ない調子でやつと口を開いた。

——東京から來た旅の人間ですよ、——

このトウキョウと云ふ言葉が彼女の耳にインスピレーションのやうに響いたのだ。

——まああなた様はトウケイの御方ですか？これは御珍らしい——と、殆んど表情を失つた顔色に一點喜びの色がほのみえて、彼女は床から這ひ出して來たのだ。

——まあくゆつくりなすつて頂きたい、色々伺ひたいこともありすから——と云ふ彼女の言葉つきやアクセントから、この老婆が、たしかにこの島原の土地の人間でないことだけはわかつたのであつた。

僕は先づ最初に門口に貼りつけられてある歌のいわれから尋ね始めたのだ。するとお婆さんは微笑して、あれはおまじないだと云ふのだ、——

——あなた様、あれを貼つて置きますと、不思議に雨が降らないので御座いますよ——と云ふのだ

天竺にいかなる雲や晴れやらん

今日も降るまい明日も降るまい



と彼女はその歌を昔風によんできかせるのだ。これは婆さんの作つた歌かときくと、昔の御公卿様の歌だと云つて説明してくれた、——それから

——あなた様は御歌がお好きでいらつしやいますか——ときかれたので、好きな方だと云ふと、彼女はそれから自分が若い時に作つた歌だと云ふのを——如何にも懐古的な調子で思ひ出しては節を付けてはきかせるのだ。

そのうち僕は、彼女が歌の話の途中に時々——シンキョウイン様が、——と言ふ言葉を繰り返へすのに氣づいた。

——シンキョウイン様とは誰れのことなのですな——と、僕は不思議な感じに引きづられて彼女の素生が知りたくなつたのだ。

——あなた様、それは松平の御殿様で御座いますが——と、世の中にシンキョウイン様を知らない人間もあるのかと云ふやうな表情をして彼女は僕を眺めたのだ。

あぢさるの青葉繁りて紫の

色うつくしき庭の面かな

それからある時、殿様が尾花になんとか云ふ歌をつけて彼女に與へたのだと云ふ、その時の彼女の返歌に曰く、

武藏野のめぐみに出でぬ初尾花

心の露ははてしもぞなき

と申しあげたのださうだ。時に婆さん芳紀まさに二十三歳。

なんのことはない、歌が好きだとつまらぬことを口走つたので、僕はこの婆さんから飛んでもない大時代のノロケを拜聴することにまで立ち到つたのだ。婆さんは久しぶりで共に語るに足りる人間を發見したつもりかなにかで、逃してはならないと、次第に雄辯になつて彼女の身の上話を始めるのであつた。

この婆さんは名を荒木すま子さん當年とつて八十四歳（これは去年の四月頃の話だ）十六七歳で松平の殿様のところへ腰元奉公にあがり、やがて彼女の容色と才藝とが殿様の御氣に召し、豫定の如く御手がついてお妾さんになつたのださうだ。幕府の瓦解に際し殿様が國許へ引きあげなければならなくなつた時、彼女は殿様に別かれることが出來ず一生



御奉公をするつもりで見ず知らずの九州の端までやつて来たのださうだ、——勿論それから彼女は一度だつて東京へ歸つたことはなく、死ぬまでは是非一度なりと東京の顔を見て死にたいと思つてゐたのだが。

——あなた様、もうこのやうに身體がきかなくなりましては、あきらめて居ります——それで、せめて東京の話でもきかせて頂くのがなにより嬉しいのだと云ふのだが、電車はおろか、鐵道馬車の通つたことさへ知らず、御屋敷がまだ淺草の門跡の前にあつたり、猿若町に芝居があつたりしてゐるこの婆さんの獨自な世界に、今の東京をなんと云つて紹介したのかまるで見當がつかない。勿論、彼女は新聞などは見たこともあるまいし、話をするのは土地のなんにも知らないおかみさん位なものだらうから、彼女の東京と云ふ概念は彼女の二十代の江戸のレミニセンス以外には到底出やうがないのである。

彼女は眞鏡院様——と云ふのは恐らくその殿様の法號なのであらう——に別れてから既に數十年、その後、この白山神社の神主に嫁いだのだが、その神主様が死んでから最早拾年あまりも経つたのださうだ。息子と娘があるのだが、——總領の豊磨？とか云ふ息子は

放蕩無頼で未だに行方不明——娘は熊本とかに片付いて時々来てくれるのだとか——その息子は婆さんの言葉で云へば——左工門の太夫元——とかをしてゐると云ふのだが、——つまり浪花節のマネエジャアをしてゐると云ふことなのだらう。その豊磨君は恐らく殿様の御落胤でもあるのであらう。

ところへ包を背負つた四十恰好の如何にも親切らしい元氣なおかみさんが這入つて来たこれは近所の人で、家の中さへ杖がなければ歩けないと云ふこの頼りない御婆さんの世話をしてゐるらしく、時々手のすきを見てやつてくるのだとのことだ。

婆さんにとつては雨の日や、風の日がなにより恐ろしく、夜もおち／＼眠れないので、夜になるとどうか早く朝日が照り輝やいてくれればいとそればかり心にかけてゐるのださうだ。例の歌を書いて貼りつけてある意味もまことによく了解されるわけだ。

しきりに引きとめる婆さんの相手になつて十一時の船に乗り遅れたら、又一晩この港にとまらなければならなくなるかも知れず、この世ではまたと遇ふ機會はとうていありさうにもない婆さんに別れを告げて丘を降つて来た。



別れ際に僕は神主さんの蔵書と覺しいボロ／＼蟲の食つた本の中から「浮世道中安樂傳授」と云ふ薄い冊子を一冊もらつて來た。

安樂先生と云ふ先生が浮世を安樂におくる傳授をすると云ふ看板をかけたので、そこへさまざまな人間がやつて來て、色々とその祕法を傳授に與かると云ふ筋なのだが、要するに心學の通俗的な比喩談のやうなことが書いてある本なのだ。——終りに、牛の角を羨望する馬がどうかして、自分の駿足に加ふるに威嚴のある立派な角が欲しいと云ふ心願を立てとう／＼思ひ通りに角を生やしたまでにはいいが、角を生やした馬は珍らしいと云ふので、その馬がやがて見世物にされ、香具師の食物になつて自由を奪はれた上、一生生き恥を曝らすと云ふやうな話などもあつた。

挿繪なども入つて一寸面白いと思つたので紀念の爲めにもらつたやうな次第だ。島原から三角までの航路は約二時間程だが油のやうなウルトラ・マリインの海上を船が滑べるやうに進んでゆく、近いところで眉山や、温泉の姿が手に取る如く、遙かに天草の島を眺め、その地名も知れぬ小島が到るところに散點してゐる有様は松島を思はせるがそ

の感じはまるで異つたもので、遙かにエキゾチックな味がある。

やはらかな春光を浴び、氣持のいい微風に吹かれながら僕はデッキに座はつてゐた。同席の人々のうちに丈の高い旅行姿の異人がひとり双眼鏡でたえず四方を眺めまはしてゐたその傍に一人の如何にも頑丈な洋装の女がアチコチ指さしながらにかしきりと説明してゐるらしかつた。女は日本人で三十五六の如何にもラシヤメン型の女で、その風貌から察するところ、將に天草出身の娘子軍の女傑の一人であるらしく、久しぶりでこの異郷の客を自分の故郷に見物旁々案内して歸へる途中でもあるのであらう、かなり亂暴ではあるが流暢な英語で饒舌つてゐた。彼女の太い指にはデコ／＼した金の指環がいくつか嵌められてゐた。

三角港に着いたのは午後二時近くであつたらうか、朝からうす曇つてゐた空は次第にくらくなつて、港に着いた頃から小雨が降り始めた。

熊本行の最終列車が三時何分かに出る、それに乗つてしまへば文句はないのだが、眼の



前にみす／＼天草を眺めてそのままにして置くのも如何にも残念なので、決心がつきかねてグズ／＼してゐる間に汽車は容赦なく出てしまつた。

三角は入江のやうになつてゐる如何にもピクチュレスクな港だ、すぐ前にも一寸した島があり、小松の生えた砂山が多く、別荘風の家なども所々に見える。海員相手の小料理屋が二三軒あるが、いづれも船料理と云つた體裁で、酌婦めいた女が微醺を帯びて棧橋を幾度か往復する姿が眺められた。やがて、その一軒から絃聲がきこえ始めた。靜かになごんだ海の上を男女の嬌めかしい聲と入り混じつて響き渡る糸の音を聞いてゐるとさすがに旅愁を覺えさせられるのであつた。

天草へ渡ると云つたつて何處と云ふ目標はないのだ。云ふまでもなく群島なのだから、一度に見物出来るわけのものでもない、——有名なのは縣廳の所在地の本渡とか娘子軍の産地として知られてゐる牛深とか云ふところだがこれは本島で、三角からはまだかなり遠いのだ。少なくとも六七時間はかかるこのことだ。——なにしろ懐の餘裕がないのだから、——そんな方まではとても行けさうもないので、出鱈目に一番近い大矢野と云ふ島へ

兎に角渡つて見ることにした。

向ふではボツボ船と云つてゐる發動汽船で、僅か二三十分程してその島へついた。もう日は殆んど暮れて、雨は止みさうもない。

其處は登り立と云ふところで、上陸すると小さい幌馬車が客を待ち合せてゐる、——ここへ行くのかと聴くとこれから二里程先きのエビトと云ふ村までゆくのことだ、——そこは島の内でも一番大きな村であるらしく、旅宿もあると云ふので、僕は本能的にその馬車へ乗つてしまつた。なにしろ雨具もなく、日か暮れかかつてゐるのにわけのわからない島の中をうろついてとまるところでもなかつたならそれこそ厄介だと思つたからだ。

馬車はせい／＼六人乗れば一杯で、島の狭い道をガタ／＼と走つてゆく。隣りに乗つてゐるのは品のいい爺さんで、早速僕になにしにこの島へおいでになつたのかと訊ねた。まったくなにして來たのだから自分でも判断に苦しむ自分は返答に差し支へてしまつた。

——なにかこの島に見るものはありませんか——と仕方がないので、見物に來たとでもいふよりしかたがなかつたのである。



爺さんは可笑しいのかハッハッと笑ひながら、

——別段、見るものはないが島では今躑躅が盛りでな——尤も此處は天草の中でも名高いことは名高い島ですが——それから馬車の中で色々この爺さんと話しながら、先づかう云ふ人間にぶつかつたことは、運がよかつたとひそかに喜んだ。

傳説によるとこの島は天草四郎の育つた島だと云ふことになつてゐる。島の人は天草四郎と云はず大矢野四郎と云つて居るとのこと、——その他、島の南端には森宗意軒の墓があるといふことまでその爺さんは話してくれた。これで自分はやつと助かつたやうな氣持になつた。その傳説の眞偽は兎に角、やうやくこの島に自分が渡つた目的がめつたかつたらだ。いくら無目的でもやつぱり差し當つてなにかないとあまりに心細い話だから。

幌馬車で恵比登へついたので、若い馱者は早速旅館に案内してくれた。ところが今夜は満員だからと云ふので断はられた。こんな島の旅館で客が満員などと云ふのは不思議だとしてよくきけば無理もない話なのだ、——その晩はその近所の島々から管轄區域の壯丁が徴兵検査の爲めに集まつて來たので僅かに二軒しかないその村の旅館は満員以上の光景

で知り合や、親戚のある若い人達はみんなその方へとまつて、それでも一杯だと云ふので馱者は氣の毒さうに、しかし又如何にも親切に、——どこか泊めてくれさうな家を探してあげませう——と近所をアチコチと奔走してくれた結果、やがて一軒の家を探し出した。それと見えて僕を其處へ案内してくれた。

その家には十二三位な娘と四十恰好のかみさんと二人ゐて——ついぞこの島では見かけたこともない異様な風體をしてゐる僕をウサン臭さうにそのかみさんは眺めてゐた。かみさんは色が赤黒く、眼が光つてあまり人相のよくない女だつた。女の子の母親にしてはどうやら似てゐないと思はれたが、後できけば叔母さんだと云ふことだつた。娘は學校へ行つてゐるだけに物わかりがよく、なにを聴いても、サツバリ要領を得ないかみさんの答辯にひきかへて、僕の話をよく了解してくれた。

娘に頼んで酒を買はせ有り合せの肴で一杯やつてゐるうちに疲れてゐるせいもあつたか恐ろしくよく酒が利いてきた。——次第に酒のまはるにつれて僕の第一印象から不愉快だつたかみさんに對する感情が露骨になつて來た。——かみさんは始終ブツブツ云ひながら



娘を吐り飛ばすのだ、——それがまた極めて些細なことなので、僕はみかねて——なだめるやうな口をきいたのだが、——それが又かみさんの感情をよけいに害したものが彼女の顔つきが恐ろしく険悪になつて来た——コツチも別段無理に泊めてもらふと云つた譯でなし、馭者が案内してくれたから来たまでなので——口ハで泊まらうと云ふわけではなし、天草の女はみんな不愉快なアマばかりなのかと——恐ろしく幻滅を感じ、——酔つたまぎれに、僕は某かの金を叩きつけて、早々その家を飛び出してしまつた。

雨は降つてはゐるし、暗くはなるし、飛び出したものさして何處へ行かうと云ふアテもないので——もう一度旅宿へ出かけて理由を話し、臺所の隅でもいいから寝るところさへあればいいのだからと——無理にも談じたら、商賣柄断りもすまいと二三丁目歩いてるうちにフト先き程馬車の中で話しをした品のいい爺さんのことを思ひ出した。なんでも爺さんの家はこの村でかなり大きなよろづ屋で、タヅ屋とか云ふ家だと云ふことを記憶してゐるので、——ヒョツと泊めてくれまいものでもない、——二三軒尋ねくつて、やうやくタヅ屋を探しあてた。まだ九時近くなので爺さんの家は寢てはゐなかつた。

爺さんは奥から出て来て僕の顔をみると——やあよくおいでだ——まあおあがりど如何にもニコ／＼とアイツがいいので、——僕は先き程からの憤懣を一度に爺さんにブチまけた、——するとそれは御氣の毒だつた、——その位なら始めからワシの家へおいでになればよかつた、——と、やがて奥の離れへ案内して、注文もしない酒を早速出して御馳走してくれた。自分はその酒の味を未だに忘れることは出来ない。きけば柳川で出来る酒なのださうだが、實に豊醇な濃厚な味をもつてゐて、油のやうにべたつき、舌の先きへ甘みがいづまでも残つてゐる——噂にきいてばかりゐる生一本と云ふのは先づこんな酒のことを云ふのだらうと後でいつまでも感嘆したものだつた、——僅か一合半ばかり飲んだのだが——殆んど前後不覺になつて、爺さんを相手に、遂には大聲を張りあけて歌まで唄ひ出してスツカリいい機嫌になつてしまつた。

翌朝、眼を覺ました時はさすがに少々氣まりのわるい思ひをした、——よろづ屋はかなり大きな家で、家族も多く、娘や女中らしい女達が僕の顔を見てクス／＼笑つてゐるのには閉口した。



——昨晚はだいぶ御きけんで、——と、爺さんは夙に起きて一用事すましたと云ふやうな顔をしてやつて来た。きけば僕が最初に行つた不愉快なかみさんと云ふのは島の者ではなく、つい最近熊本から移住して来たので島のことにはなんにも知らないばかりか、近所でもあまり評判のよくない女だと云ふことをきいて——僕はヤット幻滅をとりかへしたやうな氣持になつた——雨はまだ止まず、小降りではあるが降つてゐるので、今日も一日ゆつくりとまつて行つてはと云はれたが——僕は辭退して出かけることにした。失禮だがほんの志のつもりで金を出したが、爺さんはなんとしても取つてはくれず、——これも御縁だから又この次なにかの折に來られた時に——と、どうしても受取つてくれないので、僕は仕方なしに御禮のつもりで惡筆をふるつて置いて來た。

例の宗意軒の墓のあるヤナギと云ふところは其處から約三里弱で、その港から出る便船にはゆつくり歩いてても間に合ふと云ふので、僕は午前の十時頃タヅ屋の家族に別れを告げて恵比登の村を出た。

雨は次第に晴れて薄日さへ射して來た。島の道は坦々として歩きよく、至るところに躑

躑が咲いて、晝近くなつた頃にはまつたく雨は止んで、頼白の長閑かな聲さへきこえてきた。

道は一筋道で兩側には松林や小高い丘陵が連続してゐる——しかし殆んど人通りはなく村を外れてから一里ばかりは人家は見當らずひとりテク／＼歩いてゐると、變な氣持になつて來た——なんとなく夢のやうで自分と云ふ人間が東京から何百里も離れてゐる孤島の中をかうやつて歩いてゐるとはどうも信じられず——ほんの東京のどこの郊外でも歩いてゐるのではないだらうか——などと云ふやうな氣もしてくるのだ。しかし、あたりの光景はどう考へても東京の郊外とは似てもつかない。砥石の名産地であると云はれてゐるこの島の土は何處も大抵赭土で、すべてが恐ろしく明るく、オゾンに充されてゐる。なしる自分で今こんなところを歩いてゐると云ふことは家族でも、友人でも想像することさへ出來ないのだ。變に寂しく自由で、天外孤獨の味がしみ／＼としてくるのである。

約一里半ばかり歩いた頃でもあつたらう、一軒の百姓家が僕の眼に入つた——しかもそこから妙な眼聲と鼈聲がきこえて來るのである。——まつたく意想外だ——この孤島の小



さい百姓家で眞晝間三味線をひいてゐる人間は全體なに者なのだらう——早速例の好奇心が湧き出して心持足を早めて百姓家のところまでやつて来た。

中を覗くとその土間に立つて三味線を弾いてゐるのはたしかに女に相異ないが、洗足で、赤黒い脛を出し、背中に子供を背負つて、破れ傘を傍へ立てかけてゐる様子は如何にも奇怪だ、——彼女の顔を見るに及んでそれが何年にも御目にかかつたことのない典型的な替女であることがわかつた。彼女はメツカチの醜婦なのだ。さうしてそれを聴いてゐるのは三十近くのその家のかみさんらしく、手甲をはめて頭に手拭を載せてゐる。

僕の姿を見るとゴゼは三味線を止め、かみさんは慌てた——が、別段怪しい人間ではなくしばらくやすんで唄をきかせてもらひたいのだといふと、ヤツト安心したらしくゴゼの方はシャア／＼となにがいいかと早速註文までするのだ。

この邊で特別にうたふ唄はないかときいてみたがゴゼの坊は勿論土地のものではなく、きまりきつた博多節とか安來節とか云ふハヤリ唄のやうなものきりか知らなかつた。唯だ一つ如何にもゴゼがやりさうな面白い唄をきいたから、一寸紹介して置く、節はクドキと

かなんとか云ふのだらう。

蟹とナマコと口説をきけは

蟹がナマコに申すには

これやいなマコよくもきけ

手前の姿はそりやなんか

どちらが尻やら頭やら

いつもかはらぬノツペラで

そこでナマコが腹を立て

なにをぬかすかこれや蟹よ

テメいの姿もそりや何か

ドコが立やら横やら泡吹きたれて

歯を噛みしほり

色氣のないのに穴探し

ベコ／＼とダミ聲を張りあけてゴゼは唄ふのであつた。

ヤナギに着いたのが午後一時頃、日蓮宗とかの寺があるが、それは邪宗徒の宗意軒の墓とはなんの關はりもない。その裏山の端れの斷崖に近いところに一群の無縁の墓原がある。その中央の草深い森の中に風雨に幾星霜さらされて朽ちた墓石が轉がつてゐる。自分はひとりですれを宗意軒の墓にきめて携へて來た野花をそこに手向けた。自分はその斷崖から眺めた風景を今に忘れることが出来ない、——深い入江は湖水のやうにおだやかで、その中



に無数の奇巖怪石から成りたつた小島がある。遙か右手には雲で蓋はれた高峯が聳え、遠く名も知れぬ島々が見えるのである。——その特異な風光は到底自分の如き凡筆のよく描寫し得るところではないのだ。——自分ばかりの如き絶景を獨りほしいままに眺めるに忍びなかつたのである。

そこへ何處からともなくヒヨツコリと七十餘りのニコヤカな爺さんが現はれた。いかにもこの島のハエヌキの漁師だと云ふことは一見すぐとわかつた。自分の今ゐるところがエベス鼻であることがわかり、入江の中程にあるのが黒岩と云つて、昔宗意軒が屢々釣を垂れたと傳へられる岩であることもこの爺さんの説明によつて知ることが出来た。

岩作才六——と云ふのはその爺さんの名前——君はなほも親切に色々天草のローカルカラアに充ちくた言葉で島の名を教へてくれるのである。曰く。

ナガサレのアカハゲ、カガシマ、ウヤナギ、ソゾオジマ、ヒガイのタカモク（ヒガイとは東と云ふことだ）ヒアンチ下のウトバナ、上のウトバナ、——雲際に聳え立つのは雷神を祭つるオイダケ山と云ふのである。それ等の言葉そのものに既に云ふべからざるニユア

ンスが含まれてきいてゐると、まるで一種メロディアスな歌をきいてゐるやうである。

エベスどんの鼻から眺むれば

烏賊つる船が二三バイ

イカは釣らずにフクをつる

釣られたフクが物語る

釣られてサカナにしようよりも

他にイカタコナマコチンノイオ

わしは牛深のまと飛ぶ鳥よ

錢は持たねどかほくと

牛深さしのいたならば

戻りにや本渡の瀬戸かちわたり

以下略——みなこれ岩作氏の賜物である。船を待つ間、港の旗亭に岩作君を伴ひて共に焼酎を啣る——快極まりなし。

因に、宗意軒はこの土地の人々よりオコリと安産の神様にされてゐる。エベスは殆んどこのわたりの産土神とも云ふべく、恰も路傍に道祖神の如く祭られてゐるのだ。なほ記すべきことあれど、他の機會に譲る。



かれ等果して何を求めつつありや？

西洋の諺に “Something is better than Nothing” と云ふ言葉がある。つまりなんにもないよりも少しでもあつた方がいいと云ふ意味である。

美術が大衆にとつて必要であるか、ないか？ また現代に於て美術が大衆にとつて如何なる位置に置かれてゐるか？ と云ふところの美術とは廣義に解釋しての美術と云ふ意味であるか、或は主として繪畫を意味してのそれであるか？——それ等の點を先づ明瞭にした上でなければ、與へられたる問題に對して充分な説明を加へることは出来ないかも知れないのである。

大衆とは勿論現在日本の社會に生存する大多數の民衆と云ふ意に解釋して差支ひないことと思ふ。ところで、現在日本の大多數の民衆が如何なる生活狀態の下に置かれてゐるか

を先づ考へなければならぬ。

かれ等の大多數が果して美術を愛好してゐるか否かは先づ第二の問題として、美術を愛好し得る生活餘剰を有してゐるか否かを考へる時に、私はそれに對して明らかに「否」と答へないではゐられないのである。

まつたくかれ等、否われ等にとつて、現代の日常生活は生か死かの恐るべきライフ・ストラッゲル以外のなものでもないのである。まつたく美術どころの騒ぎではなく、パンそのものの争奪に日もこれ足らざる有様である。

若し今一人の賢明なる爲政者が現はれて、予に問ふに如何にせば日本大衆の審美的精神の向上を計り得るやをもつてするならば、予は直に「かれ等に先づ充分なるパンと時間とを與へよ」と答へるに躊躇しないであらう。問題は先づそれから後のことである。

現在の大衆にとつて美術は寧ろ不必要であると私は斷言したのである。美術は現代に於けるが如く一部特權階級の獨占的玩弄品であつてはならぬと云ふ説は理屈としては如何にも尤も千萬な理屈である。しかし、理屈はどこまでも一片の理屈にしか過ぎないのであ



る。世間一般の大衆は決して美術品などを要求してはならないのである。否、恐らく所謂大衆文藝をさへ要求してはならないであらう。

さればわが國の大衆は日夜生活の勞苦の爲めに苛まれて、何等かれ等の心を慰めるべき精神的娛樂なしに生活してゐるのであるかと云ふに、それは又大に然らずである。

まことに現代はキネマとラヂオの世界である。殊にキネマの小屋は民衆にとつて唯一無上の殿堂と云つて然るべきである。其處にはかのワグネルさへ夢想だになし得なかつた綜合藝術が嚴として存在してゐるからである。諸君、試にかのスクリーンの上に現はれる映像を瞑目して、考察し給へ、そこには立派に活ける彫刻と、繪畫と、自然の風物と情緒とが躍動してゐるのではないか、更に音楽と現實的な興味さへがそれに附加せられてゐるではないか、現代の若き男女にとつて、これ以上の理想的な綜合藝術の殿堂を與へることは不能である。かれ等の大多數はこれによつて充分な満足を得てゐるのである。

かく云へばとて、私は美術無用論を唱へるものではない、唯だ大衆に直接不必要なる美術の鑑賞を強ふる必要がないと云ふまでである。のみならず、文學美術の如きは各國民の感

覺教養の程度に従つて、その鑑賞の程度を甚だしく異にするものである。

美術を鑑賞し得ることと、美術品を所有すると云ふことは全然別個の問題である。世の多くの有閑階級者等がなん等審美的の欲求なくして、徒らに優れたる美術品を占有してゐることは、たしかに怪しからんことに相異なる、しかし、われ等大衆にとつてはそんなことはまことに屁の如き問題である。加之、かれ等の所有にかかる所謂美術品の多くは大抵その價値に於て骨董的價格に換算し得ると云ふに止まり、實際に於てはわれ等の現實的要求からは遙かに遠いものが多いのである。

大衆は大衆として若しかれ等が眞に審美的要求を持つに至つたなら、自づからかれ等の間にあつて、その欲求を満足させるに足る藝術を創造するであらう。

われ等は今一切の物欲し氣なる言説を排すべきである。藝術家は各自の信ずるところに従つてその創作に精進せよ！ 彼は世の有閑階級と大衆の如何なる作品を要求するかに關して毫も顧慮する要はないのである。

大衆は果して美術を痛切に要求しつつあるか、否、眞にかれ等の自由をさへ欲求しつ



ありや否やさへ甚だ疑はしいものである。

蓋し編者の意は有閑階級的美術を解放してより大衆的ならしめよと云ふにあるらしい。

“Something is better than Nothing”

### うんざりする労働

どんな人間でも、労働の嫌ひな點で、僕にかなふ人間はるまい。第一、そいつがどうしても避けられないときてゐるから、益々僕は考へただけでも嘔吐を催したくなる。實を云ふと僕は最近の半年と云ふもの、日曜をひつくるめて一日十六時間働らきつづけてきた。一寸嬉しいウソみたいだが、實際胸糞のわるくなる事實なのだ。

働らくと云ふことは、まったく世にも恐ろしい現實なのだ。ありがたいミロクの世界と云ふ奴はいつでも地平線の向ふ側にあるのだから助からない。僕等は單に野蠻な資本主義時代に生きてゐるばかりだ。餘儀なくほんの僅かばかりのおこほれを頂戴する爲めに働らかせられてゐるのだ。

今の世の中に生きてゐる以上、誰れだつて物質的ならざるを得ないぢやないか？ 今の



世の中の中で価値があると思はれてゐるのはマテリアリズムばかりなのだ。大抵の人間はそれだけしきや、わかちやるのだ。この耐らない泥沼の中で、藻掻かなけりやあならないとなると、どうしても、御無理御尤もでそれに降参するより道がないのだ。マテリアリズムと云ふ奴が僕等をみんなシワン棒にしてしまつたのだ。

つまり、なん等かの意味で、商賣をするか飢えるかだ……飢えるどころか、うつかりすると水も飲めなくなる。僕は自分ではなにか恐ろしく素晴らしい、イリエンジョンを描き出さうと思ふが、生きる爲めにはそんなことを悠々とやつちやられないのだ。いや、書かなんてことより、出来るなら素晴らしく生活してみたいのだ。勿論、僕自身の生活は世の中に對して別段エッセンシャルといふわけぢやないが、僕にとつちやのつぴきならないネセシテイなのである。

生きるると云ふことは享樂すると云ふことだ。神聖の貧困の道ばまことに惡むべきである。快樂の主たるものは戀愛とスポーツで、それが總括的でもあり、相互に絡み合つてゐる。

たとへば、僕がブルジョアで庭園を持つてゐるとする。偶々庭師の小屋の釜がこわれたので修繕が必要になる。すると、遊んでゐる體格の頗ぶる立派な煉瓦工が、彼の腕前を見せると云ふことになる。彼は或る天氣のいい朝にブラ／＼しながら、しばらく思索した上で十二シリングのジョップを引き受ける。しかし、翌日になると、ひどく寒い。おまけに雨だ。彼は仕事をやすんでストーブにあたる。その翌日になると、彼は失業手當をもらふことを考へ始める。

僕はどんな理屈から云つても、彼をかくも非難しやうとは思はない。人間は自體働らく本能をもつて生れてば來なかつたのだ。彼は止むを得ざる爲めに働くのだ。

ガツチリした煉瓦工の失業手當と、共稼ぎの妻君の賃貸とでたんまりした人生の至上必需品が具備せられる。彼の愉樂をなんで邪魔することかこれあらんやさ。彼のエモーションは彼のビールと牛肉と丸々した奥さんによつて満足せられる……恰度僕がドライ・トカイ（ハンガリー葡萄酒）やキャビヤアルや、その他によつて満足せられるやうにだ。勿論、彼と僕との趣味は異なつてはゐるが、彼と趣味を全然同じくしやうと云ふやうな馬鹿だつ



たら、早速、地獄のやうな勞役を開始しなければならなくなる。

失業手當なんと云ふものは、つまりデカダンスを承認してゐるものだ。刺激をなくせば虚勢される。自尊心の爲めでないとしても、自分の消化の爲めに、失業手當を受けると人間は結果として、勞働の上に一つの平均を與へることになる。偶々、英國の道路がひどく閑却されてゐる。幸ひ、政府は僕に失業手當を御下附には相成らぬ。そんなケチ臭い物を頂戴する位なら、僕は寧ろ、ランカスターの領地を五ツ程いただきたいものである。これは辻潤の説ではなく、友人デンニス・ブラッドレイといふ男のクダを一寸失敬したのである。(一九三〇、三月)

## 書齋

私はながい間、書齋らしい書齋も本箱もなにも持たないことをさも自慢らしく吹聴してゐる人間、ひとりなのです。文筆生活をしてゐながら、未だ生れて萬年筆と云ふものを買ったことさへないのをさも立派な趣味でもあるかの如く心得て暮らしてゐる人間なのです。

昔、私が二十歳時分の頃、小學校の代用教員に雇はれて月給金拾五圓也を頂戴してゐる頃のこと、女の先生と机を並べてカアライルの「サルタル・リサルタス」を苦虫を噛み潰したやうな顔をしながら讀み耽つてゐた時分、私は自分達が間借りをしてゐる薄汚ない六疊一間のことを考へて、泌々とひとりで落付て物を考へることの出来る書齋でも欲しいと思つたことがあります。



或る時、私はなにかの序に職員室で、そんな風なことを漠然と話したところ、みんなからすつかり嗤はれてしまつたのです。つまり拾五圓の月給をもらつてゐる代用教員が書齋が欲しいなどと云ふのはあまりにロマンチックな考へ方で、如何にもかれ等にとつては可笑しくきこえたにちがひありません。全體、書齋などを持つてなにをするのか？ 第一、書齋と云ふからには少なくとも書物の百冊や二百冊位はなければならぬ。それに、書齋で、全體、私のやうな人間がなにをやるのか？ せいぜい雑誌の二三種類讀むに過ぎない。書齋ズラがあつて耐まるか？——と云ふやうな腹がかならずあつたに相異ありません。私は自分が真から考へてゐたことを一笑に附してしまはれたので、恥かしくもあり、腹立たしくもあつたのです。私はその時分、心から色々な書物をゆつくり讀む時間と場所とが欲しかつたのでした。

私はなにも立派な書齋らしい書齋が欲しいと云つたわけではなかつたのです。つまり自分が靜かに落ち付いてゐられる部屋が欲しいと云ふ程の意味に過ぎなかつたのです。その後、私が五六年辛棒した結果、やうやく私の趣味を満足するに足る一軒の巢を見付

け出したのです。それは東京の西北の郊外にでした。其處に私は母と妹と三人暮らしでゐました。思へばその時が今迄の生活のうちで最も靜かな幸福な時だつたに相異ありません。

その家は丘の上に建てられてゐました。間敷は僅か三間で六疊と三疊と四疊半と云ふ極めて小やかな家でしたが、植木家が家主だけあつて、家の造りが極めて瀟洒で、庭が比較的廣く、庭木も椿とか南天とか紫陽花とかさまざま種類が植えられてゐました。四疊半が茶の間で、それが玄關のあがり口にありましたが、親しい訪問客は門を入るとすぐと左側の枝折りがありましたから其處から中の六疊に通すことにしてゐました。

奥の三疊がつまり私の始めて見付け出した理想的な書齋だつたのです。その部屋は中廊下に隔てられた茶室風な離れで、押入れも床の間も廻はり縁もついた立派に獨立した部屋だつたのです。

私はこの三疊の部屋にひとり立て籠つて妄想を逞しくしたり、雑書を亂讀したりすることをなによりの楽しみにしてゐました。



勿論、部屋の装飾と云つてはなにもありませんでした。僅かに床柱に花が投げ込まれてゐる位なものです。しかし、床の間には竹田の描いた墨繪の觀音と、その反對の壁には神代杉の額縁に填められたスピノザの肖像がかかつてゐました。その軸も肖像も兩つながら私のながい間愛好して來たものですが、今では二ツとも手許にはありません。自分はそれで頗る満足して暮らしてゐたのでした。唯だ自分の職業から來る單調さが時々私を憂鬱にした位なものでした。つまり、私には元來野心と云ふやうなものがなかつたからなのでせう。

今でも私はその郊外の閑居で過ごした夏の夕暮の情景を忘れることが出来ません。丘の下は一帶のヴァレイで、人家も極めて少なく、遙かに王子の飛鳥山を望むことが出来ました、なんと云ふ寺か忘れましたが、谷の向ふ側にあるその寺から夕暮にきこえて來る梵鐘の音は實に美しい響きをそのあたりに傳へました。樹々の間から洩れて來る斜陽、蝸の聲、ねぐらにかへる鳥の姿、近くの牧場からきこえて來る山羊の聲——私はひとり丘の上にはぐり立んで、これ等の情趣を心ゆくまでに味つたのでした。それはたとへ消極的ではあ

つたかも知れませんが、靜かな幸福を自分に齎らしてくれたのです。

その後、約十五六年の間、私は書齋などと云ふことを全然忘却してでもゐるやうにして暮らしてゐるのです。つまり、生活の土臺が安定してゐないからで、出來るなら、どんなところにも自分の思ふやうな仕事が出来ればよいなぞと只だ不精な考へ方をしてゐるのです。

由來、日本の社會様式や、家の構造は人間になるべく仕事をさせないやうに故意に出來てゐると云つても過言ではありません。殊に少しく實の入つた精神的な仕事をしやうなどと柄にもない心掛けを起したら、まつたくても立つてもゐられないやうになるに相異ありません。

私はたとへ家族があるにしろ、若し仕事でもする部屋を持つなら、別に離れた一室を持ちたいと思ひます。友達に獨身の工學士がゐますが、彼は會ふ度に、彼の空想するパチエラア・タワー(獨身塔)に就て話します。それは圓い塔で、變な螺線的な階段がついて、すべて立體的に、色々な構造を凡ゆる近代的科學の力を出来るだけ應用して——と云ふ條件な



のですが、彼のドラクタン・ファンタジーなので、来る度にいつもその内容が色々  
變化するやうです。今に、われわれの仲間の中で、私なぞの到底思ひも及ばない、新式な  
ラビリンスのやうなアトリエを建てて見せてくれる人がキツトあるにちがひなからうと私  
は別になんでもないやうに考へてゐるのです。

私は方丈記時代の人間ですから、それを見物して自分が興味を持つだけに留めて、自分  
は竹の柱にカヤの屋根のやうな吹けば飛ぶやうな一間に寝ころんで秋の月でも眺め虫の聲  
でもきいて、さて尺八でも吹くことにしませうか。

## 無想庵のプロフィール

これまでも、無想庵に興味を持った人達から、度々「武林さんと云ふ人はどんな方  
です？」などときかれる度に、——その時の自分の勝手な氣持で、いい加減な棚卸しを  
やつてきた筈だ。しかし改まつて、活字にする爲めに、武林君の紹介をやるのはこれが始  
めてだ。武林君が洋行などして、ブチツトマドモワゼルイヴオンヌなどを御土産にしてエ  
ツチラ、オツチラと御苦勞にも「改造」の小説を書くために舞戻らずに——鵜沼あたりで心  
中でもやつてゐたら、——こんなお鉢は僕にまわつて來なかつたかも知れない、無想庵の  
口調を借りれば「一切これ因縁生さ——」

忘却來時道——混沌——猫と婆さん——An other Ken——般若——アーキンチャニヤ——



鳩居堂——番茶——ウイスキー——土瓶——深山聚落——摩訶止觀——ヘルプ！ヘルプ！  
アバロウキテシユバラアライトモのチンチヨウ——迅電光——擊石火——小式部——  
苦集滅道——六波羅密——ナウモフ——植物のやうに——などと、無数のボキヤブラリイ  
が私の頭腦の一角にしまつて在る Muson Lexicon を繰ると出て来るが——こんな單語のや  
うなものをいくら並べ立てて見ても、畢竟それは私自身の獨り合點に過ぎなくなる。之れ  
等の單語をバラフリーズして、更に懇切丁寧なデテールにわたるとなれば、僕も又第十何  
指かの方向へ歩るき出さなければならなくなるだらう。

いづれ武林君の寫眞でも載ることとは思ふが、體量二十貫餘りの、少し猫背の大男が自  
分の身體を少なからず持て餘して、この暑さに机に獅噛みついて、レギュアな原稿生活  
をやつて居るのはよそながら、御苦勞にも思ふが——しかし、獨身時代のアンニユイから  
は多分に解放されたことと——ひそかに僕などは慶賀してゐる次第である。

武林君の人生に對するスケプティツで、ニヒリスティックな態度は、昔から少しも變つて  
はゐらないやうだ——境遇から云ふよりも寧ろ、持ち前のテンペラメントと云つた方が適切

らしい、だが、何人に限らず、——一度この人生を突き詰めて考へたことのある人間なら  
この世を厭はずにゐられると云ふ方が不思議な位に僕などには思はれる。

武林君は恐らく、この二十幾年間、絶えず同じやうな問題に悩まされて、そのために苦  
しんで来たにちがいない。そして、人並外れて強烈な自意識の所有者は實に、その苦惱を  
どれ程深く噛みしめたことか——それは恐らく常人、以外の人にはわかるまい。且つて  
庶斷生活などと稱して、ミサントロープを眞向にふりかざした時でさへ、逆にどんなセン  
チメンタリズムが隠れてゐないと誰が保證することが出来るだらう。

だが、由來、人間の性格などと云ふものはいい加減、複雑なものだから、——特に近代  
人の分裂した心持は、さう一方に片附けることは出来ないから、又見る人によつて、その  
觀察が自づから異つて来るのだから、さう簡單に定めることは出来ない。

武林君の書く物を讀んで、少しばかり學問のあるプチブルジョアのデカダンの酔拂ひが  
退窟まぎれに、原稿紙にいたづら書をして、好きな手前味噌や、ノロケを羅列してゐるとし  
きあ思はない人もあるだらう——無想庵もいいが、あの時々出て来る、摩訶止觀！や、



野狐禪臭ひベダントリイにはあてられると云ふ人もあるかも知れない。第一態度が不眞面目だと、顔を盛めるモラリストもかなりあることだらう、みなそれ／＼の立場からは尤もな説かも知れない。——だが、ニヒリズムの暖廉に腕押しは無益である。

現象即實在——煩惱即菩提——色即是空なら、ニヒリストがいくら、アツベタイトが強く色氣タツプりで、案外素敵な「ミエボー」だつたりしたところで一向差支ひはない筈である。

## Mの出家とIの死

この間靜岡方面へ旅をした歸途沼津にI氏を訪ねて、宮島君の天龍寺入りをきいた。宮島君は天龍寺におもむく途中I氏を訪れたのだ。つい四五日の相違で會へなかつたわけだ。辻潤がきたら、これを見せてくれと云つて、勿論隨筆で二三枚書き残したものをI氏が見せてくれた。

その中の一枚は寒山詩中の一詩で「世有一等流云々」と云ふ文句で始まつてゐる詩だ。僕も寒山詩は時々讀むからすぐとそれがわかつた。結局は「茫然一場愁」と云ふ文句だ。日頃から宮島君の愛誦してゐるものに相違ない。それからもう一枚には、

辻潤文青

ウラ哲野狐禪



これに文句があるなら、やつて来い、いつでも相手になつてやるから——といふやうな如何にも例の宮島君らしい駄々ぶりを發揮してゐた。「文青」と云ふのは、僕が「文學青年」だと云ふことなのだ。ウラ哲と云ふのは辻潤の高弟をもつて任じてゐる男で、最近まで僕のところゐるたが、甚だニエきらん生臭坊主なのである。勿論、出藍で、先生が近頃では足許にも追つつけん徹底さを示してゐる。

宮島君が風呂敷包みをこしらへて、出かけて行つた姿はいかにも寂しさうだつた——とI氏は僕にその時の模様を話してきかせた。人間の心持と云ふものはさう單純ではないから、宮島君がどんな氣持で出かけたか僕はそれを想像してみてもハッキリはわからない。しかし、そこまで決心するまでには随分色々と悩んだことだけは推察出来る。

實は昨年の正月以來僕は宮島君から絶交を申し渡されてゐるので、ずつと會はずにゐたのだ。別段たいした理由もないのだが、なにかしら漠然としたギャップがいつの間にか僕等の間に出来あがつてしまつたのだ。あんまり仲がよすぎてお互にわがままを云ひ合ひ過

ぎた結果かも知れんが、なにしろ、僕も近來はいたく健康を害してゐる上に、性來の無精が愈々昂じて來たので、萬事面倒なことに耐へられなくなつて來たのだ。

僕はたいてい毎日ねころがつてくらしてゐるのだ。出来るだけタガを外して生きてゐる。小遣ひがなくなるとなけなしの本を賣つたりして暮らしてゐるのだ。頭をムリに酷使して身體や精神を痛めることにはあきあきした。どう考へてもわからん問題などをひねくりまはすこともつくづく厭になつた。こんな調子だから生きてゐられるのだ。如何にも人から見たら生き甲斐がない生活にちがひなからう。しかし、おほきに御世話だ、唯困るのは僕と一緒に生活してゐる母や子供だが、先づ飯は毎日二度位は食つてゐる。

春月君は如何にも可憐な理想家で、いつでも彼の純情をいたはつて居た。勿論、十分覺悟の上の死で、かねてからの君の理想を實行したわけで、ハタからとやかく云ふことはない。實に立派だ。僕は寧ろ羨望に耐へん。それになにより好いことは子孫のないことだ。それに花世さんもひとり立派に生活が出来る方だ。少しも悲しむことはない。春月君の遺稿をゆつくり十分と整理されること、一番死んだ夫君の靈を慰めると云ふものだ。



春月君の長篇創作「相寄る靈魂」の主人公もたしか、どこかの海へ投じて死んだ筈だ、海で死ぬことが、氏のロマンチズムであつたらしい。

震災後まもなく僕の出した「ですべら」と云ふ文集があるが、氏はそれを愛讀してくれ  
たらしいが或る時、話の序に「君の本をもつてこないだ江の島鎌倉の方を歩いていたら、  
恐ろしく自殺の誘惑をかんじた。どうも君の本を読むことはこはい——」と云つた。「さう  
かな——」と、僕はひそかに、自分の書いたものが左程までに魅力があるのかと内心ひそ  
かに得意にかんじたことであつた。實は僕の方から云へば自殺などしようと思つてゐる人  
間が讀んだら、死なずにすむにちがひないと考へてゐるのだ。自分は自分の人生觀を極めて  
露骨に表現してゐる、僕は自分の抱いてゐるニヒリズムのお蔭で生きてゐられると自分で  
は考へてゐるのだ。僕の愛讀者には病人や貧乏人や片輪者や、低人が多い、——僕は寧ろ  
それを誇りにしてゐる。ほんの僅一時間でも十分でも僕の書いた物を讀んで慰められ氣  
が轉じたとすれば、僕のミツシヨンは果されてゐる。僕は自分が病人であり、貧人であり、

低人であるが故に、自分と同じやうな人々と苦惱や悲哀を分かちあひたいと思つてゐるだけ  
だ。金持やスポーツのチャンピオンや、ゼゲンや、相場師に愛讀されることはこつちから  
御免蒙りたい。

僕の二月からやつてゐる「ニヒル」と云ふ雜誌に春月君は毎號詩を寄稿してくれた。いづ  
れも最近の心境をよく表はしてゐる。二月の末に珍しく萩原朔太郎君と二人で僕のところ  
を尋ねてくれた。それから最近仕事が片づいたら一度尋ねたいと云ふテギミをもらつた。  
僕も行きたいと思ひながら、たうとう機會を逸してしまつた。春月君は辻潤に對してかなり  
好意を持つてくれてゐた。まことに申し譯ない次第だが、僕の方は僕の友情に對して甚だ無  
頓着過ぎた。こんどもせめて「ニヒル」の四號を春月君追悼號にする位なことしきや出來ん。  
芥川君の死んだ時も、平常辻潤とでもつき合つて酒でも飲んで馬鹿々々しいことでも話  
し合つてゐたら、死なずにすんだにちがひないなどと考へた。春月君ももう少し晩年辻潤と  
酒でも屢々呑んで、不純な氣持を訓育したらもつと生きてゐたかも知れん。しかし、どつち  
がいいかわるいか、それは僕にはわからん。どつちでもかまはん。



宮島君も思ひ切つて坊主になつた、春月君も思ひ切つて自決した。悲愴だ、ヒロイツクだ——二人とも僕なんかたうてい及びもつかない熱情を持つてゐる。

僕はするぶんわがまま勝手な生活をしてきたが、しかし、おふくろやこどものゐる間はやつぱりかれ等の生活を十分の二なり三なり生きなければならぬ。かれ等が生きてゐるのは僕がどの位かの程度で自分を犠牲にしてゐるわけだ。もつともかれ等の立場から考へたら、かれ等こそ辻潤のひどい犠牲になつてゐるわけだ。しかし、これが生物のアイヨンロオと云ふ奴で、弱者がいつでも強者にいぢめられるのだ。自然はどこを見渡しても「イタチゴツコ、ネズミゴツコ」だ。

人間はいつの世でも慨して幸福になりながら過ぎる。自ら不幸をまねいてゐる方が多い。僕は自分ではオシヤカの弟子のつもりであるが、オシヤカは唯我獨尊的に彼の「幸福」を把握したのだ。彼のひどいどん慾は、更に進んで一切の衆生をみんな彼自身の如く幸福ならしめんと努力したのだ。僕は勿論僕自身の流儀に従つて幸福になるよりほか方法はない。

マルキスト等はまたかれ等の流儀で人類を幸福にしようとしてゐるのだ。

宮島君は辻潤を「文學青年」だと勿論戯談に嗤つた。あいにく青年でないことが僕にとつてなにより遺憾である。僕は死ぬまで「文學青年」らしく、いつまでも「文學」に溺れることが出来たら、どんなに幸福かも知れんと思つてゐる。しかし、僕はまだ女と一度も心中したことのないやうに、「文學」のために氣が狂つたり、自殺したりする程、「文學」を愛することの出来ないことが物足りない。いつでも云ふことだが「文學」を愛するべく、あまりに「酒」を愛し過ぎてしまつた。しかし、「酒」と心中する氣にはなれぬ。なぜなら僕はエビキエリアンだからだ。「酒」を享樂するには三度飯などを食つてはならない。僕は一日に一度も飯を食はんことさへ屢々ある。

宮島君が坊主の修業を積まれてエラクなつたら、僕はいつでも弟子になるつもり。だなんにせよ、舊い友達をひとりでも二人でも失ふことは寂しいことだ。そのうちおふくろも死ぬことだらう。諸行は無常だ、自然はまことに残酷だ、考へると飲酒はもつとも狡猾にして、カンマンな一種の自殺だ。しかし僕の如き弱者は、生きる上にそれ以上のよりよき方



法を發見し得ない。あるなら教へてくれ！ (一九三〇年……)

## Benjamin De Casseres

或は「インキ壺のタイタン」

人物の紹介をしたり、批評をしたりすることは由來、自分の得意とするところでもなければ、また興味とするところでもない。しかし、この場合だけは例外である。

彼の名前だけは偶然にも十七八年以前から知つてゐたのだ。當時ニューヨークで發行されてゐた高級藝術寫眞雜誌 "Camera Work" を偶々友人S氏のアトリエで發見したのであるが、その寄稿家の一人として自分は彼を見出したのであつた。雑誌はドイツ系のユダヤ人？ ステイグリツによつて發行されてゐた。寄稿家にはメエテルリンク、カンデンスキイ、ピカソ、マリウス・デザヤス、サダキチ・ハルトマンなどと云ふ連中がゐた。その當時の藝術運動に就て詳しく知りたいと思ふ人は最近——と云つても一昨年頃だと思ふ——にニ



ユウヨークで發行されたアルフレッド、クレインボルグの興味ある自傳「Troubadour」を讀むとよくわかる。

自分は彼の書いてゐる散文詩にひどく牽きつけられたので、早速雑誌をS氏のアトリエから持ちかへつて、彼の書いた文だけをノートに寫しとつた。それ等は昔出した「響影」と云ふ譯書の巻末に納めて置いた。

彼が如何なる人物であるかに就て勿論、自分は全然無智であつた。唯彼の名前から押して彼が純粹なヤンキーではないであらうと云ふ位な想像をするだけで自分は満足しなければならなかつた。

その後「Shadowland」(これも六七年前に廢刊された)と云ふ雜誌で、彼の書いた文章を二度讀んだことがある。屢々彼に宛てて手紙を書きたいと思ふ意志を持つたが、つひに性來の無精からそれを實行することが出来ずにゐた。

一昨年の四月、私は偶々丸善の店頭で彼の著書「Forty Immortals」を發見したので飛びつた程喜んだが、金八圓四十錢と云ふ價は私の貧しい財布にとつてはあまりにも高價であ

つた。私はその書の保留を店員に依頼し、直に地方にゐる年少の友I氏に書いてその書の購入を促した。彼は早速私の爲めにそれを購ひ求めてくれたのであつた。

自分はその書によつて、始めて彼の著書の數種を知り得たので、即刻丸善の店員に註文方を命じたのであつたが、遂にそれ等を手に入れることが出来なかつた。

自分は昨年春、風の吹きまわして洋行をすることになつた。巴里の客舎に落ちついて後、先づ安着の報告を家に出し、巴里來着を當時ニースにゐた無想庵に報じた。それから三回目に書いたのがユウヨークのジョセフ、ローレン氣付に出したベンチャミン、デカッサス宛の手紙であつた。自分は巴里に來て始めて多年の宿望を果すことが出来たのである。

約一ヶ月程してから私は彼の手紙を受け取ることが出来た。それによつて私は始めて彼に就て知ることが出来たのであつた。

彼は詩人であり思想家である。しかし、決して特別に新しい思想家ではない。彼の住む



世界には新舊の觀念は存在してゐないのだ。宇宙は不斷に旋回してゐる、太初より無限の變轉を演じて、永遠に流轉してゐる。われわれの存在はその間に瞬時の浮沈を示現してゐるに過ぎない、本體は虚無である。否、本體と名付くべきものすら存在はしてゐないのである。彼はヘラクリトと共に、又エクレシアストと共に舊いのである。しかし、同時に萬有そのものと共に新しくもあるのである。彼は「過去」の思想家でもなければ、また「未來」の思想家でもない。常に新しい現在の思想家なのである。

簡単に云へば彼は一箇のニヒリストなのである。さうして彼に共鳴する自分も亦依然としてニヒリストなのである。

同じくニヒリストと稱する人々にも色々な型がある。佛陀と老莊と、シヨウベンハウエルトとは等しくその性格を異にしてゐる。カツサアスはまたかれ等の孰れとも比較することの出来ぬ別個の存在である。彼は現に二十世紀の物質萬能の黄金都市ニウヨークの一隅にその獨自の存在を保持し、辛辣にして諧謔に富む彼一流のダヤボリズムを流露しつつ、一部知識階級を喜ばせてゐるのである。

彼は勿論決してポピュラな作家ではない、若し彼がポピュラであれば、今頃私の紹介を待つまでもなく、夙に日本にもその名聲を博してゐるに相異ない。この無視せられてゐる天才は嘗て自らを「アメリカに於ける出版せられざる最も偉大な作家」と呼んだことがある。彼は約二十冊程の出版すべき材料を有しながら、未だ僅かにその中の三四冊しか出版されてはゐないのである。當年五十七歳の彼はその生前に於て彼の著書の大部分の出版を見ることは恐らく不可能であらうと推せられる。

彼は私の想像した如く純粹のアメリカ人ではない、フィラデルフィヤのカツサアスと名づけられた小都會に生れたスペイン系のユダヤ人である。彼が一般的でない理由は彼の一種的な相異がたしかにその原因の一つとなつてゐるにちがひない。しかも、彼は自ら放浪の哲人スピノザの後裔をもつて誇りとしてゐるのである。さうして、彼の光明的な部分には確にスピノザの萬有神教的な思想の著しい影響を観取することが出来るのである。

彼は最初に「The Shadow Eater」と云ふ詩集を出してゐるが、僅かに再版されて今では絶版になつてゐるらしい。次に「きやめれおん」と題する論文集を出してゐる。それには特に



自分自身の書と云ふ断り書きがしてある。私はそれ等の二つとも日本に於て手に入れることの出来ないことを彼に報告したのであるが、二回目の彼の手紙の中に「きやめれおん」の數部が自分の手許にあるから、所望ならば進呈してもよろしいから、確定したアドレスを知らせてよこせと云つて來た。自分は多分秋頃までは現在のホテルに滞在するからと云ふ返事を出した。第三回目の手紙と一緒に彼は「きやめれおん」と彼の妻君ピオの著「ベツレヘムの少年」と題する基督をモデルにした頗る異端な小説を合せ送つて來たのである。

「きやめれおん」の中の「歴史」と題する論文中から數節を見本として譯出してみる——  
「社會主義者等はかれ等が經濟の問題を根本であると云ふ時、いかにも正しくある。歴史を支配するのは「御腹」の悲鳴である。暴動が起ればいつでもまづバン屋が略奪される。飢餓のシカメヅラが世界を威怖する。かつて滑瀆されたことのない唯一の神は食物である。食物に食つてかかつた無神論者はかつて見たことがない。  
「人間はパンによつてのみ生きることが出来る。恐らく神や、愛國心や、宗教は質物であ

らう。飢餓は現實である。飢餓は牙である、飢渴は匪徒である、歴代の諸王や法王は神の怒りより遙かに「御腹」の叛逆を恐れてきた。——

「歴史は唯一の超人を知つてゐる。それはラザラスである。空腹の憎惡に對しては、如何なる理念も、論理も、常識も沈黙する。それは一切の犯罪を義とする。それは凡ゆる宗教的、社會的、倫理的の教義の背教者である。一切の歴史は胃の腑をめぐる衛星の役割を務めてゐる。

始めに腹ありき、腹は人と共にありき、しかして腹は人なりき。

「……大衆は遂にデモクラシーに到達する！ 神聖なる王族の權能が大衆の聖權となる。王冠は驢馬の頭上から猿猴の頭上へと宿替へする。數百萬の奴隸共は糞尿の上に鎮座して、それを玉座の心得ていい氣になる。かくして、歴史の意義が遂に闡明せられる、スフィンクスはその秘密を投げ出し、われ等は神への糸口を發見する、アトムはその存在理由を暴露する。これこそ歴史的懷胎の九ヶ月目である。大衆は將に地上を占有せんとしてゐる。まことに地球は今や民衆に所屬する。されど星辰は永遠に詩人の所屬たらん。」



彼の友人ルーデンスは「きやめれおん」を次の如く批評してゐる。「きやめれおん」は眞にエピグラムとバラドックスの鑛坑であり、悲憤にして諧謔を極めた思想と情熱の豊富なる採鑛場である。その表現は悉く獨自であり、固有である。それ等の諸論文はすべて彼の思想建築の窓であり、それ等が彼の動的なギジョンの白熱をもつて輝やいてゐる。彼の著書は精神的自傳である。彼は彼の肉體の運動に關して何者をも語らない、それ等は單に彼の心的自我の記録である。それ等は宇宙間に散在する諸分子の如く屢々相錯綜し、衝突するかれ等は常に變幻極まりなさ諸相を呈するのである。彼は人間の演繹と歸納を逆に讀む癖がある。彼はこの方法によつて聯想の平凡な階梯を無視し、過去を現在と未來に轉換し、『時』を全體として翻弄する、……』

彼は亞米利加の最も近代的にして且つ歐羅巴的な批評家故 James Huneker の親友であるが、彼程に一般的には認められてゐないらしい、若し、現代の世界に於て、如何なる文學者を好むかと訊ねられたなら、私は眞先に彼を擧げるに躊躇しないであらう。なぜなら、彼は凡そ自分の知る限りに於て、最も自分と類似な思想と傾向とを有する人物だからであ

る。グールモンはその晩年に於て、彼を認め、彼の作品の二三を譯して、佛蘭西の文壇に紹介したことがある。グールモンはまたカツサアスを批評して「最も野蠻にして、最も獨自である、稀に見る逆説的な作家である」と云つてゐる。

私は彼の「Forty Immortals」から「スピノザ」と、「ギユスターブルボン」の二つを「近代風景」に譯載したことがある。なほ折りを見て、彼の作品のいくつかを紹介したいと考へてゐる。

兎に角、彼の如き人物や、ジエムス ブランチ キヤベルの如き作家がアメリカに存在することは甚だ不思議な現象でもあるが、かれ等の存在は決して無意味どころではなく、かれ等こそ最も對蹠的にアメリカを代表してゐると云つてしかるべきである。

彼はまた猛烈な反禁酒運動家で、機會あるごとに偽善にして俗惡平凡なる「Doodle-Goof」に挑戦してゐる。

最近彼はオニールの序を付して『否定の連禱』と云ふ書を出すと云つてゐるが、まだ出ないやうである。



甚だ簡單ではあるが、同好の人々の爲めに彼を紹介して置く。(一九二九年)

## 虚妄の正義

“It is his weapon of offence and defence” — B. Decassers

鴉々。喰人鬼のやうな爪を持つてゐる、眼が兇惡に光つてゐる。その上、意志は夕暮の海から、鱧のやうに泳いで來て、齒で肉を噛みつかうと云ふのだ。

この時代——屑と馬糞紙とブリキと薬との——に於てこそかかる神聖なる逆説者と、至極の憎惡者と嘲笑者と藝術の道化者とが出現するのであるとわがデカッサスは云ふのである。

著者は決して嘲笑しても、また道化てもるはしない。彼はソクラテスの假面？をかぶつて鐵板を叩きながら、提灯をブラ下けて、白晝のトキオに現れたのである。

彼は現代の日本を希臘末期の闇黒時代に比してゐる。そこで、人々が眞理を失ひ、信仰



もなく、權威もなく、至るところで、いたるに詭辯論者が横行してゐるのだ。その時流的な人物若しくはオツチヨコチヨイ等は輿論の喝采と名聲を博するために迎合的思想を唱へかれ等自らさへ信じてゐない時流向な曲辯や、奇説を盛んに論じて、愈々益々時代を混亂に陥入れる。この時、何人か時流の中に敢然として、正しき良心を持つてあらうか？ すべて聰明な人々は、もはや認識することを止めてしまつた。かれ等は詭辯家にもならない代りに、時代の指導者にもならなかつた。義人はすべて隠遁し、賢者は懷疑主義に隠れてしまつた。

けれどこれ等のピルロニストは、自ら懷疑の瞳を深くして、何物をも信じないと断定する時、その断定自身によつて矛盾を生じ、自身を危くすることをよく知つてゐる。それ故、またかれ等は、いつもこの點で態度を晦まし、信條のない卑屈の立場で、言語や行跡をこまかしてゐた。然り！ かれ等もまたごまかしてゐた。それ等の悟つたらしき隠遁者等も實にソフィストの同じ仲間で、薄闇の影に幽霊を出し、白晝の正義の前でおどおどしてゐる詐欺の交霊術師にすぎなかつた。

かかる闇黒時代には必ず時代を菱導するソクラテスが現はれて來なければならぬ。彼こそは時代の良心が要求する唯一聰明の義人である。彼はソフィストの逆手を用ゐ、論理のあらゆる裏返しによる奇説をもつて時代の押し寄せる浪と戦ひ、民衆の先入見を排斥し誤れる輿論を啓蒙し、一切の似非物を叩き潰すであらう。しかし、ソクラテスは彼自身に於て主張するべき、なんの新しきドグマや眞理をも掲げなかつた。彼はプラトンによつて繼がれるまで、一つの「無記名の思想家」であり、彼自身の哲學を持たざる一種の懷疑主義者として眺められた。人々は彼を目して、同じ詭辯論者の一族とし、虚無の世界に低迷してゐるニヒルの破壊主義家と考へた。

だが、著者は自ら現代のソクラテスであると自惚れるにはあまりに鋭い自意識の所有者である。彼はひそかに彼自身の卑劣と非方を嘆き、敗戦を覺悟してゐると云つてゐる。

著者とは誰れか？ わが「虚妄の正義」を歌ふ詩人萩原朔太郎である。彼はかつて「新らしき慾情」なる書を著した。それは、僕の數年來の愛讀書であるが故に、巴里の客舎に於



ても亦屢々それを繙讀したのである。

君は現在の日本に於ける詩人として何人を最も高く評價するか？——と問はれたら、僕はなん等の躊躇することなく、萩原朔太郎と答へるであらう。

又、君は現在の日本に於ける文學者として何人を最もよく好むか！——と尋ねられたら僕は再び萩原朔太郎と答へるに躊躇しないであらう。

なぜか？

蓋し各個人にとつてはその人の心により近い作家がより高い作家であり、より天分ある作家だからである。(アルツイバアセフ)

恐らく朔太郎は現在の所謂民衆と稱する大多數の賤民や、カフェの女給、ダンスガールその他、文士を招待せんとする首相等にはまつたく一個「無名な存在」であるに相異ない。

しかし、「無名な存在」であらう彼よりも恐らく、「昨日まで一管の尺八を携へて乞食を業とし、常に他人の財布によつて終日飲酒に溺没せる？」無能無類なるゲダイスト辻潤の

方が遙かに有名なのである。かくの如き人物によつて、敬愛せられ、評價せらるる朔太郎は恐らく至極の迷惑であるかも知れない。しかもその藝術的稟性に於て、彼は最も深く辻潤と相觸れてゐるのである。

彼は自らの詩的天才を棄てることや、否むことも出来ない哲人の假空的冒險を常に経験してゐるのだ。彼は勿論職業文士にもなれず、西田某の如き、最もらしく部厚な哲學的著作をもなし得ないであらう。しかもまた、日常茶飯な愚劣なる瑣末事を牛の涎れの如く羅列する所謂小説家にもなれはしまい。彼は民謡や童謡も作らず、忠實にして勤勉なる一人の弟をも持たぬが故に、遂に「詩聖」にもなれないであらう。加之、最近に於て「生涯の最も悪い時期」に於て、結婚した彼はその妻と離別しなければならなかつた。重ね重ね不幸なる詩人朔太郎は、遂に僕の如き非詩的人間によつて彼の「詩」を認められなければならぬ。い羽目にまで落ちた。

しかし、彼は眞に不幸であらうか？ 否、そこに彼をよく認めて、彼の作物を出版する第一書房の如き特志の出版屋があるではないか？ かの若くして狂死せるマルドロールの



詩人ロオトレアモンの如きに比べては彼は幸福なるまで比較にはならない。

彼は斷崖に立つて、「今日では藝術そのものまでが時代遅れにならふとしてゐる」と、云つて嘆いてゐる。だが、朔太郎よ、君の藝術は決して時代遅れどころではなく（勿論、バラドキシカルではあるが）時代を超越するところのものである。

嗚呼！ 時代！ 時代！ うるさき物よ、汝の名は時代！ 時代！ などと云ふクダラヌ化物は刻々に過去の墓原に轉け落ちてゐるのだ。今から、百年と云はず、五十年、否、十年先きには全體如何なるものが残されるのか？

まつたく「一つの空虚」——藝術家等は、屢々その性格を持たないところの、單なる「輿論の器物」である。反對に、あり餘る性格と、不屈の意志と、鋭い神經と、不逞な厭人觀と、山猫と、犀と、豹と、その他異體の知れぬ燐光とに圍繞されながら、荒寥たる文明の大都市に、空腹なるスケルトンのジャズを蹂躪して、深夜に赤銅色せる月に向つて「吠える」一匹の山犬的魅惑を持つ詩人の存在することは限りなく愉快な極みである。

凡そ、文學の墮落を「社會の罪」（そんなものがあつて耐るものか！）になすりつけて己

れの無力を棚にあける腰抜け文士ほど滑稽なものが何處にあるか？

イデオロギイの藁人形や、メリケンのサンマなどをついで賣り歩くボテフリ共が横行瀾歩して、その日の餌を涉獵することは、別段さして咎める程のことではないが、ソイツをさも意義ありけに評判して騒ぎ立てる群衆の馬鹿さ加減はまつたく言語道斷である。

僕は最近著者から寄贈を受けた「虛妄の正義」を批評する積りでゐたが、一體、批評などと云ふものは由來「公平」と云ふ形容詞のつき易い物で、なんとかして褒めたり、ケナシたりすれば、それでも「公平」であるかのやうに思はれて、甚だ僕などの常に可笑しく感ずるところなのである。

「惚れたら」アバタもまたエクボになるのが眞理である。アバタとして客觀的に見るのをわるいとは云はないが、「アバタ」を頭から「醜い」とする先入的常識美學には賛成出來かねるのである。

なにはともあれ、鶴見先生御全盛？ の時代で、ヤキ芋は緊縮しても先生の本は日本の良家の家庭には是非備へつけなければならぬと云ふことは素晴らしい「時代」である。



賀川豊彦第二世もメリケンジャップも、「月もデパート」も「愛して頂戴」も「日本はどうなる？」も「天皇とプロレタリア」も「共産始末史」も、みんなそれぞれ立派なレゾンデモトルで、樂屋が多ければ多い程ジャズの効果は擧げられるのだ。  
そこで、僕は諸君に「虚妄の正義」と云ふ黒光りのコントラバスを一つ提供したいと思ふのだ。

### 狐

見よ！彼は嵐のやうに来る。その額は憂鬱に青ざめてゐる。耳はするどく切つ立ち、まなじりは怒りに裂けてゐる。

君よ！狡智のかくの如き美しき表情をどこにみたか。  
黄泉において理性を有するは、ただチレシアス一人。他は影の如く飛び行く者のみ。

### メカマをちどる

「夜となれば心みだれてたへがたし、屋臺おでんの蔭佇む」——と、これはアビダルのウラ哲といふ青年が——といつてももう來年はちやうどになる男だが——少しまはるとよくに口吟む短歌へ。彼はひとしきり辻潤門下の高弟をもつて任じてゐた男だが——今では出藍の譽れが仇になつて先生をややともすれば弟子扱ひにしたり、先生がやらうと兼々志して未だに娑婆氣が抜けきらず、下手の横好きにうき身をやつしてゐる間に一足御先きへ失敬してほんものの乞食坊主になつて、ついこなひだもしばらく静岡在の藤枝からやつてきて僕のところへ逗留し、

——辻潤が食へなくなつたら、今におれが托鉢をして養つてやる！、などと豪語してまたいつの間にか飄然と雲水の旅に出て行つた。



この男、昔、浅草は仲見世の横丁にある「都」といふ料理屋の有名な看板娘お竹さんに惚れてセッセと通ひ詰めたものだだったが、あひにく及ばぬ鯉のなんとやらで、見事ふられの哲と異名をとつて引きさがり、その後懊々として樂しまず、好きな御酒が御蔭様でいよいよ上達し、氣まで少々變になり、線路へねる眞似をしたり、猫入らずを四分の一ほど飲んでみたり、嘔き出してみたりして、色々失戀のロケーションを演じてゐるが或る日のこと翻然として悟るところあつたかどうか知らぬが「まだもあぜるばんぼう」といふ傑作を携へて僕のところへやつてきた。

——はじめからこちらに氣がないとわかつてれば誰もすとんと、すとなんと通やせぬ自分はないけりもいんきもいぬほれも普通以上持つてるもんだから、雨の降る夜も風の日もなんと諸君よ、通つたのであつた、……といふのが冒頭の書き出しで、それから幾々數千言お竹さんにふられたハロケのやうなグチのやうな文句を並べたてて、處女作として大いに文壇に乗り出す積りだつたがあひにく「中央公論」でも「改造」でもかかる傑作はあまりに毛色がかはり過ぎてゐるといふので——御掲載に相成らなかつたため、傑作はそのま

ま埋もれて、いたづらに紙屑として残存して今でもゐるのである。

話が本題から外れたが——夜の飲食店といふと必ずウラ哲の短歌を思ひ起し、短歌を思ひ出すとキツと彼の風貌を思ひ浮かべるのである。

辻潤が洋行する以前、彼は時々銀座のキャフェに姿を現はした、實のところ極めて稀にしかキャフェには出かけなかつたのだが、いつの間にか辻潤に會ひたかつたら、銀座の角（ライオン）に行けばきつとゐる——などといふゴシップが種蒔かれて、僕が恰も毎夜のやうにライオンやタイガーに出張してでもゐるかの如くひどく景氣よく思はれて恐縮したものだ。辻潤を少しく知るほどの人間なら彼は銀座などへはめつたに顔を出さず、偶々銀座へ出かけても、クロネコの細い横丁にある加六へこそゆけ、キャフェなどにはめつたに立ち寄りぬこと位は御存知なはずである。——思つてもごらんない、いくら氣が若いからといつて女給さんにのほせ上つて通ひつめるほどの僕は御年ではありません。

おでん——といへば近ごろは屋臺のおでん屋さんはずるふんと少くなつたやうだ。浅草や本所深川へでもゆかなけりや、一寸めつけるのに骨が折れる。



僕はつい二三日前まで目黒蒲田沿線（略してメカマといふのだが、佐藤春夫の尻馬に乗つていふわけぢやないが、メカマとは實になんとまあ下品な物のいひ方ぢやありませんか？）の大岡山といふところに住んでゐたが、大屋さんから立ち退きを仰せつけられたので癪にさはつたわけぢやないが、めんどくさくなつたので、家を解散して、目下住所不定になつてゐるのだが、明日あたり御天氣がよかつたら鎌倉に出かけ、都合で伊豆の天城へ散歩にでも行かうかななどと目下思案中なのであるが、地理的カンケイからいつて、先づ手近な大岡山から一寸振り出してみよう。

大岡山といふところは俗にオーカン山ともいふのだが——御存知か知らないが——なにしろ山といふ位だから東京の町にくらべると恐ろしく高いところで、海拔何千尺？、だか知らぬが、とにかく空氣が新鮮で、もう近ごろは朝夕めつきり御寒くなつて、貧乏人にはあまり感心出来ぬ住宅地である。震災後、藏前の高工がこの土地にひけたので、従つて高工の學生諸君が多く、殊に支那の留學生諸君の數ときたら人口の十分の七位を占めてゐるといつてもいいくらい——通りを歩いてても高さん、李さん、漢さんの類が横行して、まる

で支那の植民地みたいなかんじがして御湯に出かけても、李さんの徒黨が群をなして冷栓から水をジャアジャア出して、おかまひなしにうめるのだから、まつたく僕のやうなエドッコは僻易する——たまにタンカを切つてやらうかと思ふが、切たつてあまり通じもしまいし、なにしろ先は大勢なのだから、とてもかなはずはなく、仕方なしに我慢してヤケクソになつてあがる時、水をザブ／＼かぶつて出てくる。さうでもしないと風邪をひく恐れが多分にある。

なにしろそんな風で、飲食店も支那料理が七割を占め、飯店などといふのさへある。實はその「飯店」といふ言葉は、バリーで始めて御目にぶらさがつたのであつた。だが、さすがに支那留學生諸君の根據地の料理屋だけあつて、支那料理は實にうまくとまでいかないまでも安く、本場向にこしらへてあるから、一寸東京の町の中では食へないやうなものが食へる。——先達て無想庵の滞在中、彼は大に大岡山のレストラン・シノアに凝つて度御伴を仰せつかつたが——生れて始めて皮虎骨化酒などといふ酒を飲んだ。

この大岡山の驛を降りるとすぐ前に日本の蕎麥屋があるが——その二三軒おいたところ



に太阪式のおでんと赤い提燈をぶらさけた久利山といふおでん屋さんがある。主人はいたつて氣だてのいい年中恵比壽のやうにニコ／＼した赤ら顔のまんまるい感じのおぢさんで土地の人だが酸も甘いも噛みわけた人らしく、中々如才のない人で——先づおでん屋といつては大岡山でここ一軒位なもので、酒も（大岡山としては）まづ上の口だ。それにおかみさんが中々年増盛りのクラシカル・エロチシモで、甘つたるい聲を出していつも丸髷に結つて割烹着を裾さばき、夫唱婦從の實を發揮してゐる。小生などはかなりこのおでん屋さんには御厄介になつてゐる。丸髷のおかみさんには時々御機嫌を損じさせることもあるが御亭主は中々最負にしてくれる。

全體、東京のおでんやとはもとからあまりうまかあなかつたが、近年に至つて（それはおでんやばかりぢやないが）ことに低下し、關西で關東煮きと稱する關西流のおでんの方が遙かに優秀であることは僕の改めて吹聴に及ぶまでもなく左黨衆知の事實である。

豆腐、蒟蒻、ガン——これは先づおでんの三幅對で——恰もおでんの代表みたいだが、時勢といふものは恐ろしいもので、いつかこれ等の代表者は舊時代の形態をわづかに存し

てゐるのみで——只今ではフクロとかタコとか、兎などが鍋中に活躍してゐるのだから、まつたく驚かざるを得ない。しかし、なんといつても章魚は上方が本場で、關東煮やといふと道頓堀で有名なタコ梅を始め、みなタコをもつて頭文字としてゐることほどさやうにタコがおでんを代表してゐる。しかし、タコの代表してゐるのは豈唯だおでんのみにあらんやさ、「タコタコ」といへば——それかの緊縮自在なるノヴム・オルガノンをやサノヴならずとも聯想するではないか？

おでん——といふものは元來がプロレタリアの發明にかかるもので——昔は飯の代りにもしくは、惣菜の代りにしたもので、うちのおふくろなどはよく、僕のコドモの時分、

——一寸、おうめどん、御晝の御惣菜が氣に入らなかつたら、また横丁へ行つて、おまへの好きなおでんでも買つておいで——などとよく云つたものだ。それから、おでんで思ひ出したが、近ごろではあまりみかけないが、みそをつけたおでんを僕は少年のころ大に愛好したものである。僕はオヤツの御菓子代りに、よく味噌のおでん（これはコンニャクと里芋に限られてゐた）を買つて食べた。さうしておふくろから——甚だ僕のプロレタ



趣味をケイベツされたものだ。

——ほんとうにこの子はおなが屋のコードモミたいだよ——などといはれながら——。僕は自慢ぢやないが、ブルジョアの俸のくせに子供の時代からいい着物を着ることがきらひでいい着物をきせられるとおもてへ遊びにゆくのがイヤで——特に近所の僕のカサクの長屋のコードモ達に對して、甚だ面目次第もないやうな氣がして、いつでも強情を張つては家人をてこずらせたものだ。

——ほんとにこの子は妙な子だよと、よく家人一同から攻撃されたものだ。三つ子の魂百までもとはよくいつたもので、この年になつても依然として、僕の悪趣味がぬけず、今なほ時々おふくろを手こずらせてゐるのだ。

——折角洋行までしてかへつてきてほんとうにみつともないぢやないか？——と、僕はおふくろからつく／＼愛想をつかされてゐるのである。随分、おふくろ教育には骨を折つたつもりだが、持前のブジョアの血は如何とも度しがたく——思ひ出したやうに愚痴るのである。

僕は元來がエヂテリヤンといふわけでもないが、菜食が好きで、いよく異人とは縁が遠くなりつつあるが、——おでんでも近ごろは専ら、大根と銀杏とを嗜んでゐる、序に一寸申しあけるが僕は植物——特に樹木のうちでは一番銀杏を尊敬してゐる。次は蘇鐵である。いづれも精液が樹根から流れ出すといはれてゐるが、そんなことで、僕か尊敬してゐるなどと早呑み込みをされては困る——理屈をいふとまたながくなるから割愛するが——なにしろ、銀杏と大根のおでんが好きなのである。

高工の正門の前の横丁を入ると「壽」といふ小料理屋がある——看板には名物相撲料理といふ銘を打つてあるが、なにも相撲を料理して食はせるといふわけではなく——相撲を食つたらするぶん食べでがある事だらう——眞砂石といふ、相撲通ならウンあの男かとすぐ思ひ出せる程有名な關取りの非職がやつてゐるのである。ここでも僕らがゆくと「先生、先生——」と大いにもてるのであるが、持てるを幸ひ借り倒すといふわけではないがやはり足繁く御通ひになるうちには自然と借金をするやうになつて現在も——一寸驚く勿れ——金十圓ばかりの不義理があるので氣まりがわるくてゆけないでゐるやうな次第、も



つともこの男、因らなければ決して催促するやうな男ではないが、なにしろ、この不景気ではまつたくどこでもやりきれないから自然僕のやうな大先生にも催促するといふやうなことになるので、この原稿料でも頂戴したら早速「壽」の借金だけはすましてやらうと考へてゐるのである。

ここには丸ボチヤの東北訛りの女中が三人ばかりゐるが——これは多分眞砂石關の御國からつれてきたらしく——すべてイチヤイチヤイチャナ式美人（婦人公論）十一月號、藤澤清造の『貧故の冤罪』を参照せよ）で、瀟洒たるモダン・ボーイなどがゆけば一ペンはハチブされてしまふであらう。

その通りを一町ばかり行つて一寸ダラダラ坂を右の方へのほつた角に「ルバン」といふ喫茶店があるが、此處にはすばらしく可愛い姉妹の娘さんが二人ゐて——いづれがアヤメカキツバタといつた風で、まことに氣持がいいので、僕も近ごろ、コーヒーは飲まないがビールを一本位の時々傾けにゆく、上品で御アイソがよく、口数をきかすにどことなく感じがいいので、大岡山の學生連や文藝家（近ごろ、大岡山にもかの「若き辻潤」と稱せら

れる間宮茂輔先生を始めとして、相田龍太郎先生まつた海チャンこと字は香念木蘇穀大先生などといふオレキレキが控へさせられるのである）の間に専ら評判である。嘘だと思し召すなら電車賃は少々お高いかも知れんが、御序の節、よつてごらんなさい。尤も「ルバン」といふ名をきいただけで、讀者はかの世界に名高きアルセイヌ・ルバンを聯想し、さては純眞無垢の汚れなき少女のさまに装ひなした女白浪の巢窟と思ひこまれるかも知れぬが、ルバンはまこと強盜のそれではなく Le Paon —— 即ちフランス語の「孔雀」といふ意味である。まだあるが、先がつかへてゐるから大岡山はこの位で割愛する。

さて、大岡山から目黒に向つて、停車場を三ツ目、洗足、西小山、次は武蔵小山とくる。ここは名にしおふ小山で土地が遙かに低く、繁華なることメカマ沿線第一の都で、いはばこの邊の市場を代表し、銀座一丁目、二丁目などといふグランブールパールさへあるのである。

驛を降りて一寸左へ數歩——「日魯」といふカフェの横町を入ると左り側におでんやが二軒ある、——手前の方は西京式と銘が打つてあり、その先きどなりは「吞べイ」と稱して